資料

（昭和五十二年十月）

第二十二回「合宿教室」（雲仙）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

社団法人 国民文化研究会

—“合宿教室” 22年の歩み—

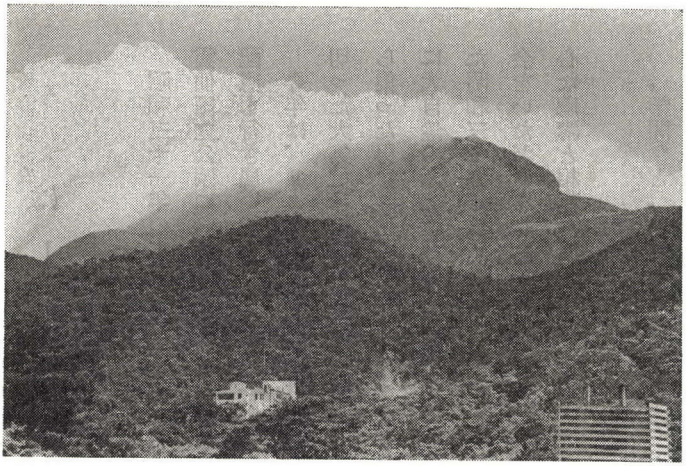
回数	年度	開催地	参加人員	主要講師
1	昭和31年	霧島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒樹
5	〃 35年	雲仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲仙	208	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大分	215	岡潔・花見達二・木内信胤
11	〃 41年	雲仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄
15	〃 45年	雲仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲仙	332	木内信胤・衞藤瀋吉・高木尚一
累計・参加人員			6,320名	

第二十二回 〝合宿教室（雲仙）〟 全参加者の感想文と和歌詠草

とき 昭和五十二年八月六日(土)から十日(水)まで

ところ 長崎県・雲仙国立公園「雲仙ファミリーホテル」

参加総数 三三二名



合宿開催地　雲仙・妙見岳の雄姿

目　次

〝はしがき〟に代へて……理事長・小田村寅二郎……2

大学別参加者数・その他の人数の内訳……5

「合宿教室」の日程表（四泊五日間）……6

第22回 〝合宿教室〟のあらまし……7

感想文と第二回目の〝和歌詠草〟……**参加者全員**……37

和歌詠草……合宿中の第一回目の創作作品……**参加者全員**……133

あとがき……156

カメラ・レポート 46枚（39ページから129ページまで、左ページに掲載）

〝はしがき〟に代へて

小田村寅二郎
（本会理事長・亜大教授）

昭和三十一年の本会の創立以来、第二十二年目を迎へての〝合宿教室〟は、本年は八月上旬の四泊五日間、九州・長崎県雲仙国立公園において開催いたしました。宿舎の「雲仙ファミリーホテル」は、三回目の使用でありましたので、宿舎側の配慮も行き届いてをり、この〝合宿教室〟独特の日程推移にも、きはめて円滑な動きが見られました。

今年は、リクリエーションの日が残念ながら曇りと夕立に見舞はれましたが、その他の日々は、終始快晴に恵まれ、澄み切った大気、目にしみ入るやうな青空、見渡す限りの展望、時折り見られる夏の力強い白雲の動きなど、全国五十一大学から集った男女学生、ならびに社会人参加者と、主催者側の講師・助言者を含め、**総人数三三二**名は、都会生活から久しぶりに大自然のふところにいだかれて、〝自然と人生〟を心ゆくまで味はったやうでした。また、遠路はるばる御来会くださった昭和三十五年以来連続十八度目の御出講で、七十八歳にかかはらず壮者を凌ぐお元気な木内信胤先生をはじめ、初の御来会をいただきました東大教授の衞藤藩吉先生のお心こもる長時間の御講義は、その一言一言をも聴き洩らすまじ、とする熱心な聴講と相俟って、今年もまた、この〝合宿教室〟ならではの、真剣な求道の場をかもし出したのであります。

〝学問〟と〝人生〟と〝祖国日本〟と〝世界平和〟といふ四つの命題は、本来、一連の関連性と脈絡とを保って説かれるべきものでありながら、それらがバラバラに教説されてゐるいまの日本の学園生活であってみれば、この〝合宿教室〟に参加された諸君が、〝学問・人生・祖国日本・世界平和〟の四つの命題を、わが身心に統一的に把握しようと努力してくださったことは、何より嬉しいことでした。はじめのうちは、いろいろの抵抗や反感を持たれた方もをられましたが、終幕に近づくにつれて、濃淡の差こそあれ、恐らく全参加者が、今日の学園における学問の知的偏重の欠陥について、何がしかの認

識を持たれたやうでありました。

それもこれも、さきの両先生の御講義はもとよりのこと、そのほか、日程スケジュールにぎっしりつまった諸講義が、知識の見せびらかしではなしに、いづれも講師の心魂からの体験告白に立った学問の開陳であったこと、それに加へて、七十余名に及ぶ助言者諸氏が、さまざまな職場から、しかも勤め先からの貴重な有給休暇を得てここに馳せ参じてくれて、各班を分担し、参加者一人びとりの持つ疑問に対して、懇切な対話を続けてくださったがためであります。もとより、ここに参集した参加者諸君が、終始ハードスケジュールを消化しながら、真剣に取り組んでくださったことは、何にもまして高く評価せられるべきことでした。

参加者諸君が、せめてここで、「学ぶといふことは、一体どういふことか」について、また「知識の伝達が主軸となってしまってゐる現代日本の大学は、果してこれでよいのか」、さらにまた「人と交るには、どういふ心掛けで自分の心を整へて相対すべきか」などについて、その心の底にもし少しでも感得してくださった何ものかがあったとすれば、それこそは、今後の学究生活で大切に生かしていっていただきたいところであります。おそらくそれを基にしてお考へくだされば、きっと、今の世の欠陥が一体どこに宿ってゐるかについても、必ずや気付かれる所があらうと思ひます。実は、その時点から出発し直してくださることこそ、今の日本が最も待望してゐる所だ、と思ふのであります。

さて、この〝合宿教室〟本来の課題であります所の〝**一人の真正なる日本人いでよ！**〟の念願のもとに、具体的には、

一　「国」とか「国家」とかを考へる場合に、抽象概念として考へがちになるのをやめるとともに、ともすれば、政治権力の面からだけで国・国家を考へたり、政治体制を優先して考へようとしたりする現代の学園内における一般的風潮の〝つまらなさ〟に気づいて、これらの迷蒙から、各人各様の勇気を出して、われとわが心を脱出しようと努力してくださったこと。

二　有史以来初めてとも言はれる「御在位五十年」といふ輝かしい今上天皇をいただいてゐながら、全国の多くの大学で「天皇廃止論・消滅論」が盛んに講説されてゐる現状にも鑑み、「天皇」についても、ピラミッドの頂点といふ風な浅薄な体制的な見方だけで見てしまふ愚さに気づいていただけたこと。そして、改めて歴代天皇の大御心を、残された無数の御製を拝読して、正確に、自らの心の中で味はふといふ勉強の方法に親しむことが出来、各自自身の心の中に、天皇さまの大御心にこもる真実を、具体的に直接的にお偲び申し上げようとする気運が生れてきたこと。

その他、「交友における真実の交り方」「読書に際しての輪読の意義」、さらには「読む書物の選び方の人生における重大な意味」など、さまざまな問題が、真剣に討論されました。

さて、ここに編したこの『感想文集』は、全参加者が解散の間ぎはに走り書きしてくださったものであります。全文をそのまま載せえなかったのは、紙面の都合でやむをえぬことで、ご容赦いただきたいと存じます。「全体の編集」は神奈川県の高校の先生、山内健生さんと広瀬清治さん、日産自動車・社員の古川修さん、建設省・技師の大岡弘さんの四人が担当しました。また「合宿のあらまし」のところでは、福岡県の高校の先生、小野吉宣さんと学生諸君が、また、「和歌詠草」については、大成建設・社員の山口秀範さんが、また「感想文の末尾の和歌」は、東急建設・技師の奥富修一さん、戸田建設・技師の青山直幸さんが、それぞれ多忙な日常をさいて、編集に協力してくれました。

どうか書かれた方々、お読みいただく方々、すべての方々に、全ページを通してご判読を賜はりたいと念願するものであります。なほさいごになりましたが、この合宿事業を行ふに当りまして、朝野から寄せられた得難い御支援に心から御礼を申し上げます。

「第22回合宿教室」記念撮影（参加者332名）於・雲仙ファミリーホテル（雲仙）

参加者

（学生班　五一大学）（洋数字は参加学生数）

東京大4　高千穂商大5　亜細亜大17　早稲田大6　東京電機大1　日本大3　防衛大2　駒沢大1　日本経済短大2　東洋大1　中央大4　高崎経済大3　慶応大2　東海大1　玉川大2　神奈川大1　松本歯大1　東京工大1　独協大1　大阪大2　皇学館大1　名古屋工大2　国立名古屋病院附属看護学校1　京都大1　京都産業大1　大阪芸術大1　富山大1　岡山商大2　岡山大4　岡山理大1　作陽音楽大1　広島大1　山口大1　九州大24　福岡大9　福岡教育大12　福岡女子大3　中村学園大3　九州共立大2　九州産業大2　福岡歯大1　長崎大26　西南学院大9　宮崎大1　大分工大1　九州女学院短大2　熊本女子大2　熊本短大1　熊本大24　熊本商大3　鹿児島大19

計二二二名（うち女子四〇名）

（社会人・教員班）　会社員　小・中・高教員　大学職員　団体職員など　計一九名

（招聘講師）二名　（大学教官有志協議会）三名　（国民文化研究会）六八名　（見学参加者）五名　（参観者）二名

（事務局）一一名

総合計三三二名

長崎県・雲仙国立公園・「雲仙ファミリーホテル」にて

第22回“合宿教室”日程表－昭和52年8月｛6日(土)／10日(水)｝4泊5日間

主催｛大学教官有志協議会／社団法人・国民文化研究会

時刻	8月6日(土)（第1日）	8月7日(日)（第2日）	8月8日(月)（第3日）	8月9日(火)（第4日）	8月10日(水)（第5日）	時刻
630		（起　床）	（起　床）	（起　床）	（起　床）	630
		（洗面・清掃） 朝の集ひ （国旗掲揚・体操） 朝　食	（洗面・清掃） 朝の集ひ （国旗掲揚・体操） 朝　食	（洗面・清掃） 朝の集ひ （国旗掲揚・体操） 朝　食	（洗面・清掃） 朝の集ひ （国旗掲揚・体操） 朝　食	
800		（8.00）	（8.00） 全員写真撮影	（8.00）	（8.00）	800
		（講　義） 世界経済調査会理事長 木内信胤先生	（8.30） （講　義） 東京大学教授 衛藤瀋吉先生	（講　義） 亜細亜大学理事・教授 佐久正雄先生	片岡健運営委員長あいさつ （8.30） 参加者 （全体意見発表）	830
	一班八名前後の班編成とします。会場を確認して下さい。学生参加者は、所属ブロックならびに所属班入口受付で、↓				（9.30） 合宿をかへりみて・理事長	930
1000		（10.00）		（10.00）	（10.00）	1000
1010		（10.10） （質疑応答） 木内信胤先生	（10.30）	（10.10） （質疑応答） 佐久正雄先生	（10.10） （班別懇談）	1010
1040		（10.40）	（10.40）	（10.40）	（10.40）	1040
1050		（10.50） （班別討論）	（質疑応答） 衛藤瀋吉先生 （11.10） （11.20）	（10.50） （班別討論）	感想文執筆と 第2回和歌創作	
		（12.00） 昼　食	（班別討論） （12.30） 昼　食	（12.00） 昼　食	（12.00） 閉　会　式 （このあと昼食）	1200
		（1.00） （論読導入講義） 福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎先生	（1.30） （和歌創作導入講義） 九大医学部・大学院講師 前田秀一郎氏	（1.00） 大教協の先生のお話 （1.30） （講　義） 国文研理事長・亜大教授 小田村寅二郎先生	（解　散）	100
	（2.30） 開　会　式 合宿趣旨説明と 合宿諸注意伝達	（2.30） （2.40）	（2.30） レクリエーション			
300	（3.30） （班別自己紹介） 「日本への回帰」 （第12集） （班別論読）	（班別論読）	和歌創作 海鷗めぐり 仁田原	（3.00） （3.10） （班別討論）		300 310
400		（4.00） （青年研究発表） 大岡　弘氏 中園　俊郎氏 味酒　君子氏				
500	（5.00） 夕　食 入　浴 散　歩	（5.00） 夕　食 入　浴 散　歩	（5.00） 夕　食 入　浴 散　歩 （和歌提出）	（5.00） 地区別・大学別懇談 （5.30） 夕　食 入　浴 散　歩		500
700	（7.00） （合宿導入講義） 福岡教育大学教授 山田輝彦先生	（7.00） （古典講義） 新日本製鉄（社員） 今林賢郎氏	（7.00） （所感・所見） 小野　吉宣氏 名越二荒之助先生 宗辺　正久先生	（7.00） （和歌全体批評） 国文研理事 青柳宏一先生		700
		（8.00） （8.10）	（慰霊祭の説明） 朝永　節之氏 （8.15） （8.30）	（8.00）		800
830	（8.30）					
840	（8.40） （班別討論）	（班別討論）	慰霊祭執行	（班別・和歌相互批評）		
			（9.30） （班別懇談）	（9.30） （夜の集ひ）		930
1000	（10.00）	（10.00）	（10.00）			
1030	就　床 （消　灯）	就　床 （消　灯）	就　床 （消　灯）	就　床 （消　灯）		1030

1. 同じ班の人々のあひだに限らず、全参加者一体となつて、心の交流をはかつていただきたい。
2. 上記の日程は、合宿中途において　部変更されることもある。
3. 集合は、敏速に行ふこと。
4. 講義の時間には、会場に講義開始5分前までに、必ず入坐すること。
5. 講義のはじめと終りは正坐し、司会者の指示に従つて講師に礼をすること。
6. 講義中は服装・姿勢に留意し、度を過ごしたやうな不作法は慎むこと。
7. 講義会場、自室をとはず、部屋に入るときは、スリッパをぬぐときに、必ず向ふむきに、そろへてぬぐこと。
8. 質問は、司会者の指示を与けて行ひ、質問者は、質問のはじめに
   ① 班名　② 学校名と学年（社会人は就職先）　③ 氏名を、明瞭な言葉で告げること。
9. 講義会場における席次は、常に移動するが、必ず班別に、指定の場所にまとまつて、着席すること。

第22回〝合宿教室〟のあらまし

第一日（八月六日・土曜日）

昭和五十二年八月六日、全国各地の大学・職場から三百三十余名にのぼる学生・青年・助言者たちが、合宿教室の開催地・長崎県の雲仙国立公園「雲仙ファミリーホテル」へと、はるばる集まって来た。会場玄関には「**友よ！　と呼べば友は来りぬ**」と墨書きされた横断幕が掲げられ、参加者一同を迎へてゐた。

開会式

〝第二十二回学生青年合宿教室〟は、福岡の西南学院大学三年、古賀直司君の力強い「開会宣言」によって、四泊五日にわたる研鑽の幕を開けた。「国歌斉唱」二回の後、《戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い生命をささげられたすべての祖先の御霊(みたま)》に対し、参加者一同は一分間の黙禱をささげた。

続いて、主催者の二団体を代表して、「国民文化研究会」理事長・小田村寅二郎先生が、先程の一分間の黙禱に触れながら、

「緊張してゐると、一分間といふ時間がどれ程長いものであるか、改めて感じさせられました。この一分間が積み重なって四泊五日の合宿を私たちは過ごす訳ですが、どうか健康に留意して有意義な五日間にして下さい」

と述べられ、さらに、

「大学の違ひや年齢の差などの、身に付いてゐる一切の箔を払ひ落して、自分の思ひを率直にぶつけ合っていただきたい。そして、その中から一人でも多くの友を見出してもらひたい」

と開会の挨拶をされた。ついで参加学生を代表して熊本大学四年の池松伸典君が、これまでの合宿教室での体験をふまへて、

「合宿教室の三つのテーマ、祖国・人生・学問は、私達にとって極めて大切な問題ですが、この機会に、自分達の生き方を見つめながら、真剣に思ふ存分、お互ひの思ひを述べ合はうではありませんか」

と力強く参加者に訴へた。

かうして、開会式とそれに続く「合宿諸注意」や、合宿の運営にあたる「委員の紹介」など、一連の行事を終へたあと、直ちに全参加者は各自に割り当てられた班室に入り、「自己紹介」ならびに「合宿参加の動機」などについて述べ合ひ、昨年のこの「合宿教室」

のレポートである『日本への回帰第十二集』の、要点数箇所を皆で一緒に読んでいった。

講義「問ひ直されてゐる学問――人間の再建のために――」

福岡教育大学教授　山田輝彦先生

最初の講義を担当された山田先生は、「現時点で、どうしても考へざるを得ないもの」として学問論を採り上げられ、戦後思想の問題点を説いてゆかれた。

先生は、まづ今年が終戦の年に亡くなられた戦死者の方々の三十三回忌にあたることに触れ、ついで、敗戦によって国家が音をたてて崩壊してゆく中で、いろいろな人々がそれにどう対処していったかを、明治以降の三つの特徴的な思想、すなはち、自然主義、自我至上主義、進歩主義のそれぞれを浮き彫りにしながら述べてゆかれた。そして、

「以上三つの思想に代表される現代思想の根底にあるものは、自分がこの世の中で物質的に恵まれさへすればそれでよいのだ、といふことであり、〝自分を越えたもの〟を認めることができない点である」

と、現代思想の問題点を指摘された。さらに先生は、

「戦後思想のもろさは、国とか死といふもの、言ひ換へれば、人間の命は有限であり、国の命は悠久であるといふ感覚を、思想の領域から排除してしまったところにこそある」

と指摘され、ソビエト『生徒守則』第一条を引用されつつ、

「マルクス主義者であっても、自由主義者であっても、国家は、個人が帰属してゆくべき生命体である」

と、主義や体制を越えたところの、生命体としての「内なる国家」に眼を見開くべきことを訴へられた。そして、

「生命体としての国家は、科学的な知性によっては認識できるものではない。私達が国といふものを感ずることができるやうになるには、我々の祖先がどのやうにして祖国日本を守ってきたかを知ることが大切であり、先人の行動を通してしみじみと共感することが大切なのです」

と学問の本質に入ってゆかれた。そして、

「学問の中には、いろいろな学問があるが、その中の一つである科学は、計量できる合理的経験のみを対象にすることによって深められてきた学問である。そこでは、貴重な人生経験が排除される。従って、科学では人生全体を把握することができない。至誠や真心は計量したり比較した

りすることができるものではないし、子供をなくした母親の悲しみを計量することはできない。〝人間の再建のために〟は、人生をどういふ姿勢で生きていったらいいのかといふ人間の生き方を心を込めて学ぶことが必要となるし、歴史事実を追体験することによって、共感、共鳴する、すなはち、自分の心の中にすぐれた先人の心を再現するやうな学問が、どうしても必要となるのです」

と講義をしめくくられた。

講義の後、全参加者は班室に戻り**班別討論**に入った。先生は何を訴へんとされたのだらうか、聞いてゐてどの点が感銘深かったか、に論点を絞って討論が進められた。科学では扱へない学問領域があり、その領域での共感共鳴の学問姿勢こそ、わが心に〝人間〟を呼び戻す上で、この上もなく大切な姿勢であることが、少しづつ確認されていったやうであった。

なお、この**班別討論**は各講義のあとに行はれ、感じたままを各自の言葉で語り合はうと注意しあひながら討論を行った。そうして回を重ねるごとに熱気を帯び、時に反発しあひ、また共感しあひながら、参加者相互の交流は次第に深められていった。

第二日（八月七日・日曜日）

合宿の日程は、毎朝六時三十分にかけられる「ペルシアの市場にて」の軽快なレコードのリズムから始まる。洗顔と清掃をすませた全参加者は、霧立ちこめる広場に集合、**朝の集ひ**にのぞんだ。「国旗掲揚」「ラジオ体操」「連絡事項の伝達」の全てが、清々しい朝の冷気の中で行はれた。

講義「『新日本の誕生』とその動因」

世界経済調査会理事長　木内信胤先生

今回で十八回の連続御出講であられる木内先生は、最近の内外の動きに触れられながら、御講義を進めてゆかれた。世界の動きを鳥瞰されてのお話は、国際人としての先生のご活躍を偲ばせると同時に、日本文化の本質への深いご造詣に裏打ちされてゐて、聞く者の耳を引きつけずにはおかなかった。

先生は、まづ「新しい日本」が近く必ず誕生するものと確信してゐる旨を御披瀝になられ、ついで

「〝新しい〟といふのは、明治以来、敗戦以来今日までの日本と著しく違ふから、〝新しい〟といふ感じを受けるのであ

って、実は「本来の日本」の顕現に過ぎない」

と指摘され、一例として、明治憲法にしても、自己の利益の保障を中心とした、ヨーロッパの権利思想をそのまま取り入れて出来上ってゐることや、敗戦後は、アメリカに追随すれば生活が豊かになるといふことで、物量の確保が目標の第一になってしまひ、その結果、生活全般がアメリカ一辺倒になってしまったこと等を挙げられた。さらに、先生は、

「『本来の日本』の姿は、大和民族発祥の時の姿（古事記等に描かれてゐる姿）にばかりそれを求めないで、今日までの発展の全容のなかにも、それを求めるべきだと思ふ」

と述べられ、固定的に考へることなく、概ね、かうだらうと考へながら進んで行く研究態度をお勧めになった。そして、

「新しい日本が誕生することが分ってゐるから、力が出てくる。皆さんにかういふ言葉を紹介したい。すなはち、『あるが故にあらしめる、よきが故によからしめる、あらしめるが故にあり、よからしめるが故によき』」

と説き続けられ、次第に先生の「ものの見方」についてのお話しに進んで行かれた。特に先生は

「今の世界の変局は、「科学技術文明」と名付くべき現代の文明が、その地歩を次の文明に譲らうとしてゐるところから起る変局である。経済の分野では、計量経済学がダメになってをり、脱ケインズ経済学を打ち建てる必要がでてきてゐる。打開の道がない時には、必要は起こらない。必要な時には、打開の道は必ずある」

と所信を述べられた。さらに、予想を立てながらものを見ることの必要性を説かれ、

「予想が当ればその理由付けは正しいことになるし、はづれればどこかがをかしいことになる。従って予想を立てることは理由付けの検証になるから大変よい。私は、『三年先』と『三十年先』との二本立てで考へてゐる」

と話された。そして、三年後の予想として、現在病弊に陥ってゐる経済学がまだ直らないであらうと予測され、だが、世界を直すには、日本が身を以って直らなければならない旨を強調された。直観力を養ふためには、虚心になること、国を良くしたいといふ強烈な念願を持つこと等をご指摘になられる先生であったが、御講義の随所にそのことが感じられるやうであった。今回は、特に、先生が委員の一人として加はってをられる産業計画懇談会の新提言、「貿易構造の改革――『新路線』の一環として」並びに「『産計懇』の新提言の大意」の小冊子を参加者全員があらかじめ手元にいただいてゐたが、それを

作成するにあたっての先生の「ものの見方」をお聴きすることができた。これらの提言が、すべて、歴史的かなづかひで書かれてゐることが、参加者の印象に深く残ったやうであった。

御講義のあと**質疑応答**が行はれ、参加者からの質問のひとつひとつに、先生は、実に丁寧にお答へになられた。木内先生はこのあと各班室をおまはりになり、親しく参加者とお話し下さった。

講義「輪読導入講義」

福岡県立修猷館高等学校教諭　小柳陽太郎先生

一つの書物を共に読み合ふ「輪読」といふことについて、小柳先生は『日本への回帰第十二集』の輪読導入講義の箇所を引用されつつ、輪読の際の姿勢を説くところから御講義を始められた。

先生は「輪読」といふ言葉について

「『輪読』といふ言葉には、単に輪をなして座りながら一つの本を読むといふだけでなく、一人一人の心そのものが輪になってつながっていくといふ意味がふくめられてゐるのでせうし、『読』については、その文章や歌を表現した人のいのちに即して読んでゆく、それが読むといふことの意味であらうと思ふのです」

と、和歌創作と並んで輪読といふものがいかに大切であるかを述べてゆかれた。そして輪読のテキストである、『**聖徳太子の信仰思想と日本文化創業**』の著者、**黒上正一郎先生**について、次のやうに紹介された。

「黒上先生の御研究は、いはゆる学術的な、アカデミックな研究といふのではなく、道を求める激しいおもひと、人と人との心を深く結ぶ友情の中に生み出された御研究なのです」

続いて聖徳太子の「世間虚假唯佛是真」といふ御言葉について

「ともすれば太子が晩年に政治につかれて仏の世界に入ってゆかれた、その御気持を表はしたものだとする受けとり方が多いのですが、それは明らかに誤りです。これは現実からの逃避や挫折といったものではなく、現実との激しい戦ひの中から生まれた御言葉なのです」

と話され、本文に入ってゆかれた。

その中の片岡山の御歌の箇所（一五七頁）で、解りにくい言葉や、我々の読み過ごしてしまひがちな言葉について説明してゆかれつつ、「群生と苦楽を同じうす」とお述べになられた太子の御気持を、片岡山の御歌に具体的に偲んでゆかれた。そして最後に、一つ一つの言葉に籠められた黒上先生の御気持を十分に読み取っていって欲しいと語られ、講義を終へられた。

小柳先生の輪読導入講義のあと、直ちに**班別輪読**に入った。一言一言に籠められた著者の気持に迫ることの難しさを感じつつも、互ひに心を合はせて一つ一つの言葉の理解に意を注いだ。そして書物を読んで著者の思ひを味はふといふことの意味を、あらためて考へさせられたのであった。

青年研究発表

この合宿教室では、講師の諸先生の講義のほかに、国民文化研究会の若い会員による「**研究発表**」が行はれてきた。今回もこれまでの成果を踏まへて、三名の会員が登壇した。いづれも社会人生活数年の若い世代だけに、全参加者の、とくに学生参加者の熱い視線を浴びて壇上に登った。

まづ、熊本県立松島商業高校教諭の**中園俊郎君**（熊本商科大学・商・48年卒）が登壇した。中園君は、「合宿に勧誘してくれた友人の、友達づきあひについての厳しい言葉に目を見開かされた」と、学生生活を送る上で転機となったきっかけを語り、さらに、合宿での御講義を聞いて、吉田松陰と久坂玄瑞の往復書簡の中に見られる付き合ひの厳しさに、非常に感銘を受けたことを語った。そして、「松陰の『積誠之れを蓄へよ』といふ言葉が、教職についてゐる私にとって心の支へとなり、また、着実な生き方を教へてくれるものとなった。どのやうな場にあっても着実に、精一杯生きていくやうな生徒を育ててゆきたい」と話を結んだ。

続いて、福岡県大刀洗町立本郷小学校学園分校で精神薄弱児の先生をしてゐる**味酒景子さん**（福岡教育大学・教・51年卒）が、「自分の心で物事を素直に感じる」といふ事の大切さを、教へ子である泉ちゃんとの貴重な体験を通して語って行った。「泉ちゃんは、ささいな事にも腹を立て、すねて泣くやうな子でした。ところが或る日、私を困らせるやうな事をしたので叱ったとこ

ろ、泉ちゃんがあまりに素直に〝ご・め・ん・ね〟と謝るのを聞いて、この子供にもこんなにやさしい感情があったのか、と私は胸の熱くなる思ひがしました」と、その時の感動を語った。次に、天皇陛下御行幸の折の陛下と知恵おくれの子供との心暖まる話をし、「陛下は、知恵おくれがどうのかうのといふやうな外見には全く無関係に、子供達と心と心で接してをられるのだと強く感じました」と静かに結んだ。そして、泉ちゃんのことを詠んだ七首の短歌を紹介して、感銘深い発表を終へた。

最後に登壇した工学博士で建設省・建築研究所に勤務してゐる**大岡弘君**（東京工業大学・理工・44年卒）は、明治天皇の書かれた「明治維新の宸翰」を紹介し、「『列祖に事へ奉らむ』といふ言葉のうちに、強い使命感に裏打ちされた心のこもった御姿勢が感じられる」と語った。そして、終戦の折りにマッカーサー元帥にお会ひにゆかれた今上陛下の御態度について触れ、「歴代天皇方のお心のうちに見られる無私の伝統精神が、三十二年前の終戦の折にお詠みになられた今上陛下の御製の中に、美事に発露してゐるやうに思はれる」と語り、当時の御製三首を拝誦し、国民のことをまっ先に思はれ、日本の国柄を守らうとされた天皇陛下の御心を偲ぶことの大切さを語った。

講師　山田輝彦（56歳）

味酒さんの研究発表

ひたすらに心傾け語りゆく君がことばに涙溢れく
精薄の施設近江学園に陛下迎へしその日のことども
仰むきて涙こらへてゐませしとふ幸うすき子のさだめ思ひて
おんまなこしばだたきつつ幸うすき子らの楽の音聞きたまひしか
言絶えししじまの中に流れけむその楽の音をしのびやまずも

味酒さんの青年研究発表を聞いて

身障児にからだ打ちつけたちむかふ若き女教師の声高ぶらず
泉ちゃんの「ご・め・ん・ね」といふその言葉わがことのごと胸とどろきぬ
司会者の「起立」の声も消ゆるかに堰切るごとく拍手鳴りやまず
言葉なく肩叩きゐし師の君の笑みし瞳はうるみてありき

記録班　西川伍朔（62歳）

講義「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり—吉田松陰の魂」新日本製鐵㈱社員　今林賢郁氏（33歳）

古典講義は、従来は主に〝国文研〟の先輩方がこの任に当られたが、今回は合宿運営委員諸氏の強い要望によって、戦後育ちの若い会員の登壇となった。講義を担当する今林氏（早稲田大学・政経・43年卒）は、製鉄会社に勤務するサラリーマンであり、全参加者の注視の中に、講義の口火を切っていった。

講師は、まづ日常生活を振り返りつつ

「私は国といふことを考へ続けてきた。この日本を、なんとかこれ以上悪くない状態で子孫に伝へてゆきたいと思ひ続けてきた。さういふ中で古典に触れることによって、ある時は叱咤激励され、ある時は慰められてきた。この場で諸君といっしょに古典の言葉に触れてみたい。私は、松陰といふ骨太い、男らしい武士が好きである。松陰は、絶えず、いかにすればこの世の中をよくすることが出来るかといふ視点に立って、生き抜いた人物である。すぐれた頭脳力、すぐれた行動力、驚くほどの読書量、天性の教育力を兼ね備へた、稀にみる人物であったと思ふ」

と、直接に核心に触れる問題から講義に入っていった。そして、「吉田松陰年譜略」で松陰の主な行動を浮き彫りにさせつつ、「東行前日記」「諸友に語ぐる書」「留魂録」の要点箇所を次々と読んでいった。

「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。吾れ學問二十年、齢亦而立なり、然れども未だ能く斯の一語を解する能はず。今玆に關左の行、願はくは身を以て之を驗さん。乃ち死生の大事の若きは、姑くこれを置く」

「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。此の語、高大無邊な聖訓なれど、吾れ未だ之れを信ずる能はざるなり。此の度此の語の修行仕る積りなり」

そして、講師は次のやうに語った。

「自分の全身心を傾けてぶつかってゆけば、相手も動くといふ、幕府を相手にした、松陰の身をかけた決死の実験は失敗したが、松陰の一生は貫き通された。松陰は、門人の心の中に生きようとした。一人の人間の力は限りある。しかし、一人の人間が一人の人間の心に不滅の火をともすことができる。『至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり』といふ、自らの志を試しつつ、そこに学問の根底を置いてゆくことの中に、国を良くし、国を支へてゆけるものが必ずあるのでは

ないだらうか」

息つく暇のないやうな熱烈なる講義を終へて、講師は降壇した。

今林先輩の御講義を聞きて

壇上ゆ語りたまへる言の葉は力こもりて自信にあふるる
息をつくひまもなきがに次々と語りゆく先輩(とも)の言の葉せまりく
いとまなき勤務をもてる先輩(とも)なるにかくまで心をつくされたまふか

助言者　奥冨修一（31歳）

第三日

（八月八日・月曜日）

講義「世界の中の日本人」

東京大学教授　衞藤藩吉先生

合宿教室に今回初めての御出講となる衞藤先生は、ニュージーランドからの御帰国早々に、合宿地にかけつけて下さり、昨夜の古典講義、班別討論、さらに朝の集ひと、参加者一同と日程を共にして下さった。先生は、「日本が今どういふ立場にあるのか、どういふ日本人が望まれてゐるのか、この点についてお話ししたい」と前置きをされ、先生御自身の眼で見、体でお感じになったニュージーランドの現状報告から御講義をお始めになった。

先生はまづ、ニュージーランドの豊かさは、英国が酪農製品の大半をこの国から輸入することによって保たれてゐたが、英国がECに加盟し、その輸入先をオランダやデンマークに転じた結果、ニュージーランドが大変な窮状に陥ったことを例にとられ、

「日本もまた、主要資源や漁獲物を諸外国に依存し過ぎてゐる点で、ニュージーランドと同様の問題を孕んでゐる。日本が将来にわたってその繁栄を維持する為には、諸外国と、庶民レヴェルでの人的交流を積極的に推進し、そこから生まれる信頼関係を蜘蛛の巣のやうに張り回らして、『日本と付き合った方がよい』といふイメージを諸外国に持たせる以外道はない。ニュージーランドが抱へてゐる没落の運命を、我が日本は決してたどってはならない」

と強く訴へられた。続いて先生は、国際公務員として国連事務局に勤務する日本人の数が、望まれる数の半数にも満たない事実を指摘され、

「日本が、国際社会において、まだ十分にその役割りを果してゐない背景には、大学生諸君が卒業後、海外で活躍しようといふ積極的姿勢に欠けてゐることにも原因があることを否定できない」

と述べられた。さらに先生は、青年ヴォランティア活動に話を進められ、フィリピンに渡り不毛の土地を開墾して村人の尊敬を集め、反日感情を拭ひ去った青年達のこと、インドやアフリカの辺地で活躍してゐる日本人達のことを紹介された後、参加者一同に、

「日本人が依然として多かれ少なかれ持ってゐる西欧に対するコンプレックスを打ち破り、自分一人ででも積極的に東南アジアやアフリカ方面へ出かけて行って、身を以って日本人の誠実な生き方を原地人に示し、相互理解を深めようとする勇気を是非とも持って欲しい」

と語られた。そして、外国人に最も尊敬されてゐる日本人の一人として、コロンビア大学に奉職された明治育ちの角田柳作先生を挙げられ、

「日本人としての自覚を持ちつつ、謙虚に外国文化に接してゆかれた先生の御態度を、アメリカ人は常々大変に尊敬してゐたのです」

と語られた。ついで、森鷗外の「鼎軒先生」の文章を引用され、

「日本の文化にだけ立脚するのも、西洋の文化にだけ立脚してゐるのも、共に偏頗である。東西両洋の文化を一本づつの足で踏まへて立つ日本人が、今こそ要求されてゐる時はない。日本の文化的背景を十分に認識しつつ、広い心をもって他国の文化をも理解し、かつ評価し得るだけの力を是非ともつけて欲しい」

と語られて御講義を終へられた。

先生の御講義のあと質疑応答があり、参加者からの質問の一つ一つに、先生は懇切にお答へ下さった。

講義「和歌創作導入講義」

医師・九州大学医学部大学院　前田秀一郎氏（28歳）

和歌を読み味はひ、そして和歌を作るといふことは、この合宿の主要テーマである。〝国文研〟の若い会員がこの講義を担当するやうになって今年で四年目を迎へる。前田講師（九州大学・医・48年卒）は、一昨年の合宿教室でも、この講義を担当してゐる。

講師はまづ、

「和歌は、日本に出来てから千三百年の伝統を有し、専門の歌人だけでなく、名もない多くの人人が、さまざまな事に触れて抱いた思ひを、数々の歌に詠んできてゐる」

と和歌の歴史を語り、ついで

「和歌は、限られた字数の中に、自分の思ひを詠み込んでゆかなくてはいけない。だから、歌はうと思った対象を見定め、自分が感動したのはどこかを見つめて、言葉を選んで詠まなければならない」

と、和歌を作るにあたってのポイントを述べた。そして、

「自分の感動を見つめ、それを歌に詠み込むことによって、自分の内心を省ることができるし、日頃から歌を作ることに親しんでゐると、ささいな体験にも思ひを寄せることができる、すなはち、情意が自づと深められてゆく。さらに、他人の歌を読むことにより、その人の心を直接に感ずることができる」

と、和歌の持つ意義について語った。続いて講師は、大学時代に合宿教室に参加したことが契機となって、萬葉集を読んでゆくやうになったことを振り返りつつ、皇子、皇女の歌を中心に、萬葉集の歌を実際に味はっていった。

わが背子は仮廬作らす草なくば小松が下の草を刈らさね

わが欲りし野島は見せつ底深き阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ

この中皇命の歌二首について、講師は、

「このやうな歌を遣はされたら、私は小松が下の草をみな刈ってしまひたくなるし、また、海の底がいくら深くとも、珠を拾ひにゆきたくなってしまひます」

と、率直に感想を語った。続いて、明治の歌壇の空想、観念、技巧のもて遊びに対して、現実を凝視して自分の思ひをその

ま述べることを力説した正岡子規の歌に触れ、

「子規は、生活の実感の中で、伝統といふものを感じとってゐたのです」

と語りつつ、「かしは餅の歌」連作十首を読んでいった。最後に、「感じる能力も養ひ育てなければ衰弱してしまふ」といふ小林秀雄先生の「美を求める心」の中の文章を引用し、「感ずるといふことも、学ばなければならないものなのです。それは、和歌を作ることによって鍛へられるものではないでせうか」

と語り、講義を終へた。

和歌創作導入講義の後、全参加者は、立ち込める霧深き中、**仁田峠、地獄めぐり**へと和歌創作に出かけた。地より湧き出づる熱気を眼と肌で感じ、硫黄特有の臭気を嗅ぎながら、皆は、地獄めぐりの小径を歩いた。班ごとにかたまり、なごやかに語り合ひつつ、ある者は、指を折りながら和歌創作に励み、ある者は、ゆで卵のうまさに舌づつみをうちつつ地熱の恩恵に浴してゐた。緊張した合宿の中で、心なごむ楽しいひとときであった。

所感・所見発表

「大学教官有志協議会」「国民文化研究会」の三人の先生、会員が登壇して、心に深く感じてゐることの一端を参加者に語りかけた。

最初に、福岡県立嘉穂高校教諭の**小野吉宣君**（西南学院大学・文・45年卒）が壇上に立ち、

「陛下が御訪米になられた折、米国人は、陛下を、数々の困難を乗り越えてこられたガッツ（気骨）ある国家元首として歓迎した」

と、資料を示しながら語った。次に、

「陛下が靖国神社に参拝されることに反対する諸団体は、何故、陛下がアーリントン墓地に参拝された時、即座に反対声明を出さなかったのか」

と、矛盾し、かつ、国際的に見て非常識な反対派の態度の非を指摘し、

「陛下が、どういふお気持ちでお参りされてゐるのかを、深く考へるべきである」

と語った。続いて、陛下の御製五首を読んでいった。そして、その中に幾たびも出てくる「胸せまりくる」といふお言葉について、「喘息」で亡くなった教へ子に対する母親の悲痛なお気持ちを思ひ浮べながら、体験的に偲んでいった。最後に、

「陛下は、日本の国の運命を御自分の運命とお感じになり、本当に心をこめて、祖先の御霊に頭を下げてをられる」

と述べ、話しを終へた。

ついで、高千穂商科大学助教授の**名越二荒之助先生**が登壇され、世界を巡り歩かれた経験をもとにして、各国の国民が戦没同胞に如何に心を寄せてゐるかについて話してゆかれた。例へば、モスクワにおいては、結婚式を挙げた新郎新婦が、すぐにクレムリンのほとりにある無名戦士の墓に詣でる習慣があることや、レニングラードの記念碑には、戦没者を讃へた立派な碑文が刻まれてゐることなどを話された。さらに、先生を中心にした一行が、顕忠塔の立つ韓国の国軍墓地を「日の丸」を掲げて参拝した時のことについて、

「その墓地は、二十四時間無休で、陸・海・空三軍の衛兵が交代で守衛してゐることからしても、いかに韓国人がこの墓地を神聖な場として、心を込めて守ってゐるかがしみじみとわかる。『日の丸』の国旗を掲げて参拝したのは、国籍は異なっても日本国民として哀悼の意を表したかったからです。祖国に殉じた者に敬意を表するのは、国籍の如何を問はず普遍的なことではないのでせうか」

と語られた。それにひきかへ、日本ではどうだらうかと疑問を投げかけられ、

「小・中・高等学校を通じて、教科書の中に『靖国神社』といふ言葉が一つも出てこない。こんな馬鹿なことがあってもよいのだらうか」

と、日本の混乱した、なさけない実情を、語気も鋭く批判された。

最後に、㈱宝辺商店・社長の**宝辺正久先生**が登壇され、「慰霊祭に臨む心持ちを話したい」と前置きされ、学生時代の親友で先の大戦で戦死された松吉正資さんの和歌を読んでゆかれた。そして

「松吉君のやうに歌へる青年が、今でもゐないとは思はない。松吉君の和歌から伝はってくる、この暖かい思ひは、あなたたち青年の心の中にも伝はってきてゐて、松吉君の思ひと少しも変はらないものが、あなたたちの心の中にきっとあるはずだ」

と、切々と語りかけられた。そして、

「かうした友らの暖かい心が忘れられない」

と、先生は、遠くを見つめながら、戦死された友らの名前を一人ひとり呼びつつ、絶句された。最後に先生は、

「ビルマ、フィリピン、沖縄などの遠地で戦死していった友らの『いのち』は、『八潮路の潮の八百会ひ』の如く波うって、その真只中に今の日本はあるのだ」

と結ばれた。

宝辺先生のお話を聞きて　　東京大学法学部四年　小柳志乃夫

み友らの戦に病にたふれましてはや三十年の年は経ぬとふ
亡き友のうつつにますがに師の君はみ友らのみ名呼びたまひたる
亡き友のみ名よびたまふ師の君の言の葉いたく胸をうつなり

宝辺先生の御話をお聴きして　　熊本大学工学部四年　折田豊生

たたかひに生命ささげし友どちの想ひ出熱込め語りたまへる
呼びかくるごとく「江頭」「百武」と友の名を呼び絶句したまふ
声つまらせ語りたまへる師の君のおもは定かに見えずなりくる
あふれくる涙流るるままにして師の御姿をひたに見つめぬ

参加者一同は、気持ちが張りつめ、高まるのを覚えながら、慰霊祭会場へと向った。

慰霊祭

「慰霊祭」に先立って、国民文化研究会会員で佐世保市交通局企画係長の**朝永清之氏**が、戦時平時を問はず、祖国日本の為に尊い生命をささげられたすべての祖先の御霊をお祭りすることの意味あひについて、参加者一同に説明した。その後、降りしきる激しい雨音を聞きながら、全員が、大広間前面中央に設置された祭壇の前に整列した。祭壇には、海の幸、山の幸が供へられた。慰霊祭はお祓ひに代へて故三井甲之先生の

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

といふ和歌を朗詠することから始められた。そして、「祖先の御霊」をお呼びするため、一分間の黙禱をささげた。続いて、小田村寅二郎先生が、明治天皇、今上天皇の次の御製を拝誦された。

明治天皇御製（おほみうた）

明治三十五年一月、青森歩兵第五連隊第一大隊、八甲田山を行進中、山中で多数凍死せるを悲しませ給ふて詠ませたまへる御製

埋火（うづみび）にむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人を思へば

明治三十七年日露戦争のさなかに、戦死者を悼ませられて詠ませたまへる御製から三首

はからずも夜をふかしけりくにのため身をすてたりし人をかぞへて

たたかひに身をすつる人多きかな老いたる親を家にのこして

世とともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

明治四十年に「子」と題してよませたまへる御製

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを

同じ年「神祇」と題してよませたまへる御製二首

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり

めに見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ

今上天皇御製（おほみうた）

昭和三十年八月十五日、那須にてよませたまへる御製

夢さめて旅寝の床に十とせてふ昔思へば胸せまりくる

昭和三十四年、靖国神社九十年祭によませたまへる御製

ここのそぢへたる宮居の神々の国にささげしいさををぞ思ふ

同じ年に、千鳥ヶ淵戦没者墓苑に詣でさせたまひて、よませたまへる御製

くにのためいのちささげしひとびとのことを思へば胸せまりくる

昭和四十三年、北海道稚内公園に御幸（みゆき）したまひし折、二十三年前の終戦の年八月二十日、南樺太の真岡電話局の九人の乙女、ソ連軍の上陸にあたり、最後の状況を内地に報告しつつ壮烈な殉職を遂げしことを悼む「慰霊碑」を訪れたまひし折によませたまへる御製

樺太に命をすてしたをやめの心を思へばむねせまりくる

小田村先生が明治天皇御製を拝誦され始めた時、突然、雷が轟きわたり、あたかも、天がける御霊のみ声が、「神鳴り」となってこの地上に降りてこられたやうな心地がした。まさに、天地呼応、神人呼応さながらの一瞬のやうであった。続いて、高木尚一先生が、参加者一同を代表して祭文を奏上された。最後に、全員で「海ゆかば」を歌ひ御霊をお送り申し上げ、慰霊祭を終へた。そのあと、なほらひの御神酒をいただいた参加者は、**班別懇談**のため各班室へと入っていった。

慰霊祭にて　　講師　夜久正雄（62歳）

天地も心あれやも友の宣るのりとともに神鳴りわたりつ
神々のいましめたまふか神まつるゆにはにとどろく神鳴りの音
鳴る神のふたたびみたびとどろきてこよいのまつりいよいつかし
神々のみたまをまつる夜のにはに不思議なるかな神鳴りつづく

慰霊祭　　京都産業大学経営学部三年　鈴木利幸

いなづまの光と共に祈念する我らの前にみたま来たまふ
国のためいのちをすてしますらをのみこころしのび「海ゆかば」うたふ

第四日

（八月九日・火曜日）

講義「現代流行思想とその批判――『しきしまのみち』の使命」　　亜細亜大学教授　夜久正雄先生

夜久先生は、「合宿全体の流れの中で私の講義があることを、今ひしひしと感ずる」と前置きされ、現代流行思想批判に入ってゆかれた。そして、流行思想横行の原因として、現在の大学では、聖徳太子、道元、親鸞、日蓮、山鹿素行、吉田松陰などの日本思想が、ほとんど教へられてゐない、知ることさへできない現状を指摘され、日本の学問、特にしきしまの道を承け継いで行かうとする姿勢の必要なことを、諄々と説いてゆかれた。

先生はまづ、国歌「君が代」の「君」を、「天皇」ではなく、「あなた」と解釈しようとする動きのあることを指摘され、

「古今集では、言葉上は『あなた様』と解釈することも可能であるが、国歌となった明治以降は、例へば大山巌元帥の大正元年『賞書』が示すやうに、『君』は『天皇』としか解釈することができない。古今集の場合も、その序文を見ると天皇を寿ぐ趣旨が載ってをり、かつ、賀哥のトップに載せられてゐるので、総合的に判断すれば、『わが君』とは天皇を指すものと解釈すべきではないのか。『読人しらず』とした背景には、すべての人を代表してこの歌を読んだのだといふ、深い意味合ひが込められてゐるものと思ふ。国歌とは、皆が同じ意味でその歌を歌ふからこそ意味がある。解釈がマチマチでは大変な問題である。『君』を『あなた』と解釈しようとする一部風潮の中には、天皇を排除、抹殺しようとする意図も見受けられる。あなたが千年も万年も永生きしますやうにと、お互ひに歌ひ合ふ、あるいは、恋人の長寿を祈るといったやうな、ふやけた考へ方をしてゐては、日本がこの厳しい国際場裡に立ってゆけますか」

と批判された。ついで、先生は、松本清張、和歌森太郎、小倉豊文諸氏の聖徳太子否定論に触れられ、

「聖徳太子が歴史上伝へられることをやったにしては偉大すぎる、と頭から疑ってかかる。他の誰かがやったのだらうと言ふ。しかし、その事は、その時代の資料にも、日本書紀にも書いてない。その方がはるかに不確かであるのに、ただ疑ってゐる。そこには、偉大なものを疑って、それを無にしようといふ精神があるのみである。すなはち、まごころを感ずる自分の心をも否定し、向上しようとする自分を抑へ、現状に満足しようとすることである。疑ふことはいくらでもできる。しかし、それは実に非生産的なことである。悲劇オセロの結末がよくそれを物語ってゐるではないか。信じるといふことは大切なことであり、努力を要することである」

と、流行思想の根本欠陥を指摘された。さらに、明治天皇が、東大に日本の学問、すなわち「心を向上させる」「まごころを磨く」学科のないことを憂慮されたお話しをされ、

「九万三千首の和歌をお作りになられたこと、それが明治天皇の学問の中心だった。歌を詠むことは、自分の本当の心を振り返り、その心を前に押し進めてゆくことであり、『しきしまの道』と呼ばれ、古くから日本の学問の中心であった。現代流行思想がそれらと縁遠いものとなってしまったことが残念でならない。自分の心は言葉に出してみないとわからな

い。自分の言葉に出してみなければ、本当に経験したことにならない。事と言葉が一致することを「まこと」といふが、言葉に出すことによって、初めて誤りも正される。すなはち、真実を深めていくことができる」

と、しきしまの道の修練の重要なことを語られ、明治天皇の御製を読んでゆかれた。そして最後に、先生の教へ子で戦陣に斃れた当時二十三歳の茶谷武さんの遺書を紹介されたが、読んでゆかれるうちに、先生のお声も涙につまりがちになり、参加者一同は胸打たれて、それぞれ感極まったやうであった。

〔編注〕

夜久先生が御講義の中で紹介された戦没学生・茶谷武さんの遺書は参加者一同に多大な感動を呼びおこした。肉親への切々たる愛情をいだきながらも、祖国防護のために潔よく出陣していった若者のまごころが偲ばれて、講義室はしばし粛然たる空気が流れた。また遺書をお読みになる夜久先生のお声を聞いてゐると茶谷さんの声が直に聞こえてくるやうで全参加者は「真実の言葉」の重みといふものに大きく心を動かされたやうであった。

いかに感動が深く大きかったかは、この感想文集をご一読いただけば一目瞭然である。参加者の多くが、その感動を感想文に記し和歌に詠み込んでゐる。

そこで参加者の皆さんには、より正確に記憶にとどめ日々の生活の中で再三再四にわたって読み返していただきたく、またこの感想文集だけをお読みになられる方々には、その感動の深さをお伝へすることができるならばと考へて、とくに茶谷武さんの略歴を記し、あはせて遺書の原文を写真版で載せることにしました。

茶谷（ちやたに）　武（たけし）さん

大正十一年　四月　三十日　神奈川県小田原市に生れる。

昭和十七年　三月　東京府立養正中学校（府立一中の夜間部）を卒業す。在学中に夜久先生の教へを受く（同級に香川亮二、後輩に副島昌二、伊藤真三郎の三名がゐる）。この間、渋谷の知人宅に下宿して、鉄道省に勤務す。

昭和十七年　四月　中央大学専門部経済学科（夜間部）に入学す。のち日本医療団に勤務す。

昭和十八年　十二月　学徒出陣。陸軍に入隊す。朝鮮羅南の部隊を経て、フィリピンでの戦闘に参加す。

昭和二十年　四月二十三日　フィリピンのルソン島ダクボにおいて戦死す。数へ年二十四歳。

遺書

父上
母上様へ

武モタウ〳〵オ役ニ立ツ時ガ参リマシタ。生ヲ享ケテニ十余年唯一度モオ心ヲ安マセコトナク過シテ来タコトヲオワビ致シマス

今ノ私ノ気持ハ吉田松陰先生ノ「親思フ心ニ勝ル親心今日ノ訪レ何トキヲラント歌ハレタ」ト同様ソノマンデアリマス、今思ヒマスニ人一倍子ボンノウノ父上ニトッテコレヲヨマレノドンナデアルカハヨク全部デナクテモオシハカルコトガ出来マスデモ此ノ皇國危急ノ秋私達ノ涙ハカクサレネバナリマセン、私ノ肉体ハコンデ朽ツルトモ私達ノ後ヲ私達ノ屍ヲノリコヘテ私達ヨ礎トシテ立チ上ッテクル第二ノ国民ノコトヲ思ヘバ又之等ノ人々ノ中ニ私達ノ赤キ血潮ガウケガレテヰルト思ヘバ決シテ私達ノ死モナゲアニハアラナイト思ヒマス

日本ニ生レタ者ノミニ許サレル永遠ノ生ニ生キルトイフコトガイヘルノデス

之等ノ事ヲ思ヘバ私達ハ涙ヲ流ス前ニ故國ノ勝利ヲ、天壌無窮ヲ祈ラネバナリマセン

ドウゾ私ノコトヲ笑ッテ下サイ武モ笑ッテ散リマスデハ父上母上オ身体ヲ大切ニシテ下サイ

サヨウナラ

武ヨリ

ワガ生ハ下義ノ露ト散消ルトモ何カ惜マン
ニノ秋ニアレバ
我ガ肉ハシ朽ツルトモアガ魂ハミ空ニ天カケ
御國守ラン

征キ〳〵テ草ムス屍ト果ツルコトモ我身ニツキヌ
思ヒナリケレ
神州ノ不滅ヲ信ジ吾ハ唯ニマケノマニ〳〵進ミ
行カナム
大君ノマケノマニ〳〵生キ死ナム時ゾ近ヅキ吾ガ胸
ハルル
同胞之働キミニハ日夜ニモダセシ今ゾハルモ
アガ家ノ名ヲケガスナトノタマヒシアガ父ノ訓
ワスレカネツル

千枝子ヘ

兄サンハ今死ニツクニ当リオ前ニ言遺シテオクワカラヌ所ガアルカモ知レヌガ来年ハ六年生ニナルノダカラヨクヨンデミナサイ

兄サンハ茶谷ノ家ノ血統ヲウグノハオ前一人ダ兄サンハ御國ノ危急ニ身体ノ心ノ一切ヲ陛下ニ捧ゲ日本男児トシテノ責任ヲ果ス為ニ今死ニツクダ、決シテ泣イテハナラヌ涙ヲヌグッテコノ大イナル戰ノ勝利ヲ祈ラネバナラヌ。オ前ノ兄ハコノ美シキ尊イ御國ヲ護ル責任ヲ果シタコトヲホコリト思ハネバナラヌ

オ父サン オ母サン 先生オノ言フコトヲヨク守ッテ日本ノ婦人トシテハズカシクナイヤウニ一生懸命勉強シナサイ、モウナンニ大キケレバイフコトモ澤山アルガマダイッテモワカラナイダラウカライ公ヌ ソレカラ女學校ニデモ入ッタラ歌ヲ作リナサイ。歌ハ次シテ風流ナモノデハアリマセン自分ノ心ヲイフノニスギズカザラスソノマンデハイケ枝子ヨ サヨウナラ

兄ヨリ

夜久先生の御講義を聞きて　九州大学工学部三年　広木　寧

師の君は三十年前の教へ子の遺書を静かによみたまふなり
教へ子の殘せしふみを師は声をつまらせつつもよみてゆかるる
妹にのこせるふみを師の君とよみてゆくうち涙流れく

夜久先生が茶谷さんの遺書を読まるるを聞きて　大阪大学文学部三年　絹田洋一

師の君のみ胸に浮かぶらむ教へ子の草むす屍となりし姿は
師の君は「草むす屍」とよみたまひあふるる思ひに絶句したまひぬ

夜久先生の教へ子の遺書を読まるるを聞きて　九州大学経済学部二年　奈良崎修二

たたかひに果てしみ友の遺されし歌読みたまふ涙ながらに
こみあげし涙をこらへこらへして読まるる思ひ伝はりて来ぬ
聞く我もあふるる涙こらへきれず思はずまぶた閉ぢにけるかな

夜久先生が遺書をお読みになるのを聞きて　福岡教育大学教育学部三年　杉野明美

国のため命ささげし教へ子の文を静かに読み給ひける
教へ子の文を読まれし師の君の声はふるへて涙流さる
とつとつと文を読まれし師の君の心思へば胸のつまりぬ

講話

高崎経済大学教授　高　木　尚　一　先　生

「大学教官有志協議会」の高木先生が登壇されて、「この合宿教室は、私にとって日本への回帰の場です」と、年来の所感を述べられ、お話に入ってゆかれた。

先生は、まづ学生時代を振り返られ、

「三井甲之先生といふ方は、日本人として今何をしたらよいのかをいつも考へてをられ、散策をしてゐる途中などに、『和歌を作ることと、時事評論をすることが、最も大切なことだよ。歌人は、時事評論をしなければいけない』

とおっしゃられ、雑誌によく時事評論を発表されてをられた」

とお話しになり、さらに、

「三井先生は、よく次のやうに話されてをられた。

『迷ひを去るといふのは嘘だよ。迷はないためにはどうすればよいか、そのことに気が付くことが大切なのだよ。念仏を唱へるといふことをするのです。私はいつも「アマテラスオホミカミ」と唱へてゐる』」

と、三井先生の信仰態度についてお話し下さった。続いて先生は、三井先生の御宅を訪ねられた時に拝見することのできた、黒上正一郎先生のお姿について、次のやうに語られた。

「黒上先生は、日に二、三時間の仮眠をとられただけで、学問に没頭され、三井先生が眠るやうに言はれても、先生は三井先生の横に坐り、教へを請ふてをられたのです」

私達に一つ一つ教へて下さるやうにお話しされる高木先生の御講義は、しみじみと参加者一同の胸内に、深く滲み込んでいったやうであった。先生は今も、黒上先生の御本、並びに三井先生の御著書『**明治天皇御集研究**』を座右に置かれ、学生と共に研鑽されてをられることをお話しになり、御講義を終へられた。

講義「学び方」

国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授　小田村寅二郎先生

小田村先生のご登壇で〝第二十二回合宿教室〟も大詰めを迎へた。先生は合宿の流れをふまへながら、「学び方」と題してお話を始められた。「諸君は心と心の交はせ方、友情についてはよくわかると言ふ。しかし、国や天皇についてはわからないと言ふ。私だったら『わからないから、その勉強のし方を教へてくれ』と、まづたづねますね。そして、徹底的に勉強して、それが自分に合はないものであることがわかったなら、その時は離れてゆけば、それでいいぢゃないですか」先生の御講義は次第に熱を帯びていった。

先生はまづ、開会式の時に、参加者一同に職業、学年、年齢の違ひといった、対社会的な「外側の箔」を取って欲しいとお話しになったことに触れられ、

「さらに一歩進んで、生まれながらの自分の心の本質の他に、生まれてからの小・中・高校、大学と、教育を受ける中で身についた『内側の箔』とでもいふべきものがあることにも気付いて、身についてゐるもの一切を考へ直しつつ、自分の

心の本質を探り出して欲しい。諸先生の御講義でせっかくいいお話を聞いても、内側の箔、すなはち心の箔がついてゐるうちは何も得られない。聞く場合に自分を身構へてしまってゐるくらゐ、学問を身につける上でくだらないものはないのです」

と語られた。さらに先生は、

「『自分達は国や天皇についてあなた方と同じやうなことを考へてゐるグループに属してをり、講義で話されることはよく解るし、もっともな事だ』といふ姿勢をとってゐては、何日かけて勉強しても無駄である。既成観念の枠の中で安住してゐる人は、この合宿で初めて違ふ考へ方にぶつかって真剣に悩んでゐる人達よりはるかに得るところは少ないはずだ」

と、観念的に、安易に処してゐる学生の、根本的な学問姿勢の誤りを厳しく正された。

続いて、先生は、陥り易い具体的な問題点を、一つ一つ説いてゆかれた。

「国を守るといふことにしても、それがイデオロギーに陥ってしまってはダメである。主義といふものは、固定した一時期の考へ方であるに過ぎない。また、国とは、決して国家権力を握ってゐる、時の政府を指してゐるのではないことにも注意して欲しい」

「井上清氏とケンブリッヂ大学のシェルダン教授の間で闘はされた『天皇の戦争責任』の有無をめぐる論議を、私はつまらないものと思ふ。終戦後の御製の中に出てくる『胸せまりくる』といふ思ひは、井上氏には解らないだらう。戦争責任と言ふが、そもそも、正義の戦争と侵略の戦争の二つに色分けできるほど、戦争といふ歴史事実は簡単なものなのか。それは、長い歴史が決めることではないのか。この度の戦争に対し、最大の戦争責任を感じてをられるのは天皇であると思ふ。占領のため乗り込んで来た旧敵国の司令官にも、進んで身を挺してをられるし、皇祖皇宗の御神霊に対しても頭を垂れてをられる。靖国神社の御霊にも参拝されてをられる。井上氏達は、自分達自身戦争の渦中にゐながら、これでもなほ、天皇の戦争責任をあげつらはうとするとは、何と傲慢不遜な態度なのだらうか。彼らにすれば、外面的に、『天皇に責任がある』といふことを認めさせれば、それで気が済むのであらう。このことは何を意味するか、人間性を離れたところで、学問がうごめいてゐることを意味するのではないのか。彼らが人の心の暖かさを尊重してゐるとはとても思へない。我々の先輩達が命をかけて闘った戦争をこのやうに整理されてしまふことを、到底黙視し得ないではないか。」

先生は、この後、資料として配られてゐた月刊『国民同胞』（国民文化研究会機関紙）のご自身の読み方を例示されながら、書物に向ふ姿勢の基本をお話しになって御講義を終へられた。

小田村先生の御講義のあと、最後の**班別討論**が行はれ、約二時間にわたって、さらに理解を深めるべく相互に研鑽した。そのあと、広場やロビーで「**地区別・大学別懇談**」が開かれた。各参加者は、それぞれのサークルの輪の中に入って、今後の大学や職場における勉強会などの活動について、意見交換をした。

和歌全体批評

島根県・玉造温泉・㈱こんや別館・館主　青　砥　宏　一　先　生

参加者の全員から、前日の夕刻までに創作して提出された和歌は二千首近くに及び、諸先生方の選歌作業と若手助言者によるガリ切り作業、そのあとの事務局の高校生達による深夜にまで及ぶ印刷作業によって、二十数枚にもなる歌稿となって、全参加者に配布された。苦心して詠んだ自分の歌が、ガリ版刷りとは言へ、印刷されて綴ぢられたといふことは、はづかしい反面、嬉しいもののやうであった。

青砥先生は、この歌稿を手に登壇され、一人一人が作者の思ひを偲びながら批評することの大切さを説かれ、古来、日本人は、このやうに歌によって互ひの心を通ひ合はせて生きてきたことを指摘された。ついで、参加者の歌から十余首を選んで、的確なご批評をされていった。先生は一つ一つの歌について、作者が何を詠み込まうとしたかに留意されながら、一字一句に厳しいご指摘と添削をされた。先生のご批評はユーモアに溢れ、講義室は度々爆笑に湧いた。和歌全体批評は、日頃の大学生活では感じることのできない、一人の歌に全員が注目し、作者の気持を推しはかりながら、心を一つに寄せて行くといふもので、まことに貴重なものであった。

続いて、**班別和歌相互批評**の時間がもたれた。各班ごとに班員の作品はすべて批評されてゆく。同班の友から、表現の不正確さを指摘され、自分の思ひを伝へることのむづかしさや、言葉遣ひの大切さを切実に感じさせられたりした。厳しい指摘に最初はとまどふ者もゐたが、心をこめた話しぶりに、それが単なる批判ではなく、まさしく自分への友情のあらはれであることに気づくと、やがて、一つの和歌を通して相互の心の通ひ合ひが感じられ、これが〝本当の学問〟のやり方であると納得されていったのである。かうしてお互ひの歌を味はひ合ってゆくうちに、班員相互の心は、さらに開かれて、人間と人間との共感の世界ともいふべき安らいだ心の交流が広がってゆくのが感じられたのであった。

最後の夜の集ひ

厳しい日程を消化してきた参加者は、この時ばかりは、緊張をほぐして余興を楽しんだ。缶ビールと西瓜に、若いエネルギーは爆発した。コントあり、寸劇あり、放歌高吟ありで、爆笑と拍手の渦に会場は湧いた。班ごとに、大学ごとに、地区ごとに、様々のグループが登場した。時の過ぎるのも忘れて、全参加者が心から楽しんだ「夜の集ひ」が解散した時は、午後の十一時を遙かにまはってゐた。そして、その後も各班室では、語り尽せぬ思ひを、夜のふけるのもものともせず語り合ったのだった。〝合宿教室〟最後の夜を惜しむかのやうに、窓の灯はいつまでも点ってゐた。

第五日（八月十日・水曜日）

四泊五日の合宿も、いよいよ最終日となった。各参加者は、ここで学び得たことを確認しつつ、最後の日程へと入っていった。雲仙を後に、おのおのが全国各地の学園・職場へと帰って行くのも、数時間後に迫った。

全体意見発表

全参加者が、この合宿で何を学び、何を感じたか、それを忌憚なく述べあふ全体意見発表の時間が来た。まづ合宿教室運営委員長**片岡健氏**（熊本県立熊本西高校教諭・32歳）が次のやうな挨拶をした。

「現代の世の中では、一途にものを考へるといふことがなかなかないやうに思ふ。初めて参加した十三年前の桜島の合宿で、私は、この姿勢に感激した。合宿の中身はよくわからなかったが、国文研の方々に人間的に魅かれるところが多かった。諸君も人にめぐり会へた経験、人と人とのふれ合ひといふものをこれからも大切にしていって欲しい。そして、この四泊五日間、祖国、学問、人生について共に真剣に考へてきたことも、肝に銘じて欲しい」

運営委員長の挨拶に続いて、**各参加者**が次々に挙手して壇上に登り、発渕としたロ調で、その思ひを披瀝した。

「頭で理解しただけでは不十分であって、感じる力を培ふことが大事であるといふことがわかった」

「今までは敵を意識しながら運動をしてきたが、敵がゐなくても生きる力を養へることがわかった」

「相手の気持を虚心に聞くといふことが、言ふは易く、行ふは難いといふことが、よくわかった」

「一生懸命に生きていくことが、祖国の生命につながることだと感じた」

「もの事を広く見ていく視野を与へられた。学ぶことが、実に多かった」

次々に壇上で展開される素直な表白は、感動と共感を以って、聞く者に受け容れられて、一礼して降壇する意見発表者には、惜しみない拍手が送られた。

全体意見発表の折　　早稲田大学政経学部二年　内海勝彦

昨日まで口数少なき班友の今は決意を壇上で述ぶ
胸内をとつとつと述ぶる班友の姿を見れば心うれしも

この全体意見発表のあと、**小田村寅二郎先生**が、「**合宿教室をかへりみて**」と題して次のやうにお話しになった。

「静かに考へ直すと、四、五日前のことがはるか記憶のかなたにあるやうな気がしませんか。それは、開会式の時の一分間の黙禱が長く感じられたやうに、皆さんが精神を緊張させて合宿に取り組み、充実した時を過ごされたからでせう。時の流れといふものは、心の持ち方によって、充実もするし、ぼやぼやしてゐると、あっといふ間に無駄に過ぎ去りもしてしまふ。『我々は刻まれてゐる時の流れの中の一コマ一コマに生きてゐる』、このことを繰り返し思ひ返しながら、これからの大学生活を送って下さい。」

次に先生は

「合宿を通して、年齢や大学の違ひなどの外的な差を取り払ひ、お互ひに一人の人間としてつき合ふといふ『心の平等』が、まがりなりにも実現し得たのではないでせうか。この貴重な体験を各人の今後の生活に生かして欲しい」

と話されて、『平等』といふことの本質的な意味を指摘された。さらに、共産主義の問題点について触れられ、

「共産党が求めてゐるものは、例へば、財産の平等といった外的平等であり、ソヴィエト、中共などでは、この外的平等を維持するために、多くの反対者を殺戮してゐる。日本に共産主義が実現する場合にも、多くの人間を虐殺することなしには無理であらう。共産主義社会は一時的には可能でも、憎悪と闘争心が渦まき、次の瞬間には、外的平等は達成できなくなる。聖徳太子は、政治改革よりも『心の平等』を実現されようとなさった。『内的平等』こそが、我々にとって大切なものなのではなからうか。」とお話しになった。最後に先生は、歴史の学び方についても触れられ、

「歴史を学ぶ時は、事実を第三者的な物指しを使って眺めるのではなく、その時代に実際に生きた人々が、自分の心中を

自分自身の筆で書き記した文献そのものに、素直に接していくことが大切です。」

と示唆され、さらに

「歴代の天皇様は、たくさんの御製を作ってをられる。これらを自分の心で読み味はってから、天皇制についての論議をしていただきたい。」

と、しめくくられた。

感想文執筆

全体意見発表で、いろいろな人達の意見を聞き、それを各様にうけとめた各参加者は、それぞれの班室で感想文をしたためた。閉会式前のあわただしく短い時間であったが、各自、感じたままをそのまま書き綴った。感想文の執筆と同時に第二回の**和歌創作**も行はれた。これらの感想文と短歌を編集したのが、この『**感想文集**』である。

閉会式

全参加者が精魂を傾けて営んだ〃第二十二回学生青年合宿教室〃は、ついにしめくくりの閉会式を迎へた。二回繰り返された「国歌斉唱」は、参加三百三十余名のもろ声が、一つに融けあって力強く響きわたった。

ついで「国民文化研究会」副理事長・小柳陽太郎先生が、

「岡、小林両先生の対談『人間の建設』の中で、岡先生は、奈良の博物館で天平時代の布切れを一枚一枚丹念に見ていって心が本当に晴れる思ひがし、博物館を出たあとの松の木々がたいへん美しかったと述べてをられる。心の洗はれる思ひといふのは、きっと下山後の皆さんの生活の中で、『こんな美しいものがあったのか』と気づくきっかけになるであらう。皆さんのお父さんお母さんに接しても、今までと違った思ひで父母の心の美しさに気づくこともあらう。家に帰ったら、心をこめて『ただいま』と言って欲しい」

とお話しになられ、さらに、

「一人の時は苦しいし、大学の風潮の中で押し流されさうになる時もあらう。しかし、結局、日本民族がゆくべき道は決まってゐるのだ。その大いなる道を堂々と歩くといふ気持ちで生活していって欲しい。『歎異抄』の中に、東北の人々の話がある。親鸞の去ったあと、自信を失って教へを乞ひに来た人々に、『自分には南無阿彌陀仏しかない』と親鸞は言った。南都北嶺のゆゆしき学僧のやうな大学教授はいっぱいをり、いろいろ勝手なことを言ってゐても、信じる心は『南無阿彌陀仏』だけ、我々にとっては、日本への

帰依だけである。日本の国を本当に良くしてゆくには、それ以外道はないぢゃないか。お互ひの協力なしにはやってゆけないぢゃないか。本当に皆さんと来年もお会ひしたい。是非お会ひしたい」

と閉会の挨拶をされた。つづいて、参加学生を代表して、熊本大学三年の原田保君が、

「今は、つい先日会ったばかりの友達が親しく思はれてしかたがない。私は、味酒さんのお話に感動し、天皇陛下のお心の暖かさに感動した。この、理屈にとらはれない素直な感動を大切にしてゆきたい。松陰先生のお言葉の中に『己れの地、己れの身より見を起すべし』といふ言葉がある。観念でない、人の心にふれ得るやうな着実な生き方をしてゆきたい。共に勉強してゆかうではありませんか」

と、参加者一同に力強く呼びかけた。

続いて、「大学教官有志協議会」ならびに「国民文化研究会」の会員全員が壇上にあがり、参加者と向ひあって、互ひに「ありがたうございました」と挨拶を交はした。そして、この合宿に集った全参加者は、合宿後の新しい生活に向かっておのおのの決意を確かめるかのやうに、『**進めこの道**』(三井甲之作詞・信時潔作曲)を合唱した。

最後に、九州大学二年の長澤一成君の「閉会宣言」によって、厳しくも充実した四泊五日の全日程の幕は閉ぢられたのである。

式の後、各参加者は、共に学び合った友との別れを惜しみつつ、再会を約して雲仙をあとにしたのだった。

最後の班別懇談において　　九州大学工学部一年　弓立忠弘

今日からが新しきスタートと言ひし友のつよきことばにひきこまれゆく
合宿で学びしことをいしずゑに今日から我も学びてゆかむ
日ごと日ごと親しくなりし友どちとまた来年と別れゆかむとす
合宿を我に勧めし友を思へば人の出会ひの不思議に思はる

班員諸君に　　講師・助言者　今林賢郁(33歳)

縁ありてつながりをえし友なればきびしきことも言ひし我なり
み友らよおのもおのもに逞しく生きてゆきたまへやこごしきこの世を
学問をきはむることはかたけれどかたみにはげまし助けゆかなむ

助言者の紹介

高崎経済大学・教授　高木尚一
下関市・㈱宝辺商店・社長　宝辺正久
熊本女子商業高校・教諭　瀬上安正
熊本県・八代市・助役　加藤敏治
住宅金融公庫・参与　島田好衛
㈱吉野石膏・総務部付　加部隆三
法政大学・企画調整室・第二部長　香川亮二
神奈川県・舞岡八幡宮・宮司　関　正臣
順天堂大学・教授　鈴木満男
高千穂商科大学・助教授　名越二荒之助
福岡県立・三池高校・教頭　小林国男
熊本市役所・総務局長　徳永正巳
㈱ファミリー・常務取締役　松吉基順
熊本市立・京陵中学校・教諭　松浦良雄
佐世保市・交通局営業課・企画係長　朝永清之
熊本市立・城西小学校・教諭　満崎安
県立・横浜翠嵐高校・教諭　国武忠彦
航空自衛隊・第四術科学校・防衛庁教官　村山寿彦
九州労災病院・神経内科・副部長　田村潔
岡山市立・芳田小学校・教諭　波多洋治
㈱講談社・広告局第一部・副部長　磯貝保博
高知・土佐女子高校・教諭　井上佳彦
熊本市立・藤園中学校・教諭　北島照明
日産自動車㈱・法規部　古川修
新日本製鉄㈱・工作事業部・掛長　今林賢郁
熊本県立・熊本西高校・教諭　片岡健
熊本県球磨郡五木村立・第一中学校西分校・教諭　永井幸男
東急建設㈱・池袋副都心再開発事業工事事務所　奥冨修一
建設省・建築研究所・研究員　大岡弘
福岡県立・嘉穂高校・教諭　小野吉宣
岡山大学・医学部・癌研究所生化学部・大学院生　田中輝和
福岡県立・三池高校・教諭　志賀建一郎
大阪大学・大学院生　清風高校・講師　東中野修
㈱千代田コンサルタント・設計部　松田信一郎
九州大学・医学部・循環器内科・医員　小柳左門
福岡・水崎法律事務所・弁護士　中島繁樹
海上自衛隊・護衛艦〝たちかぜ〟航海長　太田文雄
九州大学・医学部・大学院生　前田秀一郎
戸田建設㈱・建築設計第一部・設計課　青山直幸
大成建設㈱・福岡支店・管理部・経理課　山口秀範
三菱電機㈱・福岡製作所・資材部　福永好紀
熊本県立・松島商業高校・教諭　中園俊郎
福岡県立・若松高校・教諭　坂口秀俊
福岡県・博多高校・講師　占部賢志
福岡県立・豊津高校・教諭　堀田真澄
日立造船㈱・有明工場・船装課　高岡正人
三井三池製作所㈱・技術一部・設計三課　坂本精児
熊本県立・多良木高校・教諭　白浜裕
国鉄・小倉工場・生産技術課　仁多永夫

熊本大学50年卒　田之上　正明
福岡市立・吉塚中学校・教諭　西原　正博
東京都・中野区立・北中野中学校・教諭　石井　孝一
九州大学・工学部・研究生　末次　直人
岡山大学・大学院生　砂川　芳毅
亜細亜大学・学生部　平　槇　明人
日本ユニバック㈱・フィールド統括部・システム推進室　大町　憲朗
福岡県・大牟田市立・大牟田養護学校・教諭　小田　正三
北九州市立・療養所松寿園・技術吏員　森田　仁士
鹿児島県・高尾野町立・高尾野小学校・教諭　内山　なな子
九州大学・歯学部・付属病院　原田　美恵子
熊本県・御所浦町立・御所浦北小学校・教諭　吉永　美子
福岡県・添田町立・添田小学校・教諭　平山　尚美
福岡県・岡垣町立・海老津小学校・教諭　大同　玲子
福岡県・大刀洗町立・本郷小学校・学園分校・教諭　味酒　景子
鹿児島県・輝北町立・市成小学校・教諭　町園　朋子
鹿児島県・上屋久町立・小瀬田中学校・教諭　大久保　民子

合宿運営委員（助言者欄に前出）片岡健　朝永清之　志賀建一郎　青山直幸　小野吉宣

指揮班（助言者欄に前出）白浜裕　小田正三　砂川芳毅　森田仁士　末次直人

事務局（助言者欄に前出）磯貝保博　石井孝一　本会職員・永沢弘子　同・関口牧江　（アルバイト協力者）嘉穂高校三年・溝口由美　同・下瀬由香理　同・人見泰子　三池高校二年・伊藤義郎　第一高校一年・松本明子　真和高校一年・迫田明彦　済々黌高校一年・園村康之　市立熊本高校一年・西川京子

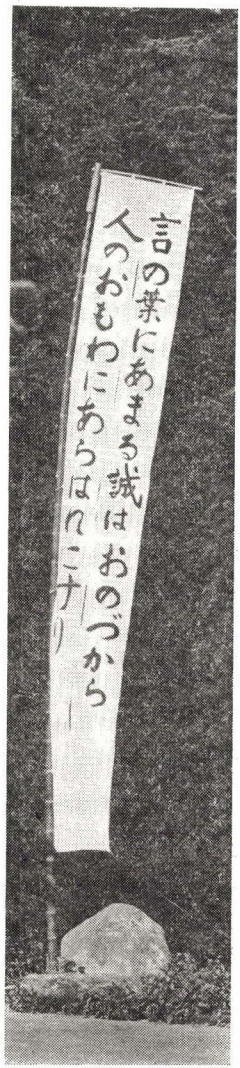
記録班　元最高裁判所秘書課員・速記業・西川伍朔

写真班　亜細亜大学・公報室・加藤幸雄

走り書きの〝感想文〟集（各班別に集録）

閉会間ぎはの三十分間で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらひました。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。この文集の末尾にまとめて掲載したものは第一回の創作です。対比して御覧いただくと大変に進歩してゐる跡がお分りいただけることと思ひます。



ホテルの裏庭にたてられた〝のぼり〟には、明治天皇の御製「言の葉にあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり」が墨蹟も鮮やかに大書されてあった。

第一班—男子学生—

大御心のすばらしさ

（熊本商科大学　商　二年　細波佳祐）

合宿に参加して一番印象に残っている言葉は誠という一字です。この言葉には非常に重大な意味が含まれていることを、諸先生の御話し中で痛感しました。松陰先生の、自分の命を捨ててまでも誠を尽された姿勢は、本当に感銘深いものがありました。また、これまで全く考えたこともなかった天皇様について、その大御心のすばらしさを和歌によって知ることができただけでも大変ためになりました。

日の丸の旗を背にして立ちたまふ師のみすがたはいとうるはしも

学問がしたくなった

（九州大学　工　三年　廣木　寧）

御講義のなかで今林先生が、松陰の文章を読まれながら「人生と学問が一体となってゐる」と言はれました。それは、夜久先生が茶谷さんの遺書を読まれながら「この中に私の言ひたいことの全体がある」と言はれたことと思ひ合はされました。さういふ学問がしたくなりました。

夜久先生の御講義をききて

師の君は三千年前の教へ子の遺書を静かによみたまふなり

教へ子の残せしふみを師は声をつまらせつつもよみてゆかるる

妹にのこせるふみを師の君とよみてゆくうち涙流れく

合宿は新しい出発点だ

（亜細亜大学　法　一年　佐藤光一）

今までは「天皇」とか「日本の国」などをまじめに考えたこともなかったのですが、この合宿に来て、それらの言葉の重大さがわかった。また「何につけても前向きの姿勢が必要である」という言葉の大切さを改めて知りました。そのようなことをよく心に留めて、これからの大学生活をすごして行きたい。その意味で、この合宿は私にとって新しい出発点になると思います。

雲仙の地よりはるかに思ふかな故郷にゐます父母のこと

真の学問を広めてゆこう

（福岡教育大学　教　二年　伊藤　寛）

私にとって、大変有意義な合宿であった。今までの自分を見直し、単に知識だけにとどまらず、自分の血肉となるような学問を学びたい。また、これから友人と語り、合宿で学んだことを話し合って、真の学問を大学に広めてゆきたい。

全体意見発表を聞いて

友どちの決意あらたに言の葉を語るを聞きて涙あふるる

演壇にのぼりし友は言の葉を涙ながして語りゆきけり

心の素直さに眼をひらこう

（東京大学　文Ⅰ　一年　力武孝治）

この合宿で最も考えさせられたのは、心の面から人を見、接し、感ずることである。科学的見地ばかりでなく、その人の内面性を切り捨てては人を理解できない。これは歴史上の人物ばかりでなく、身のまわりの人々に対する場合も同様であり、また書物を読む姿勢にもつながるであろう。

現代では心の素直さ、純粋さが軽視されているし、自分にも思いあたる点があり、ものの見方、考え方の欠点に気づくことができて良かったと思う。

人と語るときの心の大切さをこの合宿で気づかされたり

一つの真理が分った

（福岡大学　商　一年　平山元治）

今林先生が講義のなかで言われた、吉田松陰の「然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かすところにあらず。それただ積誠これを動かし、然る後動くあるのみ」という言葉と、小田村先生の話された言葉に心をうたれた。私は一つの真理が分ったことに対し、非常にうれしく思いました。また来年に友と会えることを信じて突き進んでいきます。

壇上に登りし友はちかひたり真に日本の人たらむことを

カメラ・レポート　1

合宿3日前から雲仙ファミリーホテルに参集した30余名の学生諸君によって、さまざまな準備がなされた。これは参加者の「班別氏名一覧表」の作成風景。

殻を脱ぎすてよう

（長崎大学　教　四年　内田　誠）

小田村先生の「外の殻を脱ぎすてて生活しましょう」という言葉を聞き、これまでの大学生活、日常生活において、殻を脱いで人に接すること、即ちまごころを尽して生活することのできなかったことを思い出し、改めて自己のあり方のむずかしさを感じました。こちらがいいかげんでは信頼されるはずもなく、従って事が成就する筈もありません。そして先人の方々、諸先生の御歌、天皇の御製を拝誦した折に感じました思いの深さ、強さに事の成就を左右するもととなるものをみたような気がしました。

全体意見発表にて

胸のうち語れる友をみつむれば我の体のしらずふるへつ

素直に表現することのむずかしさ

（高千穂商科大学　商　二年　佐々木澄高）

私はこの合宿に参加するまでは、自分の考えを持つこと、それを確めるための機会はほとんどなかった。だから、この合宿で、自分の思ったこと、考えたことを素直に表現し、聞いてもらうことがいかにむずかしいかを痛切に感じました。

掌をつと見つむれば胸内に祖国日本への思ひわきくも

第二班―男子学生―

一から出直しだ……

（九州大学　経　二年　奈良崎修二）

夜久先生の御講義のなかで先生は、戦死した教へ子の遺された遺書と歌を涙で声をつまらせて読まれましたが、聞いてゐる私もこみあげてくるものを抑へることができませんでした。「しきしまのみち」を踏みをさめて生きた教へ子のいのちが、先生のお心の中に生きてゐることを感じました。

もう一つ忘れられないのは小田村先生の御講義です。私は鉄槌をくらはされたやうな気がしました。常に自分の中にあるものをみつめなほし、それの価値判断の基準のやうなものを拭ひ去って、ものごとにぶつかってゐたか。そして特に一人の人間にふれてゆくなかで、繰り返し繰り返し、その人そのものを偲ぶといふことを行ってゐたのか、全く疑問に思はれてきました。今まで自分はあるものにふれて感動しても、その感動を頭の中で説明し直し、それで納得したつもりになってゐたやうに思ひます。一から出直しだといふ気がしてゐます。

夜久先生の教へ子の遺書を読まるるを聞きて

たたかひに果てしみ友の遺されし歌読みたまふ涙ながらに

こみあげし涙をこらへこらへして読まるる思ひ伝はりて来ぬ

聞く我もあふるる涙こらへきれず思はずまぶた閉ぢにけるかな

涙がとめどもなくあふれた

（大阪大学　文　三年　絹田洋一）

味酒さんのお話をお聞きすることができて本当に有難いと思ってをります。

天皇の大御心を体ぢゅうがふるへるやうな思ひで感ずる事ができました。片岡山の太子の御歌の御心が、今もなほ少しも変はることなく生き続けてゐる。有難い、有難いと心の中でくり返しながら、涙がとめどもなくあふれてくるのをどうすることもできませんでした。

夜久先生が茶谷さんの遺書を読まるるを聞きて

師の君のみ胸に浮かぶらむ教へ子の草むす屍となりし姿は

師の君は「草むす屍」とよみたまひあふるる思ひに絶句したまひぬ

虚心に帰ることができた

（皇学館大学　文　三年　深江寛治）

今年で二回目の参加ですが、合宿教室での最大の収穫は虚心に帰れたことです。虚心に帰ることのむずかしさを一年間でつくづく思い知らされました。しかし今では、人の話もすなおな気持で聞くことが出来るようになりました。

また、吉田松陰の「至誠にして動かざるもの未だ之れ非ざるなり」という言葉が念頭を去りません。この言葉は実践すべきことであり、困難であることは百も承知ですが、この一

カメラ・レポート　2

暑い陽ざしの中を全国各地から友が集まる。不安と期待とが交錯する一瞬である。

言が「自分の人生である」と言えるようになりたいと思う。

我もまた国を護りし人々の後に従ひ進みゆきたし

素直でない自分が恥ずかしかった

（熊本大学　法文　四年　胡麻ヶ野克己）

表現のむつかしさ、自分の本当に思ったこと、言いたいことを正確に相手に伝えることのむつかしさを痛感いたしました。とくに和歌創作のとき、自分の詠んだうたをよみかえしますと、本当に自分はこういうことに感動したのだろうか。本当にこういうことを言いたいのだろうかと自信がなくなるのです。それどころか妙に力が入り、気負いさえ感じられるのです。自分が素直になっていないと、その時はっきりと感じました。そして素直でない自分が恥ずかしくてたまりませんでした。

降り続きし雨も上がりてひぐらしの声のさやかにみそらにひびきぬ

素直になれなくて残念

（鹿児島大学　農　一年　中山富士男）

この合宿で、いつも僕の頭にひっかかっていたのは天皇についてですが、いまだによく納得できません。そのせいか、他の面でやや素直になれなかったのは残念です。

己が思ひ友に伝へむと努むれどことば拙なく思ふにまかせず

自分の人生観の曖昧さを痛感した

（福岡大学　経　一年　大山輝昭）

先生方の御講義をお聞きして、ほんとうに勉強になりました。自分の人生観の曖昧さを痛感し、その愚かさを改めて感じました。

朝の集ひにて
日の丸の後に浮かびし雲仙岳にのぼる朝日にいにしへおもほゆ

「至誠」をもって接しよう

（東京電機大学　工　二年　西原弘登）

この合宿において「至誠」という言葉が、一番心に残りました。松陰や太子の「至誠」というものがどういうものかと、ただ考えても分らない。それは僕が「至誠」をもって接しなかったからです。人の「至誠」を考えるためには、自分も「至誠」をもって接しなければならないと思った。

今日こそは別れゆくべきみ友らよ遠く離るとも心交さむ

「真心」ということ

（高千穂商科大学　商　一年　千保木正一）

合宿で気づいたのは、人間は「真心」を持っていなければならないということです。吉田松陰の歌から、それを感じました。私は「真心」という言葉を、この合宿から持って帰

り、この一年間でどれだけ自分のものになるかためしてみたいと思います。

たたかひに命落とせし若人の心思へば胸熱くなる

第三班—男子学生—

友を見つけることができた

（福岡大学　経　二年　杉山直樹）

自分の気持ちを素直に話すことのできる友を見つけることができたのは望外の喜びです。今まで私は「学ぶ」ということを知識の単なる蓄積と考えがちでしたが、小田村先生の御話で、身構えして既成概念で学問をするのは愚の骨頂であり、本当に信頼できる友と一つの輪になって学んでいくことが真の学問であることを自覚しました。それから、日本という私たちが住んでいる「国柄」についてもっと勉強を続けていかなくてはならないと思います。

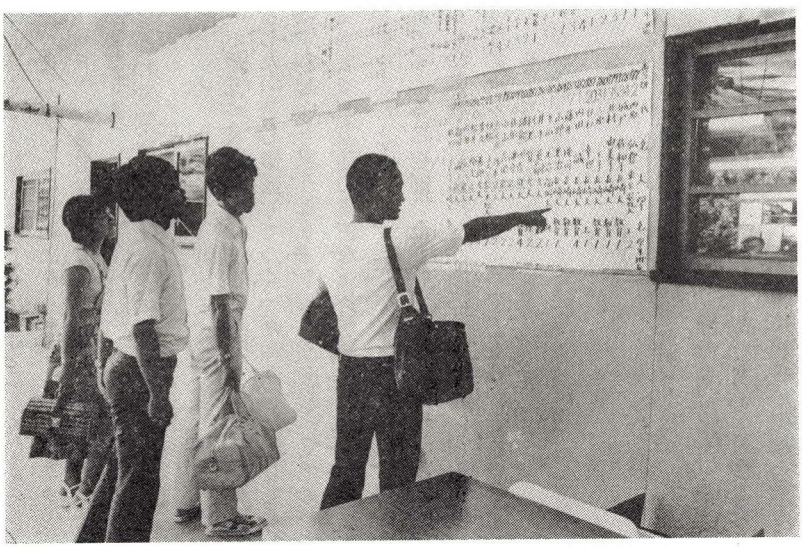
国の為命ささげし人々を思ふは我らの務めなりけり

全く別の勉強をした

（日本大学　法　二年　藤本健二）

私が今までしてきた勉強とは全く別のもっと深くもっと大切な事を学ばせて頂きました。今までの勉強は「勉強のための勉強」という感じがしていたのですが、ここでの勉強は自

カメラ・レポート　3



「僕は、この班だ」「えーと、僕の名前はどこかな」合宿では参加者それぞれが8～9名の班ごとに分かれて、4泊5日間を過ごす。

分の人生を充実させるための勉強といった感じを受けました。そして、日頃は深く物事を考えたことのない私には、ここでの真剣の雰囲気は全く新鮮な驚きでした。この貴重な体験を生かすも殺すも今後の自分の努力次第だと思い、充実した毎日を送れるよう努力していくつもりです。

創らむと心尽くせど己が思ひの歌にならずて心せかるる

心の平等の素晴らしさ

（防衛大学校　三年　中村隆之）

小田村先生のお話にあったように、心の平等まで持ちえている日本の素晴らしさを感じた。外面的、形式的平等を求めて競い合う社会より、心の平等も持ち合わせ、それを発展させて行くことのできる社会は素晴らしい。また、集団にだけ頼っている人間ではなく、問題意識をもち一人でそれを追求できる者こそ、人格的な人間になりうると感じた。

一語一語思ひをこめて語らるる友の言葉に心うたれぬ

深く考え実行したい

（長崎大学　教　一年　出口　昭）

合宿教室の中で感じたことは、人の身になって考え、至誠を尽すことだと思います。今までとかくそういった思いやりといったものは、分ったつもりで気にとめない傾向があったのですが、これからはもっともっと深く考え、そして実行して行きたいと思います。実践することの中から何かが生まれ、そして自分のものになってゆくと思います。

今日からは謙虚に生きるこころ持ち友と手を取り励まし行かむ

和歌創作の喜びを実感した

（九州大学　農　一年　井手英嗣）

和歌をつくることの喜びを実感できて本当にうれしく思いました。苦心惨澹してつくった和歌を批評してもらうとき、はずかしいと思うより、うれしく楽しい気持で一杯でした。そしてまた友達の素直な気持が飾り気なくそのままでている和歌をみたときには、心底からその友達に対する友情があふれでてくるのを感じたものでした。これからもこの気持を忘れずに感動を素直に受けとめる力を養い、相手の身になって相手の話をよく聞くことに努力したいと思います。

班にて永井先輩の決意をききて
ひかへめに語りたまへる言の葉にあふれる決意我にせまりく

合宿で教えられたこと

（京都産業大学　経営　三年　鈴木利幸）

聖徳太子の御本のなかに「我は他に没し、他は又我に生きて」という御言葉がありました。太子が飢え人を自分のことのように思われたように、常に相手の気持ちになって学問をしてゆかねば、本当に自分のものにならないことを、この合宿で教えられた思いがします。

慰霊祭

いなづまの光と共に祈念する我らの前にみたま来たまふ
国のためいのちをすてしますらをのみこころしのび「海ゆかば」うたふ

確信を持つことができた

（名古屋工業大学　工　一年　藤本信介）

合宿教室では実に数多くのことを学び取れ、今まで曖昧だった問題に、根本的に異なったものを得て確信を持つことができました。

和歌に対しては、確かに身構えていたと初めて気づかされ、それからは天皇の御歌なども、すなおな気持で感じ取れるようになり、今上天皇のお人柄も偲ばれます。

友どちと心尽くして語り合ふひとときただに尊く思はる

身構えている自分に気づいた

（岡山商科大学　商　三年　中田武夫）

先生方の講義は自分なりに聞き、一つ一つ理解しているつもりでしたが、班別討論でみんなの話を聞いていると、また違った受け取り方があることに、ただ驚いている毎日のように思われました。そんなとき小田村先生のお話しの中で、自分が身構えているということを知ったとき、その通りだと思いました。この合宿で我々の祖先たちに深く感謝すること、それから我々がこれからの国を守り行くのだということは解りかけてきたように思います。

カメラ・レポート　4

受付では大きな封筒と名札が渡される。封筒の中には各講師が心こめて作成した講義資料をはじめ、参加者の仮名簿などが入っている。名札には班名と大学名・勤務先名が書かれてをり、合宿期間中全員が身につけた。

別れゆく我がみ友らよおなじ道をあゆんでゆかん祖国のために

友の胸をたたいてみたい

（熊本大学　医　四年　小野憲一郎）

今回の合宿教室で得たものは「強さ」への糸口であったような気がする。小田村先生の御話の中に、自分一人で何事も為していく、ということがあったが、今の自分にはそれが切切と胸を打っている。祖国、天皇ということを分っていても、何か率直に自分の大学での友等に語れなかった自分を今恥ずかしく思っている。何事も為し得るのは自分一人であるのだ。この合宿での感激をそのまま持って帰り、友の胸をひとつずつたたいてみたいと思っている。

夜久先生の御講義を聞きて

教へ子の遺書を読まるる師の声はいつかとぎれてむせびたまひぬ
涙声かくしたまはず師の君は声をしぼりて遺歌読まれゆく

第四班—男子学生—

松陰の言葉が実証された

（駒沢大学　経　一年　岩尾　匡）

講義の中で、吉田松陰の「至誠にして動かざる者未だ之れ有らざるなり」を聞いて、ここまで自分の信念を貫き通せるものか、死ぬまぎわまでこういう精神状態で淡々として居れるものかと、驚嘆と疑惑でいっぱいだった。しかし、後の味酒さんのお話で、それが実証された様な気がした。わけの分らない精薄児を、遂に心を開き自己を表現する児にした。それが「至誠」ではなかったかと思った。一心に真心をつくして話せば、周囲の人もうなずいてくれる。そのことが合宿で特に印象に残った。

合宿も早くも終はり胸内（むなうち）の奥に残れる至誠の言葉

「迷わず」と念じて進もう

（岡山大学　教　三年　小田武宏）

今回の合宿では、講義に対する学び方、接し方で何かを求めんとする気迫を持つことができた。しかし、求めよう、心で感じよう、とすればするほど解らないものが生じ、理解したと思っていたことも友の感動を聞くと、自分の不勉強を痛感しました。それに昨年の合宿を心を開かれた思いで終えたのに、この一年はひどいものでした。それを繰り返さないためにも、この先、自己の内部に迷いを生じようとも「迷わず」と心に念じて進みたいと思っています。

班員の一人一人にはげめよと言はれし班長の言葉うれしも

印象に残ったこと

（鹿児島大学　教　三年　高梨幹孝）

味酒先輩の教え子とのふれ合いを通じて感じられたこと

や、陛下が子供たちと心と心とで接しておられる御姿を述べられた研究発表。そして小野先輩が陛下の御製に出てくる「胸せまりくる」というお気持ちを、御自分の教え子がなくなったという事実に対して、先輩が感じられたお気持ちと照らして、捉えておられるということを述べられた所感発表が印象に残っています。また合宿中に度々でてきた「至誠」ということを心にとめて、つきあいを広げてゆきたいと思っています。

思ふこと我が心には残れども友とわかるる時ははや来ぬ

不満が残った……

（日本大学　文理　二年　川瀬賢一）

自分なりに考えさせられ、理解したのですが、まだ不満が残ります。それは、講義が天皇を中心にしたものであり、和歌も天皇の歌が大多数であったということです。自分は天皇をただの象徴としか見られないのです。しかし、合宿で考えさせられたこともあります。日本の国に生まれたのだから、日本という国を知らなくてはならない。また自分をもっと鍛えなくてはならないということがそれです。

酔ってしまってはいけない

（九州大学　工　二年　清水康博）

合宿で得たものは、歌なり文章なりを書いた人の心に少し

カメラ・レポート　5

主催者の大学教官有志協議会ならびに国民文化研究会を代表して、小田村寅二郎先生が開会の挨拶をされた。

でも近づこうとする態度です。しかし、それ以上はどうしてもついてゆくことができません。昔の人の心に触れるのはよいことだと思うけれども、ただそれに酔ってしまい、その状態から抜け出せないようではいけない。我々が生きているのは現在であり、今をどのようによく生きるかということこそ大切なことだと思う。

言の葉の奥にかくるる友の思ひを察することの難しきかな

なにか心に残るもの……

（熊本商科大学　商　二年　辻本士誠）

先輩に誘われるままに合宿に参加した僕は、最初のうち、講義の本当の意味がわからないでいました。しかし、青年研究発表や、今林先輩の吉田松陰についてのお話を聞くうち、なにか心に残るものがありました。その思いを討論の場で話すうちに、自分の考えの浅さを知りました。この合宿で得たものを大学においても考えていきたいと思っています。

夜久先生の御講義を聞きて
読む人の心に触るる思ひして涙出づるを押さへきれずも

歴史を学ぶとは……

（九州共立大学　経　一年　川原敏昭）

歴史を学ぶときは、その人物のものの考え方や、歌などにふれたりして、その人物になりきらなければ本当に学んだとはいえない。また、その人が一生懸命つくった歌を、いいかげんな気持でよんでは、心からの感動はこみあげてはこないのだ、ということを僕はこの合宿で学んだと思う。

己が心を開いてくれし友達とまたいつの日か会ひたしと思ふ

和歌から感じ取れるもの

（亜細亜大学　経営　一年　小林隆秀）

この合宿に参加して、何か大切なものを把みとったようで心が明るく、「さあがんばるぞ」という気持が胸の奥底から起ってきます。和歌をよんでみて、一首一首にその人の思いが、計り知れないほど含まれている気がします。それを知らねばならぬ、感じ取らねばならぬという気が胸の奥から切実に起りました。その思いを言葉に現わすことは難しいが、短歌によむなり、友達にその思いを話していくことを心がけようと思っています。

苦しみに耐へつつ思ひをのべたればすぐに答へし友有難し

心に泌みいるような思いがした

（熊本大学　教　四年　南田武法）

今回ほど陛下様方の御製に多く接した合宿はなかった様に感じました。先生方の御講義に感じられるお心づかいの力をかりてではありましたが、心に泌みいる様な思いが致しました。心をこめて書かれたもの、話されたものは、こちらも心

で受けとめなければ理解できないところがあります。自明の理のようですが、この積み重ねが大切だと思います。今までの自分から一歩また殻をつき破ってゆかねばという思いで今は一杯です。

朝のつどひにて

泣くまじと思へどけふの友らとの別れ思へば涙流るる
耐へがたき思ひの胸につのりきて思はず涙こみあげてきぬ

第五班—男子学生—

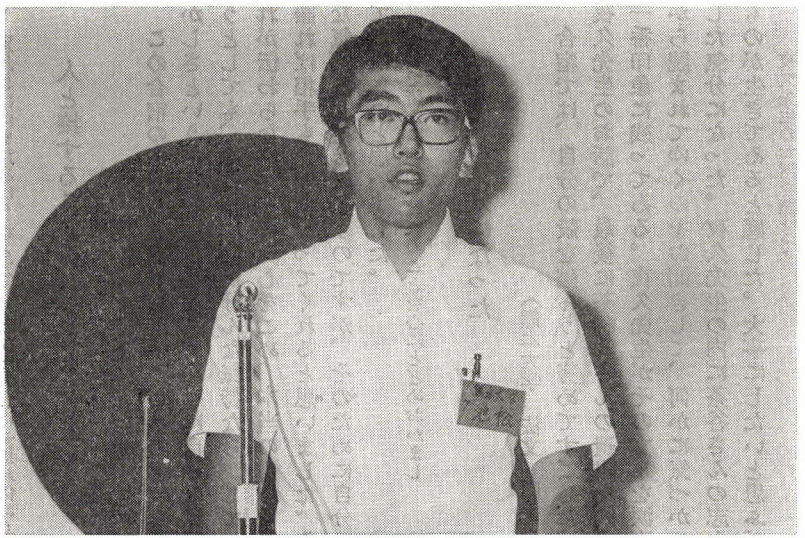
もっと話をしたい

（九州大学　工　二年　亀川龍彦）

思ったことをありのままに話し、今まで自分なりに築いてきた価値判断の基準というものをかなぐり捨てて話し聴くようにすることを、私はこの合宿で十分自覚し努力したつもりであった。が、ふりかえってみると、全く満足できない。しかし今になって後悔しても始まらず、それよりも重要なことは、今痛切に感じている「もっと話をしたい」という気持を忘れないようにして、これまでつき合ってきた者、これから会うであろう人に、合宿で学んだ接し方をしてゆきたいと思う。

従業員の方の苦労ぞ偲ばるる洗へる茶碗に茶を注ぎつつ

カメラ・レポート　6



参加学生を代表して、地元熊本大学工学部4年の池松伸典君が、合宿教室に臨む決意を述べ、開会の挨拶を行った。

祖先に恥じないようになりたい

（鹿児島大学　法文　三年　福永敬大）

茶谷武さんの遺書が読まれるのを聞いて、国を守るために死ぬということと、友を忘れず親や兄弟への思いやりを忘れないということが、どこかでつながっていたのだと思いました。むしろ親や兄弟をも感動させるほど国への思いが強いのかも知れません。死んだ人がまるで生きていて語りかけてくるようです。あくまでも長く長く努力して、国を守るために命を捧げられた祖先に恥じないようになりたいものだと思います。

先輩の言葉は耳に痛くして心の底にとどめおきなむ

和歌の素晴らしさを感じた

（中村学園短期大学　家政　一年　花田健一）

一番印象に残ったのは和歌創作でした。和歌をつくるのは初めてだし、時間もなかったので、軽い気持でつくったのでした。その後、班別相互批評で「この和歌はばらばらで言葉の羅列にすぎず、歌に自分の感動が現われていない」と言われました。自分の歌に対する気持を見ぬかれたと思い、何も言えない気分でした。そして歌というものは、ありのままの自分を現わすのだと思い、和歌の素晴らしさをつくづくと感じました。

別れぎはにまたあはうねと友どちと顔を見合はせ別れ惜めり

人と接することのむずかしさ

（亜細亜大学　経営　一年　田部洋一）

この合宿の中で、僕は人と接することのすばらしさ、むずかしさというものを感じました。相手に自分の気持を告げようとしても、それがいいかげんな気持なら決して相手にはそれが伝わらない。でも真心をこめ、本当の偽わらざる気持で語れば相手もきっと分ってくれると思いました。そして謙虚な気持は必要だと思うのですが、そのために自分の心を曲げてはならぬと思いました。

合宿で新たに知りし数々のことを心にとどめおかまし

緊張した気分になった

（熊本大学　法文　四年　窪　辰郎）

合宿では、自分の殻を破らうと努めてすごした。その中で夜久先生のお話で、最後に茶谷武さんの遺書を読まれた事が一番印象に残ってゐる。夜久先生がその文章を涙声になりながら読まれてゆくのをお聞きして、何かに気づかせられ緊張した気分になった。夜久先生の内に茶谷さんの志といふ様なものが生きてゐると感じた。大事にしたいと思ふ。

夜久先生のお話を聞きて

心こめ書読み給ふ師の君の言葉は次第にかすれゆきけり

心こめ読みゆき給ふ師の君の言葉に我も心ふるへぬ

これまでの私が崩れていった

（長崎大学　工　二年　沖本裕志）

私は現在、大学で学生運動をしており、合宿に偏見をもって臨んだため、最初のうちは気持がいら立ち、心は閉ざされていました。しかし、「そういうふうに自分のカラに閉じこもっていては学問の学び方もなにも分らない」といった指摘を受け、更に小田村先生の御講義で、私の高慢な姿勢や思考の浅薄さに気づかされ、これまでの私がガラガラと音をたてて崩壊してゆくのがわかりました。現在の私の気持は正直いって悲しいやら苦しいやら、落胆の気持で一杯です。

合宿にいさみ来たれど帰るべき今は心の千々に乱るも

合宿で気づかされたこと

（大分工業大学　工　三年　山本正博）

日常生活で自分自身が祖先がはぐくんできた歴史に対して、いかに無関心であったことか。祖国を真剣に考えることができなかった。思っていることを素直に言葉に現わすことが大切であること、人に接するときに身構えて人の言葉を聞き、イデオロギー的なことでしかのみ、ものごとを把えられなかったことなど、様々の事を、この合宿で気づかされた。合宿が終っても、いつでも真心をもって行動できるよう努力してゆきたいと思う。

カメラ・レポート 7

運営委員長の熊本県立熊本西高校教諭・片岡健氏が、運営委員を代表して合宿の運営全般について説明する。

やすらかに眠りにつけるみ友らの寝息聞きつつ床に入りぬ

第六班―男子学生―

先人の志を継いでゆこう

（長崎大学　教　三年　奥村市郎）

茶谷武さんの遺書にあった「私達ヲ礎トシテ立チ上ッテクル第二ノ国民」という祈りが、果して今日成就されているだろうか。国会を見よ、職場を見よ、大学を見よ。そこには欺瞞と退廃がうず巻いているのではないか。私は大学において、一人の日本人として茶谷さんの志を継いでゆくことを決意する。真の闘いは一人の孤独なる闘いから始まることをこの合宿で知った。

志の定まりゆかぬ苦しみに吾は幾夜もねられざりしも

共にやってゆこう

（福岡教育大学　教　二年　井上貴詞）

「学問」の姿勢をどういったところにおくか、「感ずる心」はどうすればよいか、などを諸先生からお聞きした訳ですが、それをあらためて自分の中で整理し、どのように実践していくかが私自身のこれからの課題だと思います。

同班の友らと、各々決意を述べあい、本を読んだ感想を手紙で送る約束をしました。互いに手をとり合って、共にやってゆけることを嬉しく思います。

友どちと集ひし五日もはやすぎて今日はわかれの時とはなりぬ

友どちとやうやく心のかよへるに惜しくもあるか帰る日の来る

身近な生活を変えてゆこう

（早稲田大学　政経　二年　内海勝彦）

合宿を経験して、僕は今まで自分からぶつかっていく気持が足らなかったことを反省させられた。たとえ未熟でも、自分の意見を述べていこうと思う。自分の力不足を感じても、その思いを更に勉強してゆこうとする活力にして、再び自分の真心をかたむけてゆこう。そんな自分の身近な生活を少しずつ変えてゆくことから、本当の学問は出発するのだと思った。自分の真心を尽していく中に、日本というものは感じとられていくのではないかと思う。

全体意見発表の折

昨日までロ数少なき班友の今は決意を壇上で述ぶ

胸の内をとつとつと述ぶる班友の姿を見れば心うれしも

全てが今から始まる……

（九州共立大学　経　一年　町田豊彦）

本当の勉強がどういうものか、ほんのわずかですが分ったと思っています。そして今、頭の中にいろいろな言葉がつまっています。感じただけでなく、文字にし言葉にし実行しなくてはなりません。それに仲間をつくること、本をいっぱい

読むこと、なんだか全てが今から始まるという気がします。問題は、どこまで今の新鮮で素直な気持を持ち続けるかどうかです。頑張らなくてはと思います。

合宿の終りてみればしみじみと苦しき日々のなつかしく覚ゆ

心を通わせることが必要だ

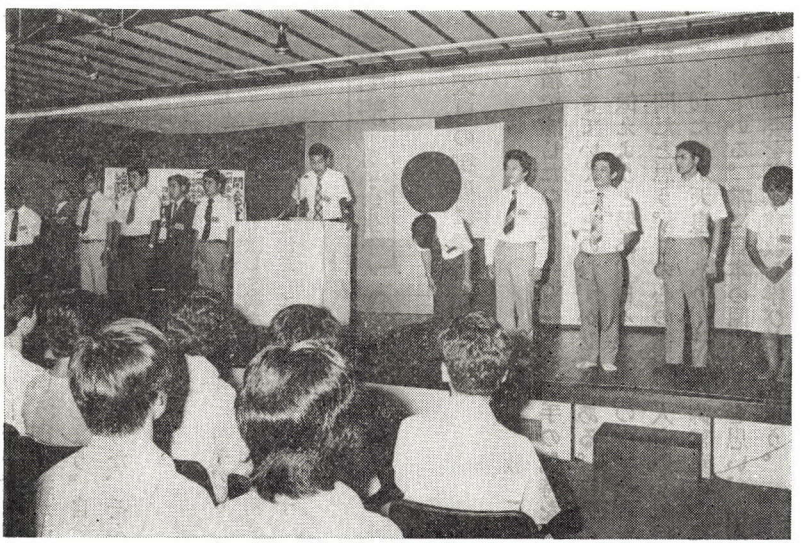
（鹿児島大学　法文　三年　中野　弘）

合宿中は何度か目頭に熱いものを感じ、上を向いて涙をこらえたことがありました。一人の人間が多くの人々を感動させる。私もいつかは、多くの人々を感動させるような人間になれるように努力したいと思います。

味酒さんのお話では、身障者の子どもとのふれ合いが眼の前に見えてくるようで、つきあげてくるものが胸の内にありました。「身障者に愛の手を！」と、口で言うばかりであってはならない。本当に身障者の子どもの心の中にはいることによって、心を通わせてゆくことが必要だと思います。

夜久先生の話された、茶谷さんの遺書は本当によみづらいと思います。それは読みにくいということでなく、よみ進むにつれて胸の中が一杯になり、それが爆発しそうになるからです。しかし私たちは読まなければならない。読んで先人達がどういう思いで死んでいったのかを、よくかみしめねばならないと思う。そして今の私たちの平和と豊かさが、そういう先人達の志によって支えられていることを痛感し、日常の

カメラ・レポート　8



勤務先から有給休暇をとってかけつけた合宿ＯＢの若い社会人達が合宿運営にあたった。開会式後、直ちに運営委員、指揮班長、事務局長、ブロック長が次々と紹介される。

自分をかえりみて、そういう人々に申し訳ないという気持になったのでした。

友どちの語る言の葉聞くたびにあらためて思ふ道の険しさ

祖国を念ふのは当り前だ

（熊本大学　理　二年　那須三元）

自分の祖国を念ひ、その歴史を尊ぶことがどうしていけないのか。我々は今までごく当り前に、自分の生まれた町や村を愛してゐたではないか。そのことと自分の生まれた国を愛するのは、どう違ふといふのだらう。自国をおもひ、先人が一体どう生きたかを偲ぶことの素晴らしさを僕が感じたやうに他の人にも感じて欲しい。僕は接することの出来る人には、できるだけこの僕の気持を伝へ、わかってもらひたいと思ふ。

最後の班別懇談の折に

おのおのの決意を皆で語り合へば頑張らうてふ力わきくる
この決意衰へぬやう帰りても手紙出さうと誓ひ合ふなり
自らの読みし書物の感想を送り合はうと誓ひあふなり

全身が打ちひしがれるようだった

（九州大学　理　四年　多久善郎）

小田村先生に感動した。久しぶりに人物に出会い、全身が打ちひしがれるようだった。学問への厳しさ、生き方の厳しさそのものが感じられた。「人間性を大切にするには、人と人の心の平等こそが大切なのだ。人間と人間の心が通いあうことこそが全ての根本なのだ」という御言葉が心に残っています。言葉とは本当に人間を変えてしまう。自分がいるだけで回りの人々が本当の気持を言えるような、そんな人間にならねばと思う。

小田村先生の講義を聞きて

生き様の全てを吾に投げかくる師の言の葉に涙あふれり
「生きる」とはかくも激しき事なりと師の言の葉に力湧きぎぬ
師を慕ひ吾も続かんと決意して吾が心根の震へる心地す

第七班―男子学生―

天皇の御姿に学びたい

（長崎大学　教　二年　藤井隆司）

合宿で感じたのは、一瞬一瞬の相手の気持を考え、一瞬一瞬を生きていくことのむずかしさである。自分の心を開いて相手に伝えようと努め、日々の生活の中でそれを行っていくのが学問だと思う。この心の修業、人を思う気持を大切にしてこられたのが天皇であり、それは御言葉の中にはっきりと表われている。常に日本の国のことを思い、悩んでこられた天皇の御姿を私は尊敬し学びたいと思う。

み友らと学びしうちにやるぞとふ思ひ沸き来て嬉しくなりぬ

ヒントが得られた

（岡山大学大学院　農　一年　稲森龍平）

自分の心の支柱は何なのだろうか、という思いが心に去来し、ものごとに感激するとか、美しく感ずるとかということを忘れていた。しかし、この合宿で、和歌をつくり、和歌を味わうというなかに、現在の生活を脱却するヒントを得たような気がする。

壇上の小田村先生のお姿は小柄なれども富士山の如し

大御心を偲ぶことの重大さ

（九州大学　文　四年　前原幸博）

大御心をまごころこめて偲ぶことの重大さを改めて感じさせられました。「国がらをただ守らんといばら道進みゆくともいくさとめけり」という陛下の御歌をよんで、敗戦直後における陛下の並々ならぬ御決意を肌で感じとることができました。この歌を何度も何度もよむうちに、今までの「私にとって天皇とは何であるか」という思いから「天皇さまにとって、そして日本の国のいのちにとって私は何なのか、私は何を為しうるのか」という思いに変っていったのです。

茶谷武兄の遺書を読みて

後に続く同胞信じ散りゆきし先達の心われ吾れめや

カメラ・レポート　9

合宿の日程を時間通りに運営することは指揮班が最も苦労するところだ。指揮班長・熊本県立多良木高校教諭・白浜裕氏が朝の起床の放送から就寝までの一日の日程の総指揮をする。

五日間があっという間にすぎた

（日本経済短期大学　経営　一年　後藤繁見）

班別討論や先生方のお話は大変有益でした。特に国民にとって、天皇の存在がどんなに大事であるかを知らされました。それから、人に自分の気持を分ってもらうむずかしさや、自分自身の勉強が足りなかったことがよく分りました。この五日間があっという間に過ぎてしまったような気がします。

友どちの後姿を見守りたればまた会はむぞとふりかへりたり

心が触れ合ふ喜びを知った

（熊本大学　工　四年　池松伸典）

合宿が終って思ふのは、心が触れ合ふ喜びを知ったといふことである。すばらしい講義を聞いての感動を詠んでいる歌などにふれると、いっしょになって喜びを感じた。

夜久先生が茶谷さんの遺書にふれられ「茶谷君の身体は死んでしまったが、この文章のなかに生きてゐる」と言はれたとき、自分の思ひを表現することの大切さを知るとともに、和歌のもつ素晴らしさを感じた。

全国ゆ集ひ来たりし友どちも思ひ新たに別れゆきけり

「内面的平等」に対する確信

（早稲田大学　政経　一年　三舛清美）

私はこの合宿で、小田村先生が言はれた「内面的平等」に対する確信を得ました。その上に誠を積み重ねて生きていくといふ、これからの生活に対する大きな指針を与へられた。今後、この指針を忘れ勝ちになったら、合宿教室での感動を心の中に蘇えらせ、自分を戒め自分に本当に必要な学問を積み重ねていきたいと思ってゐます。それと同時に、友人たちにも問題を投げかけて、一緒に考へ、勉強をやっていきたいと思ひます。

真の教育者の魂を見た

（亜細亜大学　経　二年　武井将明）

教えを求めくる若い魂と一体になることの出来る魂。一人一人の環境、気質、才能に応じてともに悩み、ともに考えることの出来る魂――これこそ真の教育者の魂であると思います。この合宿で真の教育者の魂を目前にし、感ずることができた。先生方のみならず、「一言ももらすまい」「少しでも感じよう」と耳をそばだてて聞いてくれる友の姿にも大きな感動を覚えています。私はとてもうれしかった。これほどまでに真剣な姿で私の話しを聞いてもらえたのが、「至誠にして動かざる者未だ之れ有らざるなり」と言われた松陰先生の御

言葉が今わかるような気がします。

私は少しずつではありますが、日本人に生まれてよかったと思うと同時に、日本人としての誇りを取り戻しつつあると思います。

友どもに思ひとどかずいらだちしことの今ではなつかしく覚ゆ

山降りる時間せまれど気は重くいま一度だけ討論したし

第八班—男子学生—

心につまづくものがあったが……

（福岡大学　工　二年　疋田　真）

合宿に来る前は、祖国とか天皇とかいうものに全く関心がなかったので、講義を受けるとき、自分の心につまづくものがあったように思います。しかし夜久先生の講義にあった茶谷先輩の遺書や、御製にふれるうちに、天皇が自分達国民をいかに思いまたみつめて下さっていたかを感じました。また祖先の人々が祖国のためを思いながら死んでいかれたのを思うと、今自分があるのもこの人たちのおかげだと思い、ありがたいと思う気持になってきました。

むねせまりくるとふみ言葉を皆共に声に出だせば涙こみあぐ

第1日目の夜の合宿導入講義は、福岡教育大学教授・山田輝彦先生の「問ひ直されてゐる学問——人間の再建のために——」と題されたお話であった。

何とかしようと頑張った

（熊本大学　医　二年　東　兼充）

合宿では、御製や人の話を聞いて素直に感動できぬ自分を何とかしようと頑張った。また、自分が日本文化に対しいかに無知であるかを知らされ、自分の今までの勉強がいかに自分の生きる上での力になっていないかを知らされた。けれども、今後自分がどのように生きていくのかという点での指針を与えられた気がしている。

合宿の最後の朝に晴れ晴れと広場に出て日の丸仰ぐ

悔いのない合宿であった

（長崎大学　経　三年　北林幹雄）

私はこの合宿に参加して本当によかった。先生方のまごころこめて語られる一語一語が胸にしみいるように思えました。また班別討論でも友達の一言一言に注意を傾け、何を言わんとしているか聞き入りました。講義にも班別討論にも全神経を集中させたつもりです。いまだ至らざるところはありましたけれど、悔いのない合宿でした。最後に小田村先生の「一人でやれる人間であらねばならない」という言葉に、今までの自分の甘さを知らされ、今より後は「私より事を起す」気持で生きていきたいと思います。

茶谷武さんの遺書を読みて
お父さん笑ってほめて下さいと言ひし言葉に涙流るる

慰霊祭にて
日の本の神々まつる斎庭（ゆには）にて読まるる御歌おごそかに聞ゆ

松陰の生きざまにうたれた

（岡山大学大学院　工　一年　佐藤信彦）

私がこの合宿に参加したのは、自己の「精神的支柱」にヒントをみつけられるかも知れないと思ったからです。講義で吉田松陰の話を聞いたとき「これだ」と思いました。志をもって強く生き、それを信じ死んでいった松陰の生きざまに強く心をうたれました。私は松陰とその背景について、さらに勉強してそこから何かをつかみたいと思います。

合宿ではじめて知りたる松陰のあとにつづけと我ははりきる

大御心を偲ぶ姿勢が大切だ

（大阪大学　人間科学　三年　小南浩一）

小田村先生は御講義のなかで、天皇の戦争責任を認めるか認めないかといふ議論は外面的なものにすぎないと言はれました。僕らはさういふ議論をするとき、知らず知らず既成の概念操作によって物事を考へがちです。しかしそれは、天皇の大御心を偲ぶといふ、最も大切な姿勢からどれ程かけ離れたものでせうか。ぼくは黒上先生の御本にある「わが心を人の心にそそぎ、人の心をわが心に見る」といふ気持で、友達をはぢめ多くの人々に接していきたいと思ひます。

小田村先生の御講義をお聞きして

師の君のこころこめたる言の葉はわが胸内につささりけり

日本人であることに目覚めた

（鹿児島大学　教　三年　篠田哲秀）

夜久先生の御講義の中で日本の哲学のことがでましたが、西洋哲学に比して、太子の御本などは何と心のこもったものなのでせう。日本人本来の感覚として、自分自身の内面的なものに眼を向けようとするのに対し、西洋の外面的な平等、表面的充実をのみ求める思想に冷たさを感じます。

国歌斉唱、国旗掲揚、慰霊祭で受けた感激は、私が日本人であることに真に目覚めたと言へるのではないかと思ってをります。その感銘を大切にし、着実なものとしたいと思ひます。

合宿をふり返りて

師の君が骨折り給ひ今年も大合宿はひらかれにけり

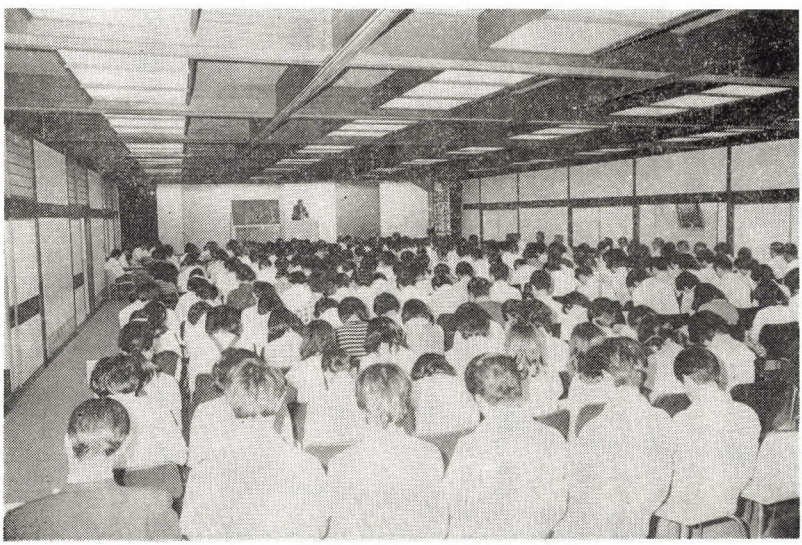
日程をとどこほりなく進めんと骨折られたる人もありけり

歌稿などの印刷をされし人々の骨折り思へばありがたきかな

生き生きとした御言葉

（九州大学　医　二年　笠　晋一郎）

輪読や班別討論で私は自分の素直な心の内を話しているつもりだったのですが、素直な気持のままで御講義や本に向うのではなく、こう考えるのが正しいと頭の中で基準をつくっ



「戦後32年といふことは、戦争で亡くなられた方々の33回忌にあたる。青春の多感な時に、どういふ体験をするかといふことが一生を支配する」との山田先生のお話に、全参加者が深く聴き入る。

ていたのではないかと思えたのです。素直な態度から得た日本人として生きることの実感をも殺してしまっていたのではないだろうか。自分の痛切な気持の裏付けを離れて、日本人として生きねばというスローガンをつくりあげていたのではなかったか。この時、「我は他に没し他は又我に生き」という御言葉が生き生きとしてきたのです。

とつとつと友の語りし言の葉に我が誤りを気づかしめらる

喜びに胸がいっぱいだ

（亜細亜大学　経営　二年　今井洋一）

先生方、先輩方の熱心な講義を聞いて、僕はうれしさとこの合宿に来た喜びに胸いっぱいです。講義のなかで、学問の学び方、人との接し方が一番心に残っています。その人がどの様な気持でそれを言い、考えているのかを十分考え理解し、人と接すること。これは学問の学び方でもあると思います。本当に為になった合宿です。又、為になっただけで終らせたくないと思います。

もやもやとふさぎたる我が胸内を言葉に出だせず空しくなりぬ

心の広さに魅かれた

（西南学院大学　文　一年　有江淳二）

僕はまだ未熟な人間であるが、班の人々は僕を理解しようとして下さった。そして僕もその人たちの心の広さにひかれて、自分を隠すことなく話そうという気になった。本当に心をうちあけ、素直な気持でいれば、自ずと相手の気持も分るし、自分を理解してもらえることが分った。僕はこれからの人生で、素直な心を持ち、自分をしっかりと磨き、相手の気持を十分うけとめることのできるやわらかな人間となってゆきたいと思う。

和歌なほす友のきびしき眼なざしに心あらはれすがすがしきかな

第九班―男子学生―

学問姿勢について啓発の連続であった

（長崎大学　教　三年　板垣雅勝）

先生方や班づきの方の人の心を察する力と、その自己表現の豊かさに接した時、その中にこそある、教育というものの機微、そして難しさを感じた。小田村先生は、和歌の相互批評の中で心を労し、細かく神経をつかって修正する作業のうちに、教育というもののあり方があるのではありませんかと言われたが、ハッとさせられた御言葉であった。また、〝学び方〟という御話の中で、身がまえの姿勢ほど、学問をする上でくだらないものはないんですよ、と強く先生が言われたことを、心に銘記しておきたいと思う。友人に心を開いて話をすることの大切さは理解できたが、それがなぜ国や天皇陛下のことに結びつくのかという疑問が生じたときに、小田村

先生だったら、どういう本を読んだらいいんですか、どうしたらわかるんですか、と聞くだろうと言われた。そのような姿勢こそが学問をするものの姿勢ではないか、という先生の御言葉を聞いて、また、ハッとするものがあった。そういう啓発の連続が、この合宿であったような気がする。

心から思ひをこめし師の君のみ言葉ひとつも聞きもらすまじ

和歌を通して自分を見つめた

（西南学院大学　経　二年　小嶺和弘）

この合宿をふりかへってみると、先生方の御言葉に数々の感銘を受けましたし、また、自分といふものを見つめ直す機会を得て、本当に良かったと思ひます。特に、和歌といふものに接して、自分の気持ちを、ぢかに言葉に表はすことの難しさを感じました。また、先人の歌を勉強することによって、人の心をわかることもできるし、自分といふものを見つめ直すこともできるのだといふことも、分ったやうな気がいたしました。

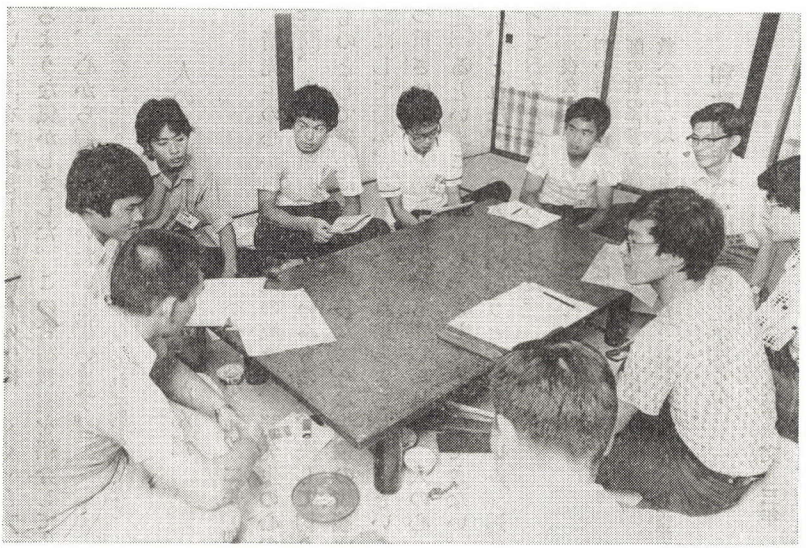
心から語れる友の言の葉の素直に聞けぬわが身悲しき

松陰の学問姿勢に目を見開かされた

（早稲田大学　社会科学　二年　阿川信次）

今林さんの御話をお聴きし、吉田松陰の学問に取り組むその姿勢に、改めて目を見開かされる思ひがした。『講孟余話』

カメラ・レポート 12



班における研鑽の一コマ。つたなくとも心の底からの言葉は、班員の共感を呼んだ。共に学ぶことの意味と姿勢を確め合った。

の最初の文、「聖賢に阿らぬこと要なり」といふ言葉が思ひ出された。「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。吾れ學問二十年、齢亦而立なり、然れども未だ能く斯の一語を解する能はず」とある言葉に、ハッとさせられた。

合宿で学びしことはすべてみな誠とふことにつながると思はる

自分の心をしっかりつかみたい

（熊本大学　工　二年　内海　弘）

今思っていることは、自分の心をみつめることが大切だということです。私は心を一つ持っている。その心が常に動いている。それが激しく動くと、二つ以上の心が自分の中に混沌と存在しているように思われて、自分の心をそのまま言葉に表わすことが、とても難かしく感じられます。これからの人生を歩いていくには、自分の心をしっかりとつかんでいなければいけないと思いました。

礼をして腰を降せば師の君の激しき気魄の感じられたり

言葉の一つ一つが意味深く感じられた

（亜細亜大学　経　一年　小俣新一）

一番自分が思ったことは、物を考え、感じる事、普段そんなに深く感じたこともなかった言葉が、すごく意味深く感じられたのです。そして、最後の小田村先生の御講義の中で、自分が正しいと思ったら、それに積極的に取り組んでいく、という話をお聞きした時、心の中に、ぐぐっと力がわいてくるような気がしました。この合宿教室を紹介してくれた先輩に、心から御礼を言いたいと思います。

夜を徹し語り合ひ来しみ友らに別れ告ぐれば胸あつくなる

人の心に通づるのは気迫いかんだ

（九州大学　法　二年　加藤多夏詩）

諸先生の心からの御言葉の数々に、諸先生の心の中では、学問、人生、祖国、慰霊といふものが、決して切り離せないものとして確かにあると感じた。今林先輩の講義要旨の〝至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり〟といふ言葉のもつ重さは、皆と語らふ中でも感じられた。人の心が人の心に通づるといふことは、じっとしてゐてもできない。自分自身が、どれほどその人に迫ろうとするかといふ気迫何如にかかってゐると思ひ知らされた。

夜久正雄先生の御講義を聞きて

師の君は今亡き友の遺文をば声ふるはせて読み給へけり
師の君の亡き友思ふ御心のせつに伝はり涙あふれり
教へ子といへども今は師と呼ばむてふ師の御心の伝はりて来ぬ

和歌創作は学問姿勢に通ずる

（東洋大学　文　三年　積　是明）

和歌を創作するといふことは、そのまま、学問の基本姿勢に通ずることだと、本当に実感いたしました。もっとスッキ

リと、素直に詠へるやう、自然の歌をも詠へるやう、努力したいと思ひます。

心こめ魂こめて語らるる老先生の声枯れにけり

ついにうちとけられなかった

（熊本大学　医　一年　古井博明）

天皇の事について、今まで話をした事などほとんどなく、この合宿がどんなものか全く知らずに来てみて、一日目の輪読の時間、「海ゆかば」の詩を読まされた時、僕の心には拒絶反応がわき起った。身がまえをした。それ以来ずーっと、僕は、心の内を開けずじまいだった。本当にさみしいことだ。天皇の和歌を読んだ時も、僕には、それがすばらしい和歌だとは全然思えなかった。しかし、うちとけられぬ自分というのは、決して偽りの自分ではなかったと思う。

我が身をばさみしく思ふ事さへもさみしきものと心に感ず

第十班—男子学生—

まず、とことんやってみるのだ

（熊本大学　理　二年　松井裕次）

僕は、何を考えるにしても必ずぶつかってくる所の、天皇と国家の問題が、素直に考えられないのでした。それが、小田村先生に、実にタイミングよく、その指針を与えて頂き感

「うーん、まだねむいな」第2日目の朝が明けた。6時半に起床して、朝の集ひにかけつける。

謝しております。先生が、「とことん、やってみるのです。それで自分にそぐわない結果が出た時は、離れればそれでいいのです」と言われた時、これが学問をするものの姿勢だと思いました。相手の言ふことを聞きいれるだけの心の余裕と、相手をその時は信頼しきることが大切なのだと思いました。

ひしひしとこみあぐるらし感動に友は言葉をつまらせたるか

現代思想の欠陥がはじめてわかった

（亜細亜大学　経営　四年　鹿島洋一郎）

本当に学問をする為には、緊張した心持ちになり、かつ、大きな努力を払わなければならないのだということが、よくわかりました。また、心の内のわだかまりにあせりながらも話す私に、真剣に応えてくれた同じ班の友達には、感謝の念で一杯であります。この何回目かの合宿に参加して、現代の思想というものが如何にいいかげんなもので、さらに、実にもろいものであるかということが、はじめてわかったような気がいたしました。

茶谷武氏の御歌を夜久先生が読まるるを聞きて

師の君が言葉つまらせ読みたまふお歌を聞けば胸のつまりぬ

父母を思ふ胸内せまりきてますらをの姿目に浮かぶかな

己に忠実なれ

（西南学院大学　法　三年　布野良明）

私は、「何かを学び取ろう」と思って参加しました。今は、学びとったものがあまりにも多いために、整理するのが困難なくらいです。そのうちの一つとして、一つの言葉の意味する内容が、莫大な書物、思想の上に立脚している事がわかりました。また、学問をするには、「己に対して忠実なれ」ということが大切であると思いました。自分のわからない所をわからないと言う、すると、なぜわからないのかと皆で討論する、それにより、答により近づけることがわかりました。

夜ふけて友と寄りそひ声もなく故郷おもひて口笛を吹く

祖先の方々に対しどうお答へしたらよいか

（大阪芸術大学　芸術　三年　小川俊彦）

仲々、自分の気持ちを、そのままぶつける事が出来ずに、四泊五日を過してしまひましたが、今、もっと班の方達と話してゐたい気持ちです。まうひとつ、心に思ってゐるのは、昨日、夜久先生が御講義で読まれた茶谷武さんの遺書です。あのやうな気持ちで死んで行かれた先輩方の御心に対し、今日本の国に生きてゐる僕達が、どのやうに御答へしたらよいのか、どのやうに生活をして行けばよいのか、を考へて行きたいと思ってをります。

宝辺先生の慰霊祭前の御話を聞きて

師の君は「百武」「江頭」とみまかりしみ友の名を呼び絶句したまひぬ

夜久先生の御講義を聞きて

両親の御心思ひ茶谷兄は笑って下さいと書かれけるかも

教へ子の遺文読まるる師の君の涙の御声に胸こみあぐる

誠実をモットーに生きてゆきたい

（福岡大学　法　一年　源嶋秀治）

この合宿教室で、各先生の言われたことは、最終的には、至誠という言葉に表わされると思う。僕は、今まで〝誠実〟という言葉をモットーにして、何事も誠実をもって当れば、必ずある何かを得ることができると信じて、生きてきました。昔も、吉田松陰先生のように、何事にもまごころをこめ、その上にたって生きてゆかれた人がいたということを知って、ほんとうにうれしく思った。今後とも、この誠実という言葉に誇りを持ちつつやって行こうと、心に誓いました。

友どちと夜のふくるまで語りしはねむ気も忘れたのしかりけり

祖国の命運は生を享けた時から僕らの肩に

（熊本大学　工　四年　折田豊生）

国家の問題を考へ語り合ふうちに、祖国の命運は、何かを解った時から担ふものであるといふより、僕らがこの国に生を享けた時から己に僕ら一人びとりの肩に重くのしかかってゐたものであるといふ事が強く思はれて来て、何か澄み切っ

カメラ・レポート　14

国旗掲揚のあとは、さあ、ラジオ体操だ。思ひきり身体をのばして、イチ、ニ、サン……。

た厳粛なものに触れる思ひがした。慰霊祭のおごそかな雰囲気の中で、胸の中につき上げる様にこみ上げてくる、悲しいやうな、何とも言へない不思議な思ひは、生命で解るとでも表したい思ひである。

宝辺先生の御話をお聴きして
たゝかひに生命さゝげし友どちの想出熱込め語りたまへる
呼びかくるごとくに「江頭」「百武」と友の名を呼び絶句したまふ
声つまらせ語りたまへる師の君のおもは定かに見えずなりくる
あふれくる涙流るままにして師の御姿をひたに見つめぬ

第十一班—男子学生—

相手のふところへ入って行く

（早稲田大学　社会科学　二年　橋本雅哉）

諸先生方の御講義について、内容はと聞かれても、今は詳しく思い出せないが、何かそれ以上の、先生方の熱意や、まごころというものに、どこか感じるところがあった。知識として分るんじゃないものを味わえた気がします。波多先生の空手の話の中で、「相手のふところへ為されるがままに入って行く」というのがあったけど、人にしろ本にしろ、自分が接する時に疑うことなく心から信じなければ、何も見えて来ないということを痛感しました。

あたたかき友の心にふれゆきて言葉を超ゆる安らぎおぼゆ

茶谷さん達は私に何を望んだのか

（中村学園短期大学　家政　一年　脇田智行）

一番考えなければいけないと感じたのは、夜久先生が御講義の中でふれられた茶谷さんや、また戦争で死んでいった戦友の人達が、「私の肉体はここで朽つるとも、私達の屍をのりこえて、私達を礎として立ち上ってくる第二の国民のことを思えば、また之等の人々の中に私達の赤き血潮がうけつがれていると思えば、決して私達の死もなげくにはあたらないと思います。」と言って死んでいかれたことです。これらの方々が私に何を望んだのかを深く考えて行きたいと思います。

日の本の民たる誇りの少なしと切に思ひぬ遺書を読みつつ

裸と裸の付き合いができた

（九州産業大学　商　二年　塚本英昭）

私は、今何とも言葉にして表現できないような気持ちになっております。一週間前までは見ず知らずの班員の方々が、今は、本当に私にとってかけがえのない友人に思えてくるのです。四泊五日という短期間の間に、本当に心と心を通わせ、裸と裸の付き合いをすることができたと感じます。この貴重な合宿の体験は、これから生きていく過程において、大変なプラスになったと思います。

友の目に浮かぶ涙を見しときは我が胸内のつまる思ひす

心をイデオロギーから解き放つことができた

（熊本大学　教　四年　堀口八郎）

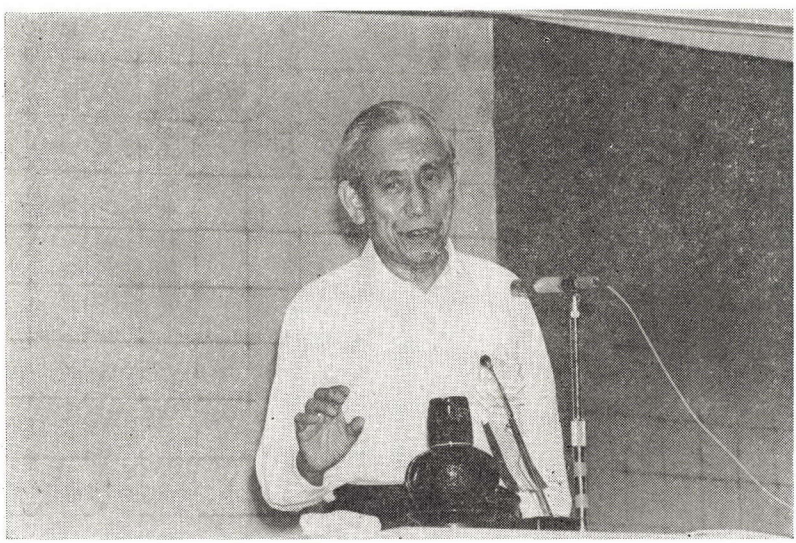
合宿中に、吉田松陰の言葉が胸を打ち、天皇陛下の御製が心の奥深くしみ込んでくるのを、しばしば経験することができた。そんな時、自分の心は、百年も千年も昔に行っていたように思う。また、班別討論をはじめとする班別行動を通じて、〃人と人とは、理解しあえる〃という実感が得られた。このような経験をさせていただいたことにより、今までイデオロギーによってがんじがらめになっていた心を、解き放つことができたように思います。

親思ふ心を高め報恩の誠を尽くさん祖先の霊に

主体性をもって行動したい

（長崎大学　教　二年　柳井義孝）

班別討論では、自分の気持ちを表わし得る言葉がみつからず、四苦八苦させられた。しかし、次第に班の人達の思いと私自身相通ずるものを感じることができるようになったのは、やはり、一人の日本人として精一杯生きたいという、共通の願いがあったからではないだろうか。小田村先生は、「一人でも主体性をもって行動できる人による集団行動でなければならない」と言われたが、私は、しみじみとした思い



第2日目の午前は連続18回目のご登壇となる木内信胤先生の御講義である。「『新日本の誕生』とその動向」と題され「“新しい日本”は、近く必ず誕生するもの、と私は確信的に思ってゐる」と述べられた。

を欠いたまま、主体性を欠いたまま、行動してきたように思う。

きのふまでむつみかはせる友どちと別るる時を迎へたるかな

ありのままに語り合うことのすばらしさ

（福岡大学　法　三年　黒岩真一）

感じた事、思った事をありのままに言うことのすばらしさを、これほど感じたことはありません。ありのままに語り合って行く内に、少しずつ少しずつ、皆んなの気持が一つになっていくのが感じられてきて、今、何とも言えぬ気持ちを味わっております。そして、また、この体験が私に何らかの自信を与えてくれつつあるような気持ちがしております。

バスの窓ゆ精一杯にのばしたる友どちの手をかたくにぎりぬ
友どちの手をにぎりしめ面みれば言葉の出でず胸あつくなる
友どちをのせたるバスの動きだししらずしらずに我も走りをり
友どちは身をのりだして手を振りぬ我もバス追ひひたに手を振る

古典の読み方を眼のあたりに見た

（鹿児島大学　農　四年　吉浦大志博）

私は、今林先輩の御講義をお聞きして、先輩が、本当に吉田松陰のお心をしのんで、それを自分の生きる力とされておられるのを感じ、古典をどう読んだらよいかということを、眼のあたりに見たように思います。また、夜久先生のお話をお聞きし、自分の感動や思いをただ漠然ととらえるのではなくて、できるだけ正確に言葉で書き、又、それを話せることの重要なことを感じました。先生が茶谷さんの遺書を読まれた時、胸のつまるような感じを受けました。

友どちと風呂に入りて輪をつくり背中流すはうれしかりけり

魂が呼び覚される思いがした

（亜細亜大学　法　一年　安田利雄）

私は、この五日間の合宿教室において、小田村先生をはじめとする諸先生方の御講義を拝聴して、眠っていた魂が呼び覚されるような感動をおぼえました。山を降りても、忘れることなく、心に止めて置きたいと思います。そして、今林先生のおっしゃった「至誠」を心の柱として、これから自分の前に立ちはだかる幾多の障害を、乗り越えて行くつもりです。

先生の御講義で受けし感激は山降るるともゆめ忘れまじ

第十二班—男子学生—

日本人の生命の炎を感じた

（熊本大学　工　三年　森　誠二）

輪読の心、その「輪」の心の間に、この五日間、温かく過ごさせてもらったのですが、その中でいつも感じられた事は、その温かさを敢えて、誠実に、乗り越えようとしなかっ

た自分の気弱さでした。自分に気迫と率直さとが欠けていたのです。しかし現代日本の一隈で、日本の歴史と文化を支え貫いてきた日本人の生命の炎が、絶えることなく確実に点され続けてきた、その事実の貴さ、有難さを、僕は、今しみじみと感じています。

白霧にバックライトのあかあかとにじみ残して消えてゆくなり

〃胸せまりくる〃というお気持ちを感じ得た

（富山大学　経　四年　吉田敏雄）

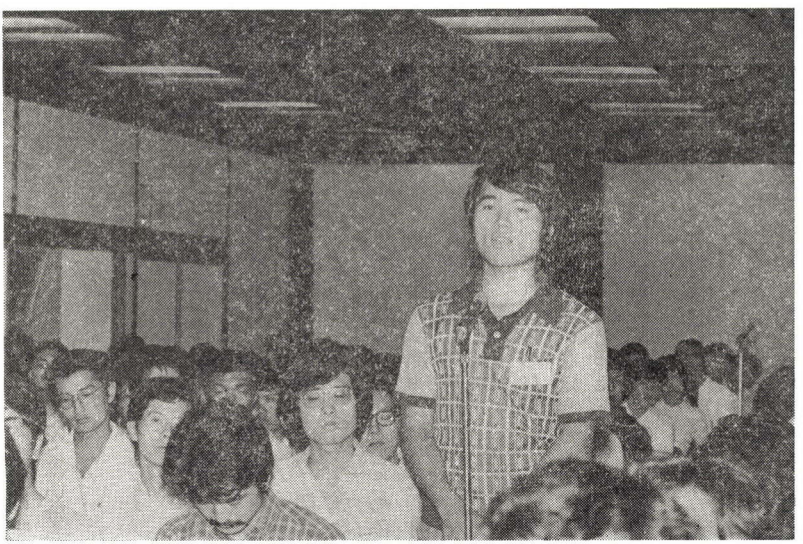
昨年にひき続き合宿に参加させていただき、先生方の御講義をお聞きしたり、友達と討論しあったことによって、昨年どうしても理解できなかった事のいくつかに対し、自分なりに理由のある考えを見い出すことができ、すっきりした気持ちになりました。その中の一つは、〃胸せまりくる〃という陛下の御言葉を、先生方の御講義の中で、実際に感じ得たということです。このことは、一年前の私には、とても考えられないことでした。

み友らと共に語りし雲仙の空見上ぐれば心はれゆく
雲仙で共に語りしみ友らと行く末までも進まむこの道

今、重大問題に直面しているんだ

（九州大学　法　一年　金子光彦）

諸先生、諸先輩方のまごころこもる熱い御講義を拝聴し



講義のあと質問する学生。

て、今まで生きてきた十九年間で、初めてと思われるほどの深い感動を覚え、本当に貴重な体験をさせていただいたと思う。班別討論で、自分が今まで全く考えてもみなかった事が、次々と友らの口から出る。自分の勉強不足を恥入る時もあり、また、そうじゃないんだ、というような反論、反対を唱える時もある。本当に、皆、真面目で一生懸命であった。大切な事は、自分が一生涯かかっても解き明かせないような重大な問題に、今、自分が直面しているんだ、ということであり、決してそこから目をそらしてはならないという事だと思う。これは、この合宿で自分に与えられた問題提起であり、合宿を終えた後も、自分自身にとって天皇とは何であるか、国家とは何であるか、そして生きるとはどういう事であるか等々の重要問題に、真正面から取り組んでいこうと思う。そして、諸先輩方に、まともに自分自身をぶつけて、自分の生き方を深めていこうと思う。

閉会式も間近に迫り友どちと別れることのかなしく思はる

わからないからと言って構えてはいけない

（鹿児島大学　教　一年　寺地光博）

合宿に参加して一日一日が過ぎて行くにつれ、わからないことがだんだん増えていくような気がしました。私は、班別討論の時、「わかりません」「ピンと来ません」などという言葉を連発していましたが、そういう私に対し、班の人は、一生懸命心をこめて話してくれました。御講義の中で、小田村先生は、「わからないからと言って構えてはいけない」と言われました。自分のことを言われたみたいでハッとしたことを覚えています。勉強のしかたの甘さがよくわかりました。

和歌相互批評の折、宝辺先生の話さるるを聞きて
先生のするどく光るまなざしに心こもりしやさしさの見ゆ

人の心に感動できることこそ学問ではないか

（熊本商科大学　商　四年　中村克博）

今度の合宿では、「学問」ということを考えた。今まで学問と思っていたものは、知識を収得することのみで、自分の姿勢を問題にすることのない学問態度だった。自分の姿勢というのは、人の心に素直に接し、感動できる心を常に持つように努めることだと思う。学問の中にこのように人の心のあり方をすえることは、これからの自分にとって大切な事だと考えている。学問と勉強の違いをはっきりと区別できたことは、この合宿での大きな収穫だったと思う。

討論の疲れも忘れ大声に友と笑へば心もなごみぬ

歌を作り、生活を展開してゆきたい

（亜細亜大学　法　四年　須田清文）

「常に自分を前に前にとおしすすめて行く」といふ小田村先生の御言葉をお聞きして、これから次々と現はれる問題に対して、この様に努力してゆかうと思ひました。滞った生活

より展開してゆく生活へと広げてゆく道すぢを教はったと感じました。茶谷さんの遺書の最後のところに妹さんにあてて「ソレカラ女学校ニデモ入ッタラ歌ヲ作リナサイ。歌ハ決シテ風流ナモノデハアリマセン。自分ノ心ヲイツハラズカザラズソノママ三十一ノ文字ニ表ハスノデス」とありましたが、茶谷さんのお心が夜久先生の読まれた悲痛な調子とともに僕の心に響いてきました。言霊の幸はふ国といふ国のいのちの流れが感じられました。「歌ヲ作リナサイ」といふ茶谷さんのお心を深く思ひ、実行してゆきたいと思ひます。

夜久先生の御講義をお聞きして

国を思ふこころあふるる教へ子の文を師の君むせびつつ読まる

妹に「歌ヲ作リナサイ」と言ひのこし死につくますらをの御言葉迫り来

第十三班—男子学生—

言葉のまことに触れた

（東京大学　法　三年　豊岡俊彦）

頭で考えることよりも心で感じることが、いかに大切なことなのか。この合宿では、身体全体で学びとることができた。まことの言葉には、命が脈打っている。言葉のまことに触れると、心が震え、胸が高なる。友と共に心と心をつなぎ合わせ、祖国を思う。山のすがすがしき空気の中、風にはためく日の丸を見つめ、友と共に胸を張って君が代を聞く。こ

カメラ・レポート　17

第2日目の午後。黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』についての輪読導入講義をなされる小柳陽太郎先生。

んな体験を今味わうことができたというのは、何と素晴しいことだろう。

君それは君のまことの思ひかと鋭く友は迫り来るなり
まう一度考へ直して思ふなり口先だけなり前の言葉は
言の葉のまことに触れて我思ふ口先だけの言の葉言ふまじ
師の君のまことの言の葉切々と惑ひし我の胸をうつなり

素直な気持を大切にしていきたい

（中央大学　経　二年　岩崎　博）

私は、今までに、秋の地方合宿と春合宿に参加させて頂きましたが、いつもスッキリしない、素直になれないものを感じてをりました。今回の合宿で最もうれしかったことは、今までとは違って、子供の頃のやうな素直な純粋な気持で、講師の先生方や、先輩の皆様のお話しを聞けたことです。これからも、この気持を大切にして、心から、自分の祖国日本について考へ、勉強を深めていきたいと思ひます。

夜久先生の御講義を聞きし折
御講義に耳傾ける我が内に幼な子の如き心戻りぬ

感動を共にわかち合える友

（西南学院大学　商　三年　坂本則夫）

この合宿で学んだことは、話をするとき、いくらカッコイイ言葉を並べても、相手の胸には響かないということでした。自分が感動したことを話した時には、友だちもわかってくれました。そして、自分が感動した時、そこには、僕の心の中に一つの緊張した姿勢というものが、いつもあったように思います。自分と感動を共にわかち合える友がいるということは、また喜びを大きくふくれあがらせることができるということを、身をもって経験しました。

別れの夜友と笑ひて過ごせるにしらず涙のほほに流るる

遺書を読んで素直に涙を流せた

（熊本大学　法文　一年　緒方啓一）

合宿に参加してみて最大の喜びは、自分との出会いであった。第二には、友らとの出会いである。第三には、未知の世界の発見であった（例えば、和歌、輪読、吉田松陰、聖徳太子の人生）。特攻隊員の遺書を読んで、素直に涙を流せた自分との出会い。この体験は、一生ぼくの記憶に留められるだろう。学問をする態度とは、何に限らず、自分のこれからの生きる姿勢としてとらえなければならない。難かしいが、一人の日本人として、誇りと自信をもって歩んでゆきたい。

ひたひたと胸せまりくるこの言葉友よと呼べば友はきたりぬ

至誠を探求する学問

（鹿児島大学　農　三年　中村英之）

「至誠を探求する学問」これを如何に私が等閑にしてきてしまったかを、改めて気付かされました。歴史を学ぶとは、

歴史に学ぶ、具体的には、歴史の中に生きてきた人々を偲ぶことである。また、天皇についても、天皇を自分にとって大切なものだと切実に感じることが重要なことだと思ひました。先生方や先輩方や友らに支へられつつ、着実な歩みを続けて行きたいと思ひます。

感想文執筆の折
テーブルに向ひて友の忙がしく筆を走らす音ひびきくる
友どちは集ひの終りに近づきて思ひのたけを急ぎ書きとむ

心に感じたことを言葉にしたい

（九州大学　工　二年　永江勝則）

今まで僕は、古典を読みながら、それを書かれた人の心を偲んでゆくことが、とても大事なことだとは思ってゐたのですが、それを言葉にせずに、ただ心の中でもやもやとした思ひのままにしてをりました。しかし、討論、講義の中で、自分が深く心に感じたことを文章として表はさなければならないことを聞きました。一字一句を正確に使いながら文章を作ることは、自分の思ひを正確につかむことになることがわかりました。これから、それを実行したいと思ひます。

胸内の思ひを述べし友どちの明るき顔をみればすがしも

心で感じ、心を理解しよう

（名古屋工業大学　工　二年　黒崎　稔）

諸先生方や班付の先生の御指摘、さらに聖徳太子、吉田松

班別輪読の一コマ。著者の言葉を正確に読みとって、著者の心に迫ることの難しさを知る瞬間である。そして共に学ぶことの悦びが広まる。

陰の学習や、小田村先生、夜久先生の御講義を通じて、理論で理解するより、心で感じる、自分のこととして感じられるということが、学問に対する正しい取り組み方であると思われてきました。人の意見を聞く際にも、身構えて聞くことなしに、相手の意思を理解しようとして聞く姿勢が肝要であることや、飛躍して結論を得るより、感じる過程が重視されるべきことがわかったような気がします。

歌なほす友の姿のまじめさにわれもかくあれと正座しなほす

自分の心に忠実になれた

（長崎大学　教　一年　山野光治）

最初の三日間というものは、今林さんの言われんとすることがつかめず、反発ばかりしていました。心の中に、今林さんは私を成長させようと、本当に心から思われておられるのだという気持ちがわいてくるのですが、その気持ちを素直に認めようとしない思いが、もう一方にありました。しかし、四日目に、夜久先生や小田村先生のお話をお聞きし、人の気持ちを素直に受けとめ、心を開き、涙することができて、やっと、自分の心に忠実になることができたように思います。

閉会式にのぞみて
日の丸に頭をさげし先輩の後姿の美しきかな

第十四班―男子学生―

すがすがしい気持ちである

（福岡歯科大学　歯　四年　東山隆勇）

何か一つをつかもうと思ってやって来た合宿だった。今振り返ってみて、ぼんやりとではあるが、今まで気づかなかったことが何となく見えてきた気持ちである。それは「学び方」ということである。解らない事、自分に関係ないようなことに出会ったとき、自分で殻をつくって身がまえず、「何故なのか」と一歩突込むことが大切なような気がしている。とにかく今は、すがすがしい気持ちである。

合宿四日目ホテルのロビーにて
友と二人この椅子に座り開会の式を待ちしこと思ひ出さるる

皆が本当の気持を話してくれた

（亜細亜大学　法　二年　大塩耕三）

昨日まで班の皆が、自分の本当の気持ちを話してくれてないように思っていましたが、最後の班別懇談会の時、皆が胸の内にあったことを思い思いに語ってくれて本当にうれしかった。合宿が終って全部なくなるのではなく、これから勉強が始まるのだと思います。私もこれから大学に戻り、勉強し、頑張りたいと思います。班の皆も、今心に持っているの

と同じ気持ちで勉強してくれると思います。

夜久先生の講義が終って班で「短歌のすすめ」を輪読したをりに
み友らの声たからかに詠みあぐる言の葉聞きて胸こみあぐる
詠むごとに声高まりて我胸にひびくは友の言葉なりけり
最後の班別懇談のをりに
わが心に思ふがままを友どもに語りてゆけば心かよひぬ
これからも共に学ばんといふ友にわがめがしらのあつくなりくる

気魄感ぜしむ友にひきこまれた

（防衛大学校　二年　船越長弘）

中途より参加したので、最初は寡黙に徹してゐたのですが、やはり気魄の感ぜられる友達にいつとはなしにひきこまれました。ただ残念だったのは、木内先生の御講義を拝聴できなかったことと、昨年の同班の友が三名しか来ず、防大の学生が二名しか参加しなかったことです。今年も何か胸のうちを思ふがままに言葉に代へることができず、口惜しかったのも事実です。来年は、防大の友も、あまた誘って、この合宿教室に参りたいと思ひます。

積み重ね積み重ねゆく誠こそ世を動かさむちからなりけれ
声あげて歌ひてをれば友どもの集ひ来りてうれしかりけり
友どもと歌ひ語らひさ夜ふけて見上ぐる空に星の降るごと

カメラ・レポート 19

「青年研究発表」
教へ子との心のふれあひについて語る福岡県小学校教諭の味酒景子さん（上）。
吉田松陰の文章を読んだ際の感動を話す熊本県立松島商業高校教諭の中園俊郎君(左上)。
歴代天皇の御歌に触れながら国の伝統について語りかける工学博士・建設省研究所員の大岡弘君(左下)。

殻が一つ一つ取り払われる思いだった

（西南学院大学　商　二年　松永直之）

第一日目などは、大変不安でしたが、日が経つにつれて班員の仲間ともお互い腹を割って充分話し合うことができて大変嬉しく思いました。また諸先生・諸先輩の心のこもった話を沢山聞くことができて、今までの自分を制していた殻が一つ一つ取り払われてゆくようでした。特に、今上陛下の御製では、陛下の国民に対する温かい御気持ち、和歌のすばらしさを感じました。また松陰の言う「至誠」については、これから学問するうえで、自分自身学んでゆきたいと思います。

先生の心こもれる言の葉に視野の狭さを気づかしめらる

人間イコール動物か！

（慶應義塾大学　経　一年　藪下貞宏）

講師の先生方の御講義はなかなか解らないところが多かったのですが、小田村先生が言われた「真の人間性における平等、人の心の中における平等」という言葉が、私にとって非常に感慨深いものでした。また、班別討論で、「君、それは君が人間イコール動物という考えに毒されているからだよ、それは自然科学的発想だよ」と先輩が指摘して下さったことは、私のこれからの人生にとって大きな指標となると思います。

集ひ来し時はきのふのごとくにてけふは別れゆく語らひし友

味酒さんの発表を聞きて

いたいけな子の優しげな言の葉に胸こみあぐる精薄といへども

合宿に誘ってくれた友に感謝したい

（熊本大学　工　二年　松嶋司郎）

日本は敗戦と同時に、それまで祖国がもっていた良いものも悪いものも、ごっちゃにして捨ててしまったのではないだろうか。以前からこのことは考えていたが、今回の合宿で、いっそう確認できたように思う。講師の先生方、また全国各地から集ってきた多くの友にめぐり会えたことは大きな喜びである。合宿に誘ってくれた私の友に深く感謝したい。

夜ふけまで肩をくみつつ歌ひたる友らの肩のぬくもり忘れじ

甘えを去らねばならぬ

（早稲田大学　二文　一年　小林俊朗）

僕はこの合宿で、自分が如何に生きてゆくか、また、学問に対する姿勢がどうあるべきかを学んだ。合宿中、ともすると、自分は運動をやっているのだという傲慢さのためか、国文研の方々や、班長さんの言われんとすることに耳を傾けようとする気持ちがなかったことを大変すまなく思っている。

小田村先生のご講義を聞きて

きびしくも学びの道をおさめらる大人（うし）の言葉をきけばはづかし

夜久先生の御姿が脳裏に焼きついている

（九州大学　工　四年　山根　清）

夜久先生が御講義の中で茶谷さんの遺書を涙をこらえながら詠まれる姿が今も脳裏に焼き付いている。茶谷さんの遺書を読むと、一度も会ったことの無い今は亡き茶谷さんが自分に話しかけられるような気がする。御国の不滅と自分の後に続くものを信じ、その尊い命を捧げられた茶谷さんの生き方から、「我は他に没し、他はまた我に生きて」という言葉の意味が実感できたと思う。

やはらかな朝日受けつつはたはたと風になびきて幟立ちたり

誠をもって人に接する喜びを感じた

（高崎経済大学　経　四年　中村春洋）

昨年に続き二度目の参加ですが、自分が何をしなければならぬのか、また、如何に生きなければならぬのかという気持ちが体全体に満ちてくるのを本当にうれしく感じています。諸先生、諸先輩の御講義を聴き、人間の一生は精進だ、また、自分の心に嘘をつかず、真心、誠を持って人に接する喜び、重要性を痛感致しました。

合宿最後の日に

合宿を終りて友らと過ぎし日を心ひらきて語り合ひたり
友どもに涙浮かべてありがとうと語るみ友の面すずしも

カメラ・レポート　20

食事の時間にも、語り合ひはつきない。

第十五班―男子学生―

友と別れがたい

（西南学院大学　法　三年　古賀直司）

四泊五日共に過してきた友とこうして今別れてゆくのが本当に残念です。まだ、何日も何日も語り合いたい。

夜久先生が紹介された茶谷武大兄の遺書を読み、目頭が熱くなった。陛下の事も、戦争についても、御製を読み、なくなられた戦没者の心を思いやらずして、どうして云々できようか。

夜久先生の御講義を聞きて

茶谷兄の遺書よまれゆく師の君は御声ふるへて涙うかべらる

我もまた遺書よみゆけば高まれる思ひに耐へえず涙あふるる

心に刻み込むべき体験があった

（熊本大学　教　四年　諸熊明彦）

私は今三回目の合宿を終えて、やっと終ったという感じをもっている。しかし、四泊五日をふりかえってみると、心に深く刻み込むべき体験が数多くあった。味酒先輩の研究発表、味酒先輩と身障者の子供との心の交流、そして陛下と身障者の子供たちとの心の交流。心を通いあわすことの素晴らしさを教えてくれるようだった。これから何を見つめて生きていくかなど確かなことは何もまだ解らないが、何よりもこの四泊五日の体験を大切にしてゆきたい。

閉会式にて

若人が心そろへて歌ふ声学びの宿に響きわたりぬ

志同じくしたる友どちと心一つに歌ふぞうれしき

松陰先生が今林先輩にのりうつられた気がした

（慶応義塾大学　法　二年　伊佐幸雄）

四泊五日共に語り過してきた友等と今日で別れると思えばさみしく残念です。私が一番印象に残っている御講義は、今林先輩の吉田松陰についての御講義です。すごい迫力で話され、私は松陰先生が今林先輩にのりうつられたような気さえしました。先輩の語られる言葉の一つ一つがじかに伝わってくる思いでした。

合宿で語り過ごせる友達と今わかるるはさびしかりけり

新しい友をつくる場を与えてくれた

（東海大学　理　一年　徳永　修）

この合宿は、他人とあまり語り合ったことのない私に、新しい友をつくる場を与えてくれました。友は皆真剣で、学問にも本当に熱をいれていました。そんな友達に囲まれて、私の心もひらき、少しづつ討論にも加われたのです。友と語り合うのが楽しくなりました。こんな気持ちになったのは久しぶりです。

雨上りのすみしみ空にせみの繁く鳴く声聞けば夏を感じぬ

言葉の一つ一つが宝物となった

（高千穂商科大学　商　二年　鈴木　収）

様々な講義を通じて私の心には、言葉の一つ一つが目に見えぬ宝物となった。平素、私たちは、三無主義などと呼ばれる社会の中で生活し、石片を投げても返って来ない虚しさを痛感しながら暮らしていたが、輪読や討論などは何ものにも代えがたい体験であった。班の皆の思いが私の胸に迫ってきた。

高原を吹きゆく風は涼しくて杉林にも秋告ぐるごと

先輩の体験発表に感激した

（九州大学　文　一年　長野秀樹）

先輩方の御自分の体験を通しての発表には、すばらしい説得力を感じました。特に味酒さんの発表は、教え子を思われる気持ちと、教え子の味酒さんを慕う気持ちが強く感ぜられ感激しました。また、初めてお会いした班の先輩方と、少しづつ心の内を語り合えるようになってゆくのも、大きな喜びでした。

五日前初めて会ひし友どちと心開きて語るはうれし
五日間共に語りし友どちと写真にうつり別れゆきたし

「杉蔵往け。月白く風清し、……」第2日目の夜、新日本製鉄㈱勤務の今林賢郁氏による『至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり——吉田松陰の魂——』と題した講義は、参加者に強烈な感動を与へた。

第十六班—男子学生—

心情を抜きにした姿勢ではダメだ

（福岡教育大学　教　一年　大石育郎）

僕は今まで、人生観、国家観等を追求する姿勢として、心情を抜きにした、理屈といってもよい姿勢であたって来たような気がする。今、そのような姿勢が、人生において何の意味もなさないということがわかったように思う。本当に人間が人間らしく生き、人の心情に感動する姿勢を持ったならば、「人間は動物のような存在ではない！」「自我至上主義は間違っている」ということを、本当に実感として言い切ることができると思う。

先達に恥ぢざる道を歩みたしわが行く道もかくありたしと思ふ

自分なりに感動したことを大切にしたい

（亜細亜大学　法　一年　望月俊男）

私は、学問というものは、知識を広めるために本を読み進めていくものだと思っていましたが、そうではないことがわかりました。本当の学問とはどういうものであるか、それは、あることに感動し、そのことを深く追求し、読み進んでいくことである。これは、今林先生のおっしゃったことであるし、班別討論の中で確かめてきたことでした。これからは、自分なりに感動、感激したことを、大事に追求していきたいと思います。

友らとの充実したる討論も今日で終りとなるはさびしも

観念より心で感じること

（鹿児島大学　理　二年　福元宗徳）

私が今まで確信していた勉強のやり方は、自分の心を通じての判断ということだったのですが、そこには、色々な書物からの受け売り、先輩方の話の受け売りなど、いわゆる観念的に判断しているところがあったことに気付きました。例えば、夜久先生が茶谷さんの遺書を読まれた時、何か胸にジンと込み上げて来るものを感じました。私達の住む日本は、このような先人の尊い生命に支えられて今日に到っているということを、心で感じた思いです。

茶谷さんの遺文にふれて

戦ひに行かれし人は国のためたふれて動かぬ屍となりぬ

空論ではなく本体にぶつかろう

（中央大学　法　二年　筒井晃治）

私は、殺人事件に関する新聞記事等に接し、憤りを覚え、これを解決する道があるのではないかと、一生懸命考えてきたつもりでした。そのことを占部さんにぶつけたところ、「君は、人が殺し合うということを本当に考えてはいない」と説かれ、私はそれに反論しました。しかし、本当にそのこ

とに憤りを感じているならば、机上の空論のみを振りまわすのではなく、何故、勉強を重ね、『殺人行為の本体』にぶつかって行こうとしなかったのか、と今思っています。

友どちと歌をうたひて過ごす宵はしばし心の安まる心地す

祖先の方々のお心を感じることができた

（熊本大学　医　二年　有馬　宏）

宝辺先生のお話のあと慰霊祭に参列したが、急に鳴り出した雷に、私は、ここに確かに御霊がやってこられたという気持で、本当に身の震えるような思いがした。そして、茶谷さんの遺言、夜久先生にとっては本当に大切な文章だと思うが、それをお聞きした時、先生の御気持がひしひしと伝わって来て、思わず我を忘れてしまった。私は、振りすてがたい思いを振り切って、国の為に戦地におもむかれた祖先の方々のお心を本当に感じることができた。

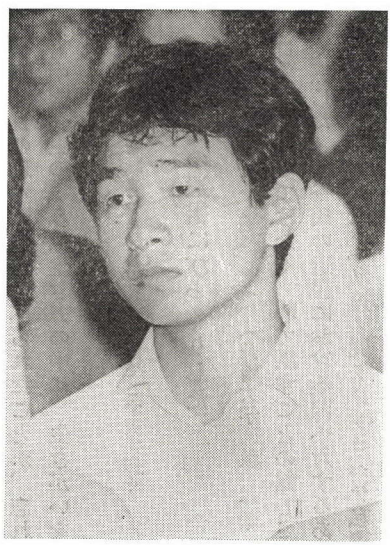
合宿の終りてのちロビーで熊本で合宿に勧誘せし友に会ひておのが手をつよくにぎりて友どちはまじめな顔で我を見つむる
合宿に誘ってくれてありがたうといひし友の目に涙あふるる
何をかをいはむとすれど言葉出ず握手したまま友の目見つむる
熊本で一緒にやらむと去りゆきし友の姿の目に浮かびきぬ

自分の体験をしっかり見つめたい

（九州大学　工　二年　久米秀俊）

茶谷さんの遺書を読んだ時、三十分ばかりの間に短歌が次

カメラ・レポート 22



真剣に聴き入る参加学生

々とできました。しかし、今読み返してみると、漠然とした単なる感傷であって、どこにどのような感動を覚えたのかよくわかりません。この経験から、自分の感動をはっきりさせるために、短歌を作ろうと思います。そして、天皇問題は、御製を読むことが根本だと確信しました。小野さんのような「胸せまりくる」という言葉への迫り方を知って、自分の切実な体験をしっかり見つめたいと思いました。

友どもと「杉蔵行け」の一節を夜のつどひの折、朗読して
ステージで覚えたることば本当にいでてくるかと不安のよぎる
大声で酒も飲むべし詩もふすべしと歌ひあぐるはいとすがすがし
歌ひをはり友らと顔を見合はせればおのづと笑みのこぼれてくるも

人間とはこんなにすばらしいものか

（長崎大学　水産　一年　利根鉄也）

私は、天皇様について、祖国を守っていただいた魂について、本当の感激を受けました。涙が出て来ました。人間というものがこんなにすばらしいものかと感激し、希望が持てた思いです。以前は、人間のみにくい所ばかり目につき、それだけが思い浮び、今感じている人間のすばらしさのようなものを、偽善にすぎないと感じていました。しかし、今は違います。私は、学問に志す喜びがわいたと同時に、大きな、重い責任を感じています。

合宿でかくも友らと心開き話せしことの嬉しくてならず
また会はむきつと会はむと思ひつつ友らの顔を心に焼きつく

第十七班—男子学生—

学問の根本に触れた

（高千穂商科大学　商　一年　野口　功）

古典に触れ、和歌に触れ、学問の根本に触れた気がする。自分の不勉強さを痛感した。二日目の班別討論のとき、国文研の占部さんが、吉田松陰の文章について語られたことに、素直に共感した。この素直な心が、「学ぶ姿勢」であろうと思う。又、国文研の中園先生が、「自分のことを一番思ってくれている父、母にこたえるような生き方をしている」と、四日目の班別討論で述べられたことが、忘れられない。私も中園先生のような生き方の中に、生きがいを見つけたい。

指を折り歌を詠まんと励めども歌の出でこず天井仰ぐ

茶谷氏の遺書にびっくりした

（長崎大学　教　一年　松尾文雄）

口先で話すのではなく、心で話すことの難しさを、改めて強く感じた。茶谷氏の遺書における国へ対するあれだけの思いにはびっくりした。「私達ノ屍ヲノリコヘテ私達ヲ礎トシテ立チ上ッテクル第二ノ国民」としての我々は、日本の歴史、文化、伝統を穢すような行為をしていてよいのか。もっ

と日本の過去、現在、未来に誇りをもつべきだと思う。慰霊祭の時の、小田村先生の御製拝誦には、なんとも言えぬ感動を覚えた。心が柔軟になったことがうれしい。

出席をこばみしわれの親友に学びしことを伝へむと思ふ

合宿終へ帰りを急ぐ吾が友と来年もなとちぎり結びぬ

何かほんものに触れた

（亜細亜大学　経　三年　鎌田弘行）

講義の中で、何かわからないが、胸にジーンとくることが何度もあり、胸のつまる思いがした。今まで思ったことが全然なかった言葉の持つ意味の深さを、ひしひしと感じさせられた。先生方の熱のこもる講義に、今のままでよいのかと思わずにはいられなかった。合宿を通じて何かほんものに触れた感じがした。現在の自分、学問、日本はと思うと、今のままではいけないと思わずにはいられない。これから、合宿で得たことを思い出して、生活していきたい。

寝むたさに目をこすりつつ出てみれば冷たき風のすがすがしきかな

和歌創作にはまいった

（岡山大学　工　三年　桑原研二）

講義の中に出てきた聖徳太子や吉田松陰について、勉強したことがなく、もっと基礎的な勉強をしなくてはいけないと思った。それでも、講義中は先生方の熱意がひしひしと伝わってきて、その気迫が胸にせまってきた。それだけでも大変

日程の進行に応じて、運営委員の方から適切な指導助言が各班長になされた。

勉強になり、勇気づけられた。和歌の創作にはまいった。先生の批評を聞いて、二回目の創作は楽かと思ったら、大きな間違いで、先生の批評が気になって、よけいに作れなくなってしまった。

友どもの一つ一つの言の葉に「なるほどなあ」と思ひうなづく

気持を伝えることの難しさを知った

（玉川大学　文　四年　組山克郎）

第一日目の夜に、班長から「あんたの言葉には何の感動もおこらん」と言われて、非常にびっくりした。そのことが、何を言わんとしているのかよくわからなくて大いにとまどった。しかし、人に心を開いて語るということは、単に言葉をならべるというのではなく、一つ一つの言葉を選び、その各々に自分自身の感動をこめなければ、相手に自分の気持を伝えることができないということを知った。無意識に気負ってしまうようなことを取りのぞくよう努力していきたい。

亡き人に声をつまらせ涙する師の御姿に吾も涙す

心の中で燃やしつづけるもの

（福岡教育大学　教　一年　森本久雄）

僕は、今回の合宿で一つの生き方のようなものをつかんだと思う。それは、吉田松陰の生き方の中心となった「至誠」である。四年間の大学生活で、じっと心の中で燃やしつづけるものは「至誠」だと感じた。自分の考えを、どこまでも貫き通し、誠をもって生きていけば、必ず同じ大学の中に同じ志をもった友が集まり、荒廃した現在の大学に何かこれだけはというものができるような気がする。正しい学問の仕方というものを身につけ、一人でもやれる強い精神力をつけたい。

向ひ合ふ友のまなこに光りたる熱き涙に心うたれし
壇上に登りて誓ひし言の葉をいつの日までも守り抜きたし

混迷状態である

（熊本大学　医　四年　真島博通）

まだ混迷状態である。何がどうなっているのかわからない。素直になれないためか、今までに築きあげた自分の生き方に固執しすぎるのか、どうしても、そのままスッと入り込めない。一番大事なものを感じ取っていないみたいだ。一つの固まった考えを持たず、流動的であればこそ、講義されることが素直に感じ取られるのだろう。日本古来の感じ方、というよりも人間本来の情感を感じとることが大事なことであるとわかったような気がする。しかしまだまだである。聖徳太子の御本を勉強してみようと思う。

眠るまじとももをつねりて頑張れどご講義の声も定かに聞こえず

友の顔が忘れられない

（九州大学　医　二年　長澤一成）

起居を共にし語り合った友の顔を一生忘れる事はないだらう。別れる時に交はした握手には胸が一杯になった。このやうな思ひにかられたのは、友の思ひに迫るといふ苦しいまでの努力をしたからではなからうか。この感動をいつも新鮮な思ひ出として生き生きと心に刻みつけておくためには日々の生活を大切にしていくことだと思ふ。黒上先生の御本に「我は他に没し、他はまた我に生きる」とあるが、友の心の内をあるがままに偲ぶといふ困難な努力を続けることが黒上先生の御言葉を実感することのやうに感じた。

五日間共に語りし友どちと別れの時の今迫り来る
玄関で手を握り合ふ人々の熱き言葉のホールにみちをり
手を握り頑張りませうといふ友のまなざし見れば胸あつくなる

日本語を粗末にしてゐた

（鹿児島大学　農　二年　網屋成人）

小田村先生の厳しい学問の態度に接し、全く恥づかしい思ひがした。今まで自分が、本を読んだと思ってゐたのは、全て無に等しいものではなかったのか。いかに自分が、日本の文化を育ててきた日本語を粗末にしてきたかが、しみじみとわかった。そして、和歌といふものを通して、自分が思ったことを言葉にすることが必要であるといふことを学ぶことが

第3日目の午前、東京大学教授衞藤瀋吉先生の「世界の中の日本人」と題された御講義。ニュージーランドから帰国後、羽田から直ちに雲仙へかけつけられ、前日の夜の日程から参加いただく。

できた。

夜のつどひの折に

肩を組み力をこめて友どもと共に歌ひぬ「北辰斜」を
鹿児島の友らと共に開校歌を声の限りにはり上げにけり
久々に「北辰斜」を歌ひあひ友どもの顔晴ればれなれり
桜島の煙ふきあぐ鹿児島を友らと共に思ひ出しけり

第十八班—男子学生—

和歌を通して歩んでいきたい

（長崎大学　薬　二年　三根　光）

私は大学で自分の生き方を、自分が住み生きているこの日本の文化を探ることから、定めていかんと今日まで何らかの努力をしてきました。ところが今合宿に於いて、和歌創作を行ない先人の遺書等を聞くに及んで、今まで何一つ自分の身にせまったものを言ってない、つかめてないと感じました。私はこの合宿の貴重な体験を空振りにさせないよう、自分も苦心して詠みウソがつけないなあと感じた和歌を通して、第一歩から徐々に歩んでいかなければならないと感じました。

小田村先生の御講義を聞きて

せまりくる刃のごとき言の葉にわれの体のふるへるおぼゆ

友だちの胸の内を察することは難しい

（西南学院大学　経　一年　木下益美）

先生方の一言一句を聞き洩らすまいと聞き入った。自分なりに努めたつもりでいても、班別討論においては理解の不徹底を鋭く指摘される。友だちの胸の内を察しながら話を理解する難しさ。「追体験」という言葉があるが、このような体験を自ら実践しなくては、瑞々しい心は薄れて行き、果ては何事にも心を動かすことの無い人間になってしまうのではないか。幼少の頃のような率直な心。私はこれからこの「感動する」ということを実行して行く。

己がおもひ伝へたけれど語り得ず口惜しきなりと友どもの言ふ

今までの自分自身を反省する

（高千穂商科大学　商　一年　水野裕行）

私は、今までの自分自身を深く反省してみる必要があることを感じた。政治とか天皇・国などという事について今までに考えたことがあったが、いつもあいまいな気持ちで「おまえには、まだむずかしすぎる」と自分をあまやかして来た。そのうえ、国歌である『君が代』の意味さえわかってはいなかった。一つの事についてみんなで考える事によって、自分とは異なった意見を聞くことができ、また自分自身をみつめる事ができた。

夕暮れに小川の上を赤とんぼのゆきつもどりつ忙しく飛ぶ

全員が真剣であることに驚いたが……

（神奈川大学　短期大学　一年　白川元廣）

まず最初に感じたことは、合宿参加者全員が非常に真剣であることに驚きました。「天皇」について考えてみようとする態度すら持たなかったのですから、各先生その他の方々のお話には驚きというほかはありません。合宿に一貫した「天皇」に対する考えを全面的に受け入れることは、今の私には出来ません。たくさんの友と話し合えたことは、とても嬉しい。友を大事にしてゆきたいと思います。

先生の心こもれる御言葉に思はずはっと胸をうたるる

大きく変わった自分に気づく

（九州大学　工　一年　弓立忠弘）

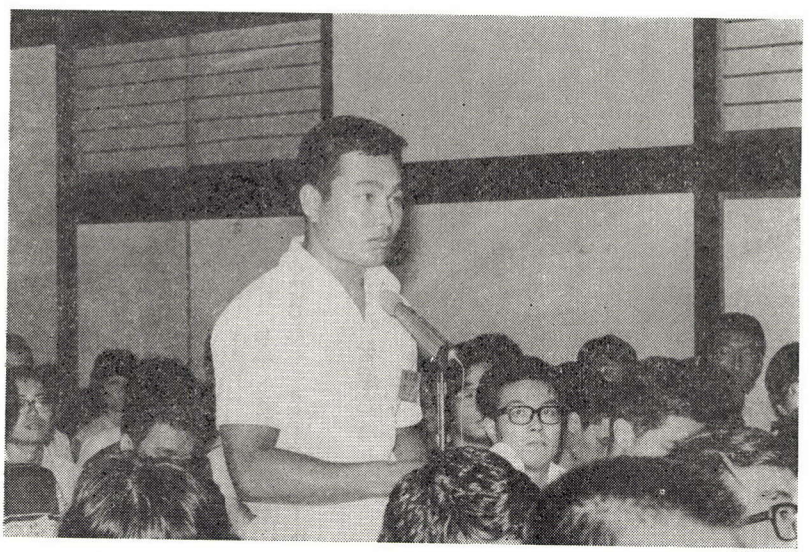
先生方の心のこもった御講義や班単位での討論の後に、大きく変わった自分に気がついている。何か腹の底から新しい活力が湧きあがってくる自分に。正しい方向づけを与えられたような自分に。今のこの感動を失わず、祖国・学問・人生に対する真剣な態度を研鑽していきたいと思う。

最後の班別懇談において

今日からが新しきスタートと言ひし友のつよきことばにひきこまれゆく

合宿で学びしことをいしずゑに今日から我も学びてゆかむ

日ごと日ごと親しくなりし友どちとまた来年と別れゆかむとす



衞藤先生に質問する若い国民文化研究会会員。主催者も参加者と共に真剣に学んだ。

合宿を我に勧めし友を思へば人の出会ひの不思議に思はる

本当の感動があった

（九州大学　理　二年　利光賢一）

味酒さんの教へ子との心の触れあふ教育の体験談、さらには国の為に死んでいかむとする茶谷さんの遺書などに触れた時、私はなんともいへぬ思ひが胸の中に込み上げて来たものでした。そして、天皇陛下の御歌に触れた時、今までにない感動に打たれ、私はこの日本の国に生まれ本当に良かったのだなあといふ思ひが、胸の中に一杯になりました。また、討論や和歌創作などで、自分の思ひを述ぶることの難しさを改めて痛感致しました。

合宿に初めて来たる我は今直けき心知りてうれしも

第十九班―男子学生―

理論よりも心のこもった「ことば」

（日本大学大学院　史　二年　橋本康二）

私は今迄、理論で「武装」することが相手を納得させる最大のものと思っていました。しかし、人の心を動かすのは理論よりも心のこもった「ことば」のような気がしてきました。相手を納得させることより、自分がその立場を理解し、近づこうとする態度の方が大切だと思いました。私はいまも、天皇陛下のことはよくわかりません。それは真剣に考えたことがなかったからです。しかし、終戦の時の陛下のお気持を知るいくつかの和歌に接し、陛下の行動を知った時、もっと陛下のお気持を理解しよう、そのお気持に近づこうと思う様になりました。人の言葉をもっと真剣に聞き、相手の心をわかろうと思います。そして「至誠」という言葉を大切にしたいと思います。

大君の御心持の理解できぬ己れの心のもどかしきかな
合宿の短かき間にも通じあふ友を得しことあに忘れめや

胸にジーンとくるものを感じた

（松本歯科大学　歯　二年　石亀裕通）

先生方の御講義を聞いて、本当に感動し、又ありがたいものだと思いました。友らの言葉にも、そういうものを感じました。何かあたたかいものを胸に感じ、胸にジーンとくるものがありました。これが本当の人と人との関係ではないかと思います。こういう人間関係を大切にして、毎日を過ごしていく決意です。

合宿で語りあかせしわが友と別れてゆくはさびしかりけり

真心を感じる心

（亜細亜大学　経　二年　岩間　進）

味酒先輩の体の不自由な子供に対する真心に触れ、真心を

こめて接すれば絶対相手がわかってくれるんだなということを感じた。近江学園に天皇がいかれた時、天皇陛下は思わず涙が出てきて天を仰いでおられたという話しを聞いた時、これこそ人間の真心を感じる心だと感じた。感じたことを表に出すということを今まであまりしなかったのですが、思ったことは少しでも言葉に表わしていこうと思う。言葉に表わすことが本当に大切なものだと感じた。

友どちと別れ別れにならむとも心のきづなつなげゆきたし

一瞬一瞬の実感

（熊本大学　工　二年　佐伯謙介）

緊張した四泊五日の生活の中でつかみえた一瞬一瞬の実感をありがたいと思う。自分を見出すことの大切さを体内に感じる。この班にいる友だち、講義をなさってくださった先生方によってこそ、はじめて私の内に実感として感じられる様になったのである。

わが言葉にうれしかりしといひてくれし友のおもわのありがたく覚ゆ

今上陛下の大御心に感激した

（宮崎大学　農　三年　山口尚志）

木下道雄氏の『皇室と国民』を拝読し、御製を拝誦し、今上陛下の大御心に触れ、そのお気持が偲ばれて大変感激した。しかし、天皇という問題にぶつかった時、決してイデオロギーを無視してとおるわけにはいかない。日本の文化と伝

ロビーで歓談される衞藤先生、小田村先生、木内先生。（写真左より）

統の根本を成すものは天皇制であり、これからも制度としての天皇というものを護持し、その為に何時如何なる時でも、天皇の御為に死ねる様、平生より、ゆるみがちな精神の鍛練に努めたいと思います。

同胞(はらから)の魂と魂とが結び合ひ永久にちぎるをいのりしわれは

信じられぬほど変った

（九州大学　法　一年　大田明登）

三日目の夜の班別討論まで全く意志の疎通が計れず、建設的な意見も全然出ず、僕にとって討論は苦痛以外の何物でもなかった。意見を出し、それに対し友の意見が返ってきても、素直に受け止められませんでした。ところが、班長がついに「君ら何しにここへ来たんだ。このまま帰って悔いは無いのか」と述べた言葉に呼応して、「そうだ 僕も話すから皆で話そう」と友が言った。今まで求めていたのは「これだ」と思った。水をうったような沈んだ雰囲気とうって変って、活気ある心のこもった考えが述べられた。その夜は二時まで友と語らい、かたくなな僕の心に、友の真心のこもった言葉が素直さを呼びもどしてくれた。友と語らい、歌い、これが以前のあの人か、これが以前のあの僕かと、全く信じられぬほど変ったのです。

夜ふけまで心開きて語らへば時のすぐるをしばし忘れつ

御製に感動した

（福岡教育大学　教　一年　高嶋富士夫）

山田先生の迫力のこもった御講義に、ただ圧倒されるばかりでした。「至誠を探究する学問をやりましょう」との先生の御言葉を、強く感じました。諸先生の御講義を聞き、班別討論等を通して、自分の物の考え方、感じ方が間違っていたことを思い、これからは、自分のまわりについている外見的な物を除いて、自分の本質を見つめ、又相手の本質に少しでも近づける様、至誠をつくしていこうと決心しました。又、御製に接し、天皇様の民を思われる大御心がしのばれ大変感動いたしました。人の心をそのまま写し、又読む人の心に直接何かを訴える和歌というもののすばらしさや、初めてつくってみた難しさを思い、これから先も多くの御製に触れ、自分でもつくっていきたいと思う。

瞬間を大切にして生きることのむづかしさ切に君は語りぬ

亡き人を想ふあつい心

（東京大学　法　四年　小柳志乃夫）

山田先生のご講義の「生命体としての国家」といふ言葉を、班の討論の中では何か実感できぬままに、わかったもののやうに言ってをりましたが、宝辺先生や夜久先生の国の為に斃れた亡き友らを思ふご講義をお聞きするうちに自然にそ

の言葉が感じられてまゐりました。亡き人を想ふにあつい心の内にこそ「生命体としての国家」といふことも、しみじみと感ぜられてくると思ひます。

宝辺先生のご講義をお聞きして

み友らの戦に病にたふれましてはや三十年(みとせ)の年は経ぬとふ
亡き友のうつつにますがに師の君はみ友らのみ名呼びたまひたる
亡き友のみ名よびたまふ師の君の言の葉いたく胸をうつなり

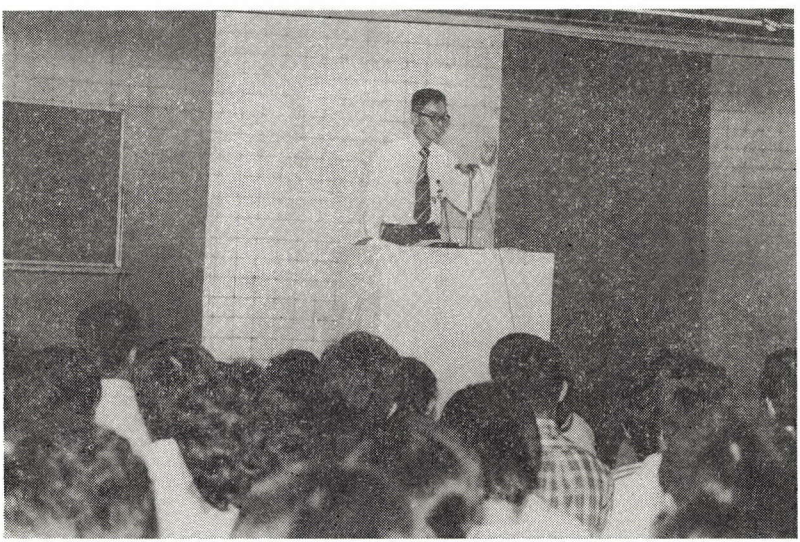
第二十班—男子学生—

これが和而不同ということだろうか

(東京大学　文I　一年　平嶋彰英)

合宿が終らんとする今、僕の心中は一種異様である。講義や友の発言に疑問を残し、反発したい点があるにもかかわらず、心のうちをさらけ出したということで共感を覚えたことだ。表向きの完全な一致がなくとも共感を覚えたのだ。これまでは意見が一致しないとケンカ別れに近い雰囲気になった。論語の君子和而不同、小人同而不和という言葉はこのようなことを指すのだろうか。君子に少しでも近づくことができたということだろうか。

蟬の鳴く静かな部屋に合宿の最後の時を友と語らふ



第3日目の午後。九州大学医学部大学院4年・医師の前田秀一郎氏による「和歌創作の導入講義」。万葉集や正岡子規などの和歌を例にとりながら、和歌創作の意義について、わかりやすく説いた。

先人の意志を継ぐことが文化の継承だ

（長崎大学　工　一年　白石幸也）

松陰や天皇陛下のみ歌に直接ふれることができたのが一番良かった。分析的自然科学的思考だけに陥ることがいかに大変な間違いであるかを感じ取れたようだ。歌を詠んだ人の心が、苦悩が伝わって来るような、こうしたことが文化を承け継ぐ第一歩なんだと思う。先人が生命を賭して訴えかけた、その意志を承け継ぐことが文化の継承なんだと思う。物事に対する概念的なとらえ方や人間の理性と欲望という複雑さを抜きにした考え方、しょせんは戦争や階級に対する浅薄なとらえ方に対する反動でしかなかったと気づかされた。

各地より集ひ来たりぬ同胞（はらから）と語らふ時間もあとわづかなり

このままでは日本は滅びてしまう

（中央大学　法　二年　畑中良二）

今林先輩の吉田松陰の生き方についての講義に深く感動した。松陰は全てを国に捧げた人です。一国の将来を予測するには、その国の青年を見れば良いと言われているが、現在の日本は「自分だけ良ければいい」「人の為に働くことはくだらない」などという言葉に代表されるように自己本位的な傾向が見られる。学生運動や市民運動の類いも一見立派そうな名分を掲げながら、その美名の裏にあるものはやはり自己本位的傾向である。このままでは日本は滅びてしまうのではないか。私は自分の生き方を根本的に見つめ直し、自分の人生態度を確立し、日本のために少しでも役立ちたいと痛感した。

茶谷さんの遺書を読みて

国の為散るをいとはぬますらをの妹に向けたる心のやさしさよ

新たな眼が開かれた

（九州大学　医　二年　古田　耕）

学んだ最重要点は小田村先生のお話にあった自分を身がまえないということだ。天皇や国家についても、いままでの考えを通して全て理解しようとしていたため、頭の上だけのいびつな理解になっていた。しかし自分の心を素直にして、話を聞いて行くと今までと全く違った理解ができるようになった。合宿の目的とするところを完全に理解したわけではないが、色々な事について新たな眼が開かれたことの意味は大きい。講義の中で共感できなかった点については、さらに書物や友との討論によって理解を深めていきたい。

初めには心かよはぬ友らともつひに心の通ずる思ひす

新しき友とのしばしの語らひに講義の疲れのいやさるる思ひす

かたくなな己が心も身がまへるなてふ師の言の葉に心開かる

真実の自己への回帰でもあった

（広島大学　政経　三年　竹山隆善）

これまでともすれば身がまえて、ご講義や班での話し合い

の中で言いようのない圧迫感と息苦しさを覚えることもあった。しかし、それをわずかにしろのりこえてみると、この合宿の教えは日本への回帰であるとともに、真実の自己への回帰ではないかという気がしてくる。学ぶことの内容もさることながら、学ぶ態度さらにはそれを支える生き方について小田村先生のご講義を中心に考えさせられた。「たとえ一人でも自分が正しいと思ったことをやってゆく、そうした人間の間に真の友情が生れるのだ」というお言葉に感銘をうけ、自分もこのようにありたいと心に思った。

友どちと風呂に入りて語らへば友の心の伝はりてきぬ
久々に会ひたる友と風呂に入りて時を忘れて話し合ひたり

思はず背筋が伸びた

（西南学院大学　法　二年　酒村聰一郎）

小田村先生が身構えないで人の話を聞きなさいと言われたが、一人一人の先生方の御言葉がビシビシと胸に響いてくる思いがした。特に今林先輩の御講義は、その気迫に圧到されまさに松陰の口から発せられた言葉のようで思わず背筋が伸びた。また何よりも嬉しかったのは、自分が勧誘して参加した友が「本当に来てよかった」と言ってくれた事だ。この言葉を耳にして、私達がやっている事は決して間違ってはいない、無駄になってはいないということを実感し、大きな力を得たような気がした。

帰り際握手交しつ友どちは勧誘してくれて有難うとふ

カメラ・レポート　28

和歌創作をかねてのレクリエーション。生憎の曇空で、予定してゐた妙見岳の登山は中止となったが、立ちこめる霧の中を仁田峠まで行く。

これからも苦しかれどもともどもに力合せて学びてゆかん

新しい何かが始る予感がする

（熊本大学　薬　二年　小山喜昭）

わすれかけていた心――至誠――が日々よみがえってきたような思いがする。講義はつらい時もあった。討論で言葉につまることもあった。しかしそれらを終えた今は新しい何かが始るという予感がする。四泊五日の短い日程の間で、これまで学んできた以上のものを得たことは非常にうれしい。

合宿のおもひでいだき今日からはたゆまぬこころもちつづけたし

第二十一班―男子学生―

真の日本の姿を見た

（中央大学　商　一年　岡本恭明）

天皇陛下の尊さに触れ、すごく身近に感じられました。陛下の御製を読み、真の日本の姿を見た様な気がして深く心に残っています。また、味酒さんの話を聞き、自分が二十年間思っていたこと、つまり味酒さんが行動で示された生徒への不屈の教育心、暖いおもいやりが、とてもすばらしいことだと思い、今からの自分の人生において心の糧となっていくことと確信しております。

湯あがりに友とながめし夜の空に流れる星に願ひかけたり

もっと深く天皇のことを知りたい

（九州産業大学　商　一年　久我隆昌）

諸先生方の御講義をお聞きして、言葉に言い表わせないくらい学ばせられ、勇気づけられたような気がします。特に、天皇陛下のことが身近に感じられるようになり、もっと深く天皇のことを知りたくなってきました。それに吉田松陰先生の「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり」という言葉に感動し、これからの自分に対して、この真心があればどんな事にもうちこんでいけると思いました。

身にせまるお言葉ききてひしひしと己が気持ちの吸ひこまる心地す

日本国民としての自覚

（中村学園短期大学　家政　一年　石崎幸伸）

朝のつどいの時に、君が代を聞き、日の丸をながめていると、何かしら胸にジーンとくるものがありました。そんな時、やはり僕は日本人なのだなあとつくづく思いました。周りの状況についつい流されがちの今の生活によみがえった日本国民としての自覚を、本当にうれしく思います。この合宿の体験を忘れず、毎日を、悔いを残さずに過ごしていきたい。

雲仙の夜空に広がる星を見てわれの心は透きとほる心地す

真心をもって日々を送りたい

（亜細亜大学　法　四年　池田　茂）

鋭く私の身体全体を射るごとき友だちの言葉をおそれ、自分を飾ろうとしていることに気づき、口を閉ざすことがあった。真剣に取りくんでいる友のことを思うと、恥づかしさを感じるとともにくやしかった。どれだけ皆が自分をわかってくれたかはわからない。今後、真心をもち、またそこには常に自分を省みるひかえめな気持を忘れず、日々を送りたい。

合宿を通じて求めつづけたるまなぶ厳しさわれは忘れじ

一人でも立て！

（九州大学　法　二年　緒方嘉祐）

和歌相互批評の時間が非常に楽しく、又自分のつたない表現に対し、班員のみんなが僕の心を推しはかっていろいろと考えてくれることが、とても嬉しく感じた。小田村先生がご講義の中で、「一人でも立て、そのためにはどこに出ても恥づかしくないだけの気迫が必要であり、心を鍛えておかなければならない」と述べられたことに、この「一人でも」という態度が欠けていることを痛感した。合宿で得たすばらしい言葉を大切にし、自分を鍛えていきたい。

夜の集ひの終了後ベランダに班員全員集まりて
友どちは風呂よりあがりてベランダで満天の星を飽かず眺むる
ベランダに班員すべて集まりて語り合ひたり星を故郷を
四日間共に過ごせる友達と語り合へるが嬉しかりけり

カメラ・レポート 29

仁田峠の帰途、雲仙名物の地獄めぐりを楽しむ。

目が覚めた

（長崎大学　教　一年　川崎泰孝）

感銘深く忘れることができないのは、「味酒さんの話」と「茶谷さんの遺書」でした。それらの話を聞いたとき、私は目頭が熱くなるのを感じました。そして、現在の私自身が小さな人間でしかないことを思い知らされました。それともうひとつ、「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり」という吉田松陰のことばに、目が覚めるような気がいたしました。このようなはじめての感動を忘れず、自分の生き方にそれを生かしていきたいと思います。

友どちとおくになまりで語らひて笑ひはたえず夜はふけゆく
合宿で学びしことを忘るまじ我が目の前に荒海あるとも

大御心の尊さを実感した

（鹿児島大学　教　三年　橋口丈志）

天皇陛下の大御心に触れ、はじめてその尊さが実感出来たやうに思はれ、涙の溢れるのを抑へることが出来なかった。日本に生れ、このとても素晴らしい、力みのない和の精神を知らぬ若人のゐることが何と悲しいことであらうか。日本に生れた以上は、まず国の歴史を正しく理解するところからはじまらねばならぬのではなからうか。大学に戻り「まず己の身より起つべし」の気持で勉学に励んで行かうと思ふ。

大空に向かひて友とたからかに声を合はせて軍歌うたひゆく
歩調とり大声あげて軍歌うたひ心通ふはたのしかりけり

胸にこみ上げるものを大切にしたい

（東京工業大学　工　三年　皿田　宏）

夜久先生の御講義の中の遺書を読んだとき、胸にこみ上げるものがありました。このことを大切にしたいと思います。レジメを持ち帰って、手の届くところに置いておこうと思っています。

ベランダに出でて見上ぐればひろごれる夏の夜空の美しきかな
星空を見上げてをれば思はずも明るき星の流れゆく見ゆ

第二十二班―男子学生―

ひたむきに至誠をつくす

（九州大学　理　一年　白水重憲）

私は、この合宿に参加できて本当に良かったと思います。特に痛切に感じたものが二つあります。一つは、吉田松陰先生や茶谷武さんのように、至誠をつくすということをひたむきに信じぬいて、それをつらぬかれ、それに殉じられたその純粋さ美しさであります。もう一つは、自己の心の甘さと粗雑さです。

夜久先生の御講義で茶谷さんの御遺書にふれて

つはものが心をこめし文章は我の心を強くゆさぶる
つはものは我らの祖国を守らんとただひとすぢに願ひつづけり
信念をつらぬきとほしみまかれる御魂は空で我ら守るか

はじめは身構えていたが……

（亜細亜大学　経　二年　日根野谷雅人）

私は、はじめは何事にも身構えていました。天皇に関しても自分なりの考えがありましたし、その為に討論にも積極性がみられませんでした。しかし、小田村先生にその事を言われてふと我に返りました。やはり殻に閉じこもることは良くないことです。友達から話を聞き、違った形で違った方向から物事をとらえることが可能だと痛感致しました。正直言って小田村先生の御話をもっと早く聞けていたらと思います。

言の葉の内に秘めたる深さをば我改めて痛感するなり
み友らと語らふうちに己が身の思慮の浅きをひしと感ずる

素直な気持ちで耳を傾けた

（高崎経済大学　経　四年　大場昭博）

合宿に参加する心構えとして「生きがい」を見つけたいと思いました。そのため、頭の中の既存の概念を払いのけ、素直な気持ちで講義に班別討論に耳を傾けてきました。そのうちに、講義をしてくださる先生方のような考えに、早く自分も到達したいと思うようになり、そのためにはいかにすべきか、いかなる方法があるのかと考えるようになってきたので

「世界各国の戦死者をまつる聖地」と題して諸外国での見聞をふまへて語りかける高千穂商科大助教授・名越二荒之助先生(左)。「今上陛下の広大なお心」について語る福岡県立嘉穂高等学校の若き教師・小野吉宣氏(中)。戦死した友について切々と若い参加者に語る下関・㈱宝辺商店社長・宝辺正久先生(右)。

す。

良し悪しを見わける力そなへたし我をささへよ雲仙の友

初めは腹が立ったが……

（独協大学　法　一年　百崎　眞）

まるで自分の今までの観念――もちろんそんなに確固と裏付けられるていものではないけれど――と対立する講義ばかりで、初めのうちは何もわかっとらんくせに腹が立つことさえありました。しかし、声を高ぶらせ、はては感涙にむせびつつ話をして下さる先生方をながめる自分に、ほんとにこれでええんやろかという気持が少しずつ頭をもたげてきたものであります。ほんとうに聞こうとしたのは後の方からでした。

音楽にたたき起され急ぎゆく今日もねむたき朝のつどひよ

真剣に生きた人々の人生は厳粛だ

（九州大学　理　三年　丸山正雄）

今回の合宿で、すべての話が僕の心に響いてきたというわけではない。しかし、講義の中に登場してきたいろいろな人人は、各々の時代を真剣に生きてきた。僕は、この人たちに何を言うことができるのだろうか。戦争に死んでいった人々も、平和な日々に素朴な気持で生きて死んでいった人々も、真剣に生きた人々の人生は厳粛である。僕は、これを感じることからすべてが始まると思った。

正座して目をとぢたれば鳴きしきる蟬の声のみ聞えくるかな

本を読むことの難かしさを知った

（鹿児島大学　水産　二年　姫野政直）

深くこころに残りましたことは次の二つです。一つは、本を読むことの難かしさです。太子の御本を輪読いたしましたときに、意味はつかめるのですが、それから先に全く進めなかったのです。本は意味だけではだめ、それ以上に何かがあるのです。あと一つは、人との付き合いです。昨年同じ班になりまして、ほとんど話さなかった人が彼の正直な気持を本当に話してくれ、また私も素直に聞くことができました。

我が子をば御軍（みくさ）へおくる父母の心のうちぞいかにあるらむ

陛下のあたたかい心を感じた

（熊本大学　工　三年　原田　保）

近江学園の精薄の子供達が器楽合奏で陛下をお迎へした際、陛下は感極まられて上向いて目をしばたいてをられたといふ御話を味酒さんがなさいましたが、私は本当に心がゆさぶられるやうに陛下の実に純粋なあたたかい御心をひしひしと感じました。

また松陰先生の「至誠にして動かざるもの未だ之れあらざるなり」といふ激しい生き様に、私の心は躍動し、松陰先生の気魂が自分にのりうつって来る様に感じました。

もろともに過ごせし日々もはや過ぎてけふは別るる日とはなりたり
全国に別れゆくとももろともに励みゆかなむと師ののたまへり
我の手を強く握りて来年も来ますといひし友有難し

「理解する」ということの意味を考えた

（鹿児島大学　工　二年　城戸　昇）

小田村先生の講義後の班別討論で、大学改革のことを理解できると言ったら、どう理解できるのかとか、それは本当かと聞かれると何の反論もできず、自分の勉学の浅さに腹立つと共に情けなくなってきて、くやし涙がこぼれてきた。こういう経験は今までにない。この合宿で得たものは、「理解する」ということの本当の意味を考えろということであった。

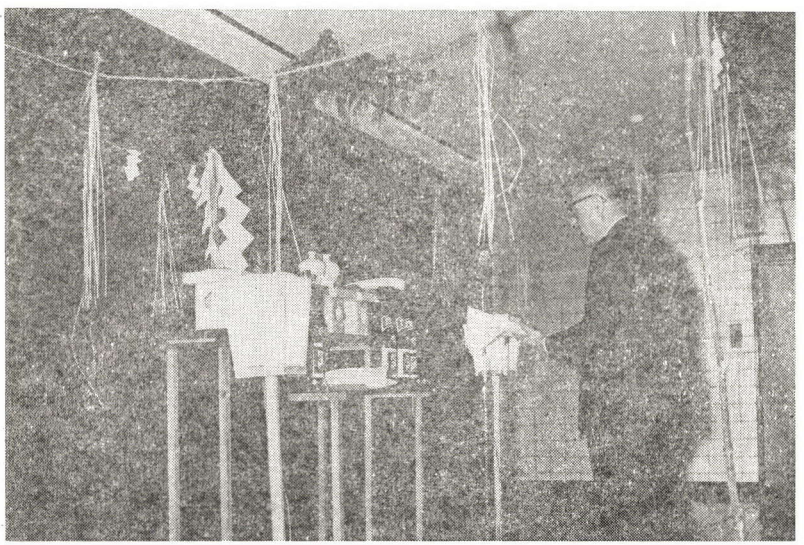
反論の内容聞くうち我が思ひの余りにも浅きを情けなく思ふ
情けなく思ひしうちにあふれくる涙とめえずくやし涙を
この涙無駄にするかと誓ひつつ友とわかれて合宿を去る

第二十三班―男子学生―

茶谷さんの遺書に思はず涙

（西南学院大学　商　三年　宝辺成二郎）

夜久先生が、茶谷さんの遺書を声をつまらせながら読まれた時は、思はず涙がこみ上げてきました。私たちは、茶谷さんのやうな祖国のために散っていった人たちの悲痛な運命と



第3日目の夜。夕方からのどしゃ降りで、急遽室内に変更してとり行はれた慰霊祭。祖国のために尊い生命をささげられた御霊の御前で明治天皇と今上天皇の御製拝誦が小田村先生によってなされた。

いふものを憶念することなしに現在の日本は考へられないと思ひます。茶谷さんや松陰のやうに、自分の生き方と国を思ふ気持が密接につながってゐるやうな人生体験を持ってゐる人を追体験することは、自分自身の生きてゆくべき姿勢が正されてくるやうに思ひました。

夜久先生がご講義の中で茶谷さんの遺書を読まるるを聞きて

会場の静まりゆきてをちこちで涙にむせぶ声の聞ゆる
我も又悲しき運命(さだめ)偲びゆき思はず涙のしたたり落ちぬ

「おかしい」ことがわかるようになった

（熊本大学　工　三年　浜田善信）

色々と考える中で「おかしい」「これはおかしい」と思われることが私の目にも写るようになり、日本人として何か見解を開いていけるような気持になりました。しかし、この「おかしい」という事もまだ受売りのことで、実感として感じたわけではない。このように全面的にうすぼんやりした感じのものであり、これからこういった事をほんとうに理解でき実践していける自分に仕立あげようと、帰ったら地区の輪読会にも参加させて頂きたいと思っています。

せみの声の繁く鳴けるを窓の外(と)に聞きつつ我ら学び合ひたり

松陰の「至誠」に活力

（福岡大学　商　二年　原田憲治）

この合宿中の講義で最も自分に活力を与えてくれたのは、吉田松陰先生の「至誠をもって動かざるもの未だ之れあらざるなり」という御言葉であると思います。先生はそれを死ぬまで実践されたが、自分も、という気持で勇気がわいて来たのです。

それから、歌をよむということが、こんなにもむずかしいことかと深く感じました。自然や人間、人生を見る時、自分の心を真に透明なものにするむずかしさを知りました。

社会にて多くのことを学ぶとも先輩(とも)は合宿を忘れじと誓ふ

「学ぶ」姿勢を学んだ

（高崎経済大学　経　四年　後藤邦夫）

私はこれまで「三無主義」に毒されていたと思いますが、諸先生や先輩の熱のこもる御話に心を動かされ、何かを感じずにはいられませんでした。それは理屈や理論で説明できるものではありません。自分が、身構えることなしに、自然に入ってくる。これが「学ぶ」という姿勢だと言い切れるのではないか。「学ぶ」ということが多かったこの合宿で、これからの自分に何が必要であるのか、それを教えてくれたこの集いに感謝します。

合宿の最後の夜を友だちと語り明かせり窓辺によりて

「学問」をしたい

（九州大学　工　二年　岩坪哲四郎）

班員の人たちが、小田村先生が言われたように大学の肩書などをはずして、本当に仲よくまるで同じ大学の同じ学年の友のようにすら感じられます。自分が頭で感じていたことを班員の質問で、ああ自分の考えがまちがっていたなと感じられたことは、とても嬉しく感謝したいと思います。

小田村先生の講義の、あのはげしさと自からの体験からのお言葉から、やはり本をよんで学問をしなければと思いました。去年の失敗は二度くり返したくないと思いました。

夜久先生のご講義を聞きて

先生は声をつまらせうたはれし戦（いくさ）に逝きし教へ子のうた

父母に笑ってほめて下さいと書きのこしたる思ひの悲し

妹に歌よみたまへとのたまひし兄は悲しき大和ますらを

国家は生命体である

（長崎大学　医　一年　金谷浩一郎）

国をまもるということは、これまで僕にとって理解のできない言葉でした。しかし、夜久先生が茶谷さんの遺書を読まれるのをききながら、僕は理屈じゃない、これが国を護るということなんだ、これが国家が生命体であるということなんだと思った。また、合宿中に知った歴代天皇の御製、とくに

慰霊祭のあと「なほらひの御神酒」を参加者全員でいただく。

今上陛下の戦死者を悲しんでよまれた御製をきくうちに、僕は自己と天皇と国家とが一体であるということが少しずつわかりかけてきたように思う。

天皇まもりぬかむと先輩の語りし言葉わすれかねつる（すめらみこと）
来年も再び合はむと誓ひたりし友どちの顔われ忘れめや

まごころを接することの大切さ

（岡山理科大学　理　三年　栄野和光）

「至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり」と言った吉田松陰先生の、この言葉に徹し切った信念に感動し、まごころで相手と接することがいかに大切かを考えさせられました。我々学生は頭で考える事はするが、それに実行が伴わない事が多くなったように思われます。本当に真剣にまごころを込めれば、分かってくれる相手も今よりふえるような気がしました。

明日よりはまごころ込めて友だちと語らんことを胸に誓ひぬ
いつまでもこの誓ひをば胸に籠め我が考へを人に語らん

第二十四班—男子学生—

重たい責任を感じた

（福岡大学　経　三年　田中利久）

真に〝知る〟とはどういうことか。国家とは何か、学問とは、学問するとは、等々を話された先生方のお話に強く惹かれるものを感じました。私はその実感を信じ、それを一つ一つ確かめ、知って行おうと思っております。

合宿で学んだことは、すべて理解できるまでは何年かかるかわからない重たさを持っております。いま、その重たい責任を感じております。

閉会の言葉を聞けば偲ばるる共に語りし友どちの顔

人の心を前提とした学問

（熊本大学　医　二年　福田　誠）

不安を抱きつつ参加した合宿教室でしたが、熱のこもった諸先生の講義・班別討論のおかげで、学問の本来の姿を実感として受けとることができました。人の心を前提としない学問は、学問といわないのだということ。こういうことは、大学の講義ではとうてい得られません。松陰の人をひきつけるあの魅力は、こういう学問をやっておられたからだということがわかりました。私の名前は〝誠〟ですが、松陰の〝至誠〟明治天皇の〝まこと〟が何度も出てくるのをみるにつけ、自分の名前に負けてはならないと思いました。

はるばると心は家にむかひたれどなどてか雲仙の離れがたしも

短歌に接することができたよろこび

（岡山商科大学　商　三年　森脇一人）

私が先ず一番に書こうと思ったことは、短歌に接することができたという最高のよろこびであります。

とかく歴史を、いついつどこで、だれが、国がなにをしたとしか考えられなくて、そこにしか意義がないように思われて、そこから先を考えられなかった自分が、とても今は不思議な思いがします。日本の歴史とは世界の歴史でありますし、日本の心なのだといっても何らおかしなところはありません。

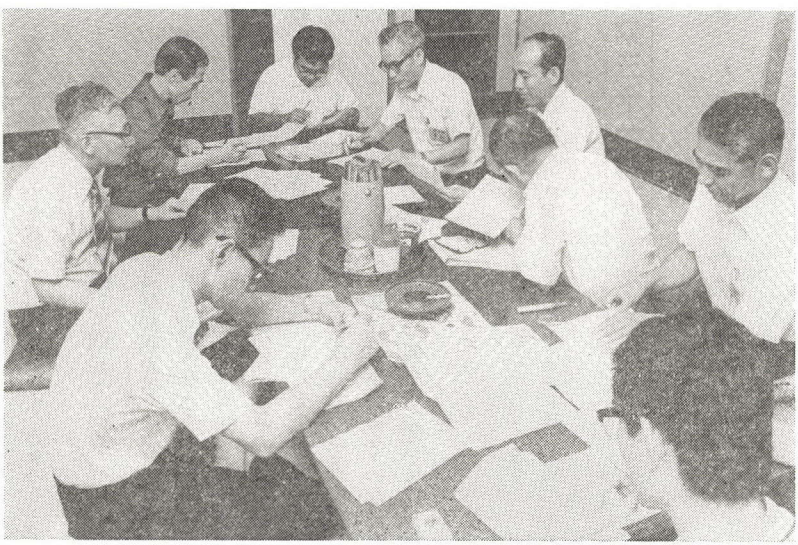
友の語る熊本なまりの言の葉も明日よりきけずと思へばさみしも

和歌相互批評は貴重な体験だった

（京都大学　農　三年　種村　修）

班別の時の本当に真剣になって相手の心を分ろうと努めること、特に和歌の相互批評の時の、作者の気持になって和歌を読み、批評するという経験は貴重でありました。小田村先生が「和歌相互批評の中の国文研の人の批評の仕方が教育の姿であります」といわれたことが心に残っています。帰ってからもあの時の心を常によびかえし、心の平等の世界を自分のまわりから築いていきたいと思います。

友どちの心をこめてよみおきし歌読みゆけば心通ひぬ



第3日目の夜おそくまで、助言者の先生方によって全参加者から提出された和歌の「選歌作業」が続けられた。

自分にも和歌がわかる

（九州大学　法　一年　沢村幸夫）

ぼくにとって一番の収穫は、これまでどんな和歌をきいても、どんなすばらしい絵画・音楽にふれても何の感動を覚えたことがなく、自分には文化というものはわからないんだ、無関係のものだと思い込んでいたのですが、今上陛下の御製、茶谷さんの和歌を聞いて目頭が熱くなるのを覚えました。この時自分に、和歌をわかる心があるんだなあと思い、何か胸がはずんできました。何たる画期的なことでしょう。大声で叫びたかったものでした。

君が代を声たからかに歌ふとき再び会はんと固く誓ひぬ

ハンマーでなぐられた感じ

（早稲田大学　社会科学　一年　尾崎　浩）

最終日に前原先輩の意見発表を聞いた時、ハンマーでなぐられたような感じを受けました。ほんとうに自分は陛下のみ心をわかっていたのか、わかっていたのならなぜ、友人と話をする時、その事をうやむやにしてしまっていたのか。余りにも現体制に憤りばかりを感じて、そちらの方ばかりに目を向けていたのではないのか。そのくせに自分は陛下の事を真から理解しているのだというのぼせ上がりに気がつきました。

慰霊祭に
輝やける明日の日本を信じつつ君は異国の土となりけり

学問とは何かを和歌を通して知る

（亜細亜大学　経営　二年　遠藤敏彦）

天皇、日本、古事記、日本書紀などまったく触れようとも考えようともしなかった僕を、今や興味をもたせ、その意義を教えて下さったことに本当に感謝しています。「しきしまのみち」という言葉の意味を、夜久先生が教えて下さいました。歌をよむ——自分のすなおな心で、感動を正しく歌にするのがこの意味だと思います。日本が今やらなければならないこと、また、本当の学問とは何かを和歌を通して感じとれた気がします。

和歌相互批評にて
我友の作りし歌を読み返し気づかぬ思ひに心うたるる
言の葉の一つ一つに我友の深き思ひがあふれてをりぬ

第三十一班—女子学生—

人の気持が信じられるようになった

（福岡大学　法　一年　安田美弥）

大学に入ったとき、ひとと話をしたいと思ったのですが、思うようにいかず、歯がゆい気持になっていた。それは他人

のせいだというような傲慢な気持を捨てきれなかった。この合宿に参加して、自分自身を下から見るのではなく上から見ることができるようになった。討論する中で、話す人の気持が信じられるようになった。ここに来るまでの私は他人の言葉がうそのような気がして素直になれなかったのですが、これからは自分の「から」をとりはらって友とつきあっていけるように思うし、本当にそのようにしたいと思います。

涙にてとぎれながらも遺書読まるる師のみ姿に心うたれぬ

意気込まず謙虚に勉強していきたい

（福岡教育大学　教　三年　杉野明美）

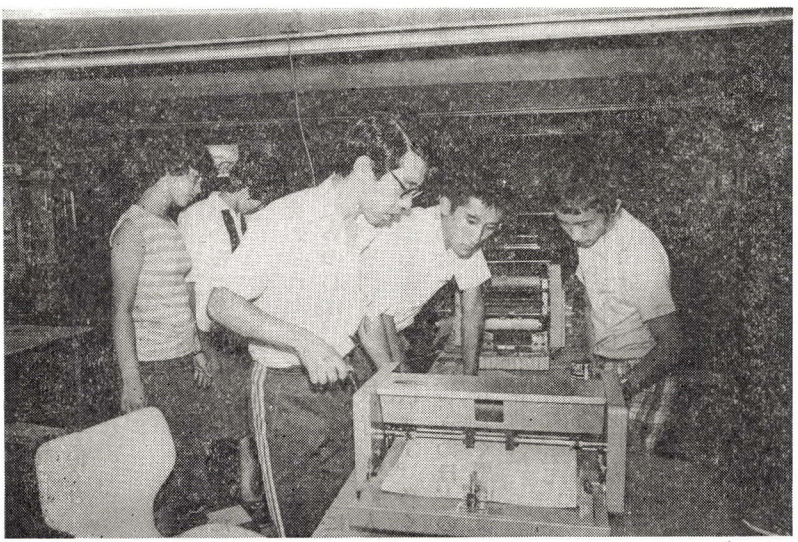
人との真心ある接し方の難しさを痛感させられた。相手の気持になって考えるのは本当に難しい。松陰先生は「至誠をつくす」ことを最も大切にされたが、自分自身をふりかえるとなかなか出来にくいものです。

夜久先生の御講義の中に出て来た戦死された人の遺書を読んだ時、後に続く者を信じて亡くなられた先人達こそ、私達が「至誠」をつくしていかなければならないと感じました。今後は意気込まずに謙虚に、国にとって、天皇陛下のため、あるいは周りの人々のために何をすべきかを考えていきたい。

夜久先生が遺書をお読みになるのを聞きて

国のため命ささげし教へ子の文を静かに読み給ひける

教へ子の文を読まれし師の君の声はふるへて涙流さる



和歌創作の歌稿が、アルバイトの高校生と若い国文研会員の事務局のスタッフによって印刷される。藁半紙27枚の歌稿を翌第4日目の夕方まで全参加者に配布するのは大変な作業だ。作業は深更まで続いたが皆が頑張った。

とつとつと文を読まれし師の君の心思へば胸のつまりぬ

「勉強するぞ」

（九州女学院短期大学　英語　二年　尾谷青子）

参加して良かった、本当に。「勉強するぞ」という気持が湧いてきた。英語の勉強はもちろん、日本の歴史を勉強しながら、先人たちの至誠に触れて、女性としてのゆたかな生き方をしたいと思う。この合宿は、私に学び方というものを教えてくれた。先生方、我が友達、誠にありがとうございました。

閉会式にて

君が代を歌へばいつしか心より歌へる吾に気づかしめらる

はじめは心配だったが……

（熊本女子大学　文家政　一年　松村尚子）

はじめは見ず知らずの人たちと話ができるだろうかと心配だったが、そんなことは一日目で吹っとんでしまいました。討論の時に「戦争で死んだ人は国家の犠牲者だ」と私が発言したら、先生が「あなたは戦死した人の和歌を読んだことがありますか」とひとこと言われました。読んだことのなかった私は大変に恥ずかしい気持になり、戦死者の気持も知らずに発言した自分が恥ずかしかったのです。何もわからない私にじっくりと話して下さった先生方に心から感謝しております。

真剣に涙ながらに語る友のまごころ我に伝はりてくる

良き友を得たよろこびをかみしめむ生涯の友にと胸にねがひつつ

み友らの涙ぐむ面みつむればしらずしらずに我も涙ぐむ

全く異色の体験だった

（国立名古屋病院附属看護学校　二年　大同早苗）

今までの私の経験からは全く異色のものでした。広い心の人間になりたいと思って参加したのですが、自分の求めていた広さというものを知された思いです。祖国を愛し祖国を真剣に思っている人たちの心は、みんな同じように思われました。これからも自分の専門的勉強と併行して、人間としての広さを身につける勉強もしたいと思います。多くの友とのつきあいの中に、人間の心とは口では言えぬほどの深さと暖みのあることを感じることができてうれしく思います。

語らひて心開きし友どちの幸多かれとひたに祈りぬ

合宿で広き心のあたたかさ触れたることを我は忘れじ

「誠」は自分自身に対しても必要だ

（鹿児島大学　教　三年　別府清子）

「至誠にして動かざる者いまだ之れあらざるなり」とのお言葉を残した松陰先生についての御講義を聞いた時、命をかけて自分の信念を全うされた強さに感動した。そして御講義される先生のお話が心の中まで迫ってくるような感じであった。先生方の謙虚なお姿にも頭が下ります。これまで人と話

をしていても、あの人とは合わないとか、好きでないとかといって片付けていたことが反省させられる。それは自分の甘えであって、自ら殻に閉じ込もることに他ならなかった。誠ということは人に接する時も自分自身に対しても必要だと思った。

友どちの和歌の調べを聞きをれば友の心がせまりくるなり

先生方の熱意に感動した

（長崎大学　教　一年　三原三主子）

先生方の学問に対するものすごい熱意と自信にみちた真剣な御講義に感動しました。実をいうと御製を読んで、本当に天皇がお詠みになったのかと疑う気持がありました。しかし疑う時点で、もう学問の大切なものを失っているし、それでは日本人の心を学ぶことはできないのだということがわかりました。古典は素直に勉強することだと思いました。また、山田先生とお話することができて、もやもやとしていた大学生活に対する考えがはっきりしたことも本当に嬉しく思います。これからは自分の足元を見つめながら、日本の心を失わぬ女性として精魂こめて勉強したいと思います。

五日前は名前も知らぬ友どちと心開きて語る嬉しさ
師の君の熱意まなびて我もまた勉強せむと心に誓ひぬ

第4日目の午前。「現代流行思想とその批判――『しきしまのみち』の使命――」と題されてご講義される亜細亜大学教授の夜久正雄先生。教へ子である戦没学徒・茶谷武さんの遺書の紹介は、聴く者の胸内に大きな感動を呼びおこした。

心を通はせることはむづかしい

（福岡女子大学　文　三年　光山香奈子）

学年や学校の違ひを越えて、友達と一つの心になるといふことは本当にむづかしいことであると思ふ。心のこだはりをなくするといふことも容易なことではない。班長といふ馴れない役をすることになって、はじめはそれを意識していたやうだ。しかし、自分の心の中に強い願ひのある時は、友達が真剣に話を聞いてくれるほど、自分の思ひを言ひたいといふ気持は押さへきれず堰を切ったようにあふれるものだといふことを心から感じた。心を開いて話さうと努めるならば、やはり心は通じるといふことを実感した。

御講義の終りて

レジメいだき師の君の御言葉思ひだしつ友らと部屋に急ぎ戻れり
足早に戻らむとするさ庭辺にうす紫の花の咲きたる
思はずも足を留めてうす紫の花をみつめぬしばしの間
風ふきてうすき花びらかそけくもゆるる姿の美しきかな
はりつめし心いつしかなごみたるうすむらさきの花ながむれば

第三十二班―女子学生―

新たな感激で胸が一杯だ

（鹿児島大学　法文　三年　續　久美子）

〝祖国日本〟について自分なりに心の中で考えていたつもりですが、理論に走りすぎていたような気がします。合宿でみんなの意見や思い、先生方の御講義、そして数々の天皇陛下の御歌をお聞かせいただいて新たなる感激で胸が一杯になりました。故国を愛する心は祖先の思いを知り、その歴史をつかむことだと、しみじみ感じました。日本の伝統や文化を大切にしていきたいと心から感じています。これからは素直な心で物を見るように、本当の意味の学ぶということをしたいと思っています。

感想を聞きつつをれば友どちと心通ひて胸のふるへり

天皇のお気持を知ることができた

（長崎大学　教　一年　一瀬節子）

今までマスコミなどを通してしか見られなかった天皇の御製を多く拝見でき、天皇が本当に民のことをお思いなさっているお気持をいくらかでも知ることができてうれしく思います。私にとって天皇とは何か、国とは何かということをこれから見出していきたいと思います。

この合宿で多くの友と討論をし意見を交わせたことは良かったと思います。短い期間でしたが先生方や先輩方とも邂逅できたことをうれしく思います。

友どちと語りあかせしよろこびをこの合宿で我は得にけり
今ここに九人の乙女集まりて笑み交はしあふことのうれしさ

晴れ晴れした気持で帰ることができる

（長崎大学　教　二年　佐々木　緑）

先輩の強い勧誘で十分に納得しないまま参加したが、心から参加して良かったと思う。先輩のお気持に少しでも近づけたのだという喜びで胸も震えんばかりだ。「日本の歴史・伝統・文化に回帰しなければならないとよく言うが、わずか十年程の歴史の中での我々の思いを継承することができなくて、どうして日本の長い歴史・伝統・文化などがわかるものか！」という先輩の厳しい一言がどうしても頭にこびりついてはなれなかったからだ。本当に晴れ晴れした気持で雲仙の地を去ることができる。この合宿で様々の人の生き方を知ったが、私もそれらの人々に恥じない生き方を求めてゆきたい。

茶谷武さんの遺書を読みて

ますらをが国守らんと笑み浮かべ死にゆく姿まぶたに浮かぶ
先輩の御心つぎて我もまた天皇守るみ盾となりたし

国のことを考えられる人間になりたい

（福岡教育大学　教　二年　伊藤智恵子）

人の話を聞く耳をもつことが自分で話すことよりも、どんなにか大切であり、また全身を傾けて聞くことがどれだけ難しいことなのかを今さらながら感じました。今回ほど天皇陛下の御歌や戦争で生命を捧げた人の和歌に深く感動したこと

講義室での一コマ。真剣な面持で聴き入る参加学生。

はありません。これまで戦時中の人々の日本を守り抜いた意志を承け継いでいきたいと思っていましたが、口先のことばかりであったようです。もっともっと御製や戦時中の人々の和歌を偲んで、真に国のことを考えることのできる人間になりたいと思います。

かたみにと残せし文を読む声の気づかぬうちに高まりてゆく

感動したことは言葉で言いつくせないが……

（福岡女子大学　文　三年　中村恵子）

主義主張以前の問題として素直な幼な子の如き心をもう一度想い起そう！　ということに誰が一体異議を唱えるでしょう。今回、善い意味にしろ悪い意味にしろ本来的な日本人を目の当りにしたようです。「ああ、やっぱり私も日本人」と感じ、また「私は本当に日本人なのか？」という気持も起りました。感動したことは言葉で言いつくせませんので、不満、恐怖を覚えたことを記しますと、例えば三百数十人の心が一つになって笑い感涙に咽び泣き出したとしたら……と何度か戦慄をおぼえてしまいました。多様な価値感がそれぞれ対決し合っている状態こそ一番自然なのではないか、それぞれが抑制し合い専横を許さないのがよいのではないかという懸念なのです。ともすれば日常性に埋没しがちな私にとって、この充実した合宿の経験を想い出しつつ日頃の生活を引締めていきたいと思います。

言ふことと思ふこととのあひだにはわづかながらも深き溝あり

小田村先生のお言葉にアッと息を呑んだ

（熊本女子大学　文家政　一年　宮原佳子）

高校、大学での会話といえば日常的な雑談ばかりで、内心ではこんなことでいいのかと思いながら、それを押し殺してきた。だから講義と班別討論で埋められているスケジュールには逃げ出したいような気持で沈んでしまった。講義に対しても冷たく否定的に聞く。そんな時、まわりを見ると皆はそれぞれに感動を体一杯に表わしている。私は何も信じることができないのかと思いつつも、これでいいんだと秘かにいい聞かせた。そんな自分が小田村先生のお言葉でアッと息を呑んだのだ。そうだ！　心に壁をつくってはいけない、もっと素直に謙虚にならなければいけない、真の意味で生きるということを捜し求めていかなければいけないのだと。得がたい経験であった。

口とざし帰る日まちしこのわれに声をかけにし友忘られず

国歌斉唱に涙があふれた

（長崎大学　教　二年　柴田浩子）

閉会式での国歌斉唱の時

万感の思ひをこめてうたふればただ胸せまり涙あふるる

己が心くじけんとすれば雲仙に得しみ友らを思ひ出さむ

生き方について学んだ

（鹿児島大学　教　三年　黒木美智子）

合宿で生き方について色々と学んだ様な気がする。各々、一つしかない生き方であるが、先人の言葉に触れることによって様々な生き方を知ることができる。素直な心で読んでいけば沢山の人生を味わうことができる。本当にうれしくなってしまった。経験がなければ話はできないと思っていたけれども、そうではなく、色々な経験を経た先人の和歌などを読み、感じる中で自分自身にも追体験できるのだということを知って本当に良かったと思う。

事前合宿最後の夜

夜半まで勉強しつる友どもの真剣な眼のたのもしく見ゆ

先輩の励ましたまふ言の葉に合宿に向けて勇気わきけり

思ふまま語らひ合ひて過さむと本合宿に思ひをはせり

"信じる"姿勢を大切にしたい

（玉川大学　文　二年　加藤詩麻音）

私達が求めていかねばならないイデオロギー以前の心の広さや大きさというものこそ、人間として日本人として生れた者の素直な姿勢ではないでしょうか。班別討論で友のふとした言葉にハッと胸を打たれ、御製の中に入り込む自分を感じて何と天皇様の大御心の深いことかと気づかされたりしました。祖国の中の自分を感じて、涙がとまりませんでした。私

カメラ・レポート　37

大学教官有志協議会を代表しておはなしされる高崎経済大学教授の高木尚一先生。御自身の学生時代を振りかへりながらのお話は、学問に向ふ強靱な御精神の偲ばれるものであった。

の国を愛する気持はこれなのかと嬉しくてたまりません。そして人と人との触れあいの中で、本当にまごころを持って接していかねばとつくづく感じました。また友の心の中に入ることの難しさ、人の心を動かすことの難しさを思いました。感ずる心というものを素直に見つめ〝信じる〟姿勢を大切にしたい！　と心中より思った次第です。

日を追つて黙りし友も笑ほみて語りかけくることのうれしさ
心から素直にならうと友の言ふふるへる心の伝はりにけり
閉ざしたる心を開き語る友の言の葉痛く涙の流るる

第三十三班—女子学生—

茶谷さんの遺書に涙があふれた

（福岡教育大学　教　三年　谷口敏子）

初心にもどって素直な心で参加したつもりでしたが、初めは聞き慣れた言葉を聞いているようで新鮮さがありませんでした。やはり前回も参加したということで傲慢になっていたからだと思います。これではいけないと気づくと討論での一人ひとりの発言が私の心を清めてくれるように迫ってきました。夜久先生が茶谷さんの遺書を読まれた時、先人のそうした命がけの行為によって今の私があると思われて涙があふれました。殊に妹さんに書き遺している言葉には、目の前で茶谷さんが言われているようで「お兄さん」と叫びたくさえなりました。

後輩は涙こらへつつ友どちに胸の思ひを語りたまへり

楽しくも辛かった班別討論

（福岡教育大学　教　一年　中島恵子）

心を開いて語り合った後の喜び、理解し合うことのむずかしさなどを学んだ。討論の時、和歌を作る時、自分の気持をうまく表わす言葉を見つけるために苦しんだ。その苦しみの中で日本語のすばらしさに触れたようだ。最も楽しく、また辛かったのは班別討論だった。自分の未熟さを思い知らされた。先輩の御意見を聞きながら、こんなに深い読み取り方があるのかと何度もハッとさせられた。自分のまとまらない意見を真剣に聞こうとしてくれた顔が忘れられません。

師の君のまたあふべしの声聞きて思はず我は心打たれし
指揮班の「伝達終り」のその声に合宿の終り思ひしらさる
合宿の終りて別るる友どちになごり惜しさのつのり来るも

私のために心から語ってくれた

（長崎大学　教　二年　佐野善子）

見ず知らずの人だった班友が私のためにいろいろと心から語ってくれた。本当にありがたいなあと思います。大学での生活態度の全てが問い直される思いです。とかく議論を楽しむことに陥りがちで、何かすっきりせずに気にかかっていたのです。班別討論では私のためを思って語ってくれていたの

が伝わって来て嬉しくありがたかったのです。私も大学でサークルで友達に対して、その人のためを思って語ってあげたいなあと思ったのです。

班友が我を思ひて言の葉をかけてくれしことありがたきかな
親もとでまた大学でなせしこと心こもらぬことばかりなり

日本を日本たらしめる一人になりたい

（長崎大学　薬　一年　辻　弥生）

先生方の御講話は様々のものを与えてくれた。日本を守るために死んでゆかれた人々の行為のうえに私たちは生きている。後世の人々に願いを託した人々の心を知らなくても生きてはゆける。しかし私はそんな生き方はしたくない。祖先の思いを本当にわかり、それをまた後の人々にも伝えてゆきたい。日本を日本たらしめる一人になりたい。そのための学問をやっていこうと強く思っている。また和歌創作を通じて自分の心を表現することのむずかしさをつくづく感じた。ことばを修めることもこれからやらねばならない。

為すことの次々に胸にわき起こり心ははやくも家へ飛ぶなり

しきしまの道を学びたい

（長崎大学　教　三年　眞崎典子）

二度目の参加で少しでも知っていることが話題になると軽はずみな意見を出してしまった。そしてこの人はまだ殻を作っているなあなどと傲慢な気持にもなっていた。実はそうい

第3日目の午後。合宿も大詰を迎へた。「学び方」と題して小田村先生が登壇された。文章の一言一句の意味を正確に汲み取ることこそ、学問の第一歩であるといふご指摘に、聴く者はハッと気づかされた。

う自分の方が殻を捨てずに人に接していることに気づかされた時は本当に恥ずかしかった。人の気持を本当に解るには虚心にならなければならない、そしてもっと私の方から跳び込んでいかなければならないと感じている。そのためにも学問の中心である「しきしまの道」を学んでいきたい。御製や先人の御歌を拝誦すること、和歌創作をすることの重要性と喜びを感じました。

後輩の合宿感想を聴きて

言の葉を選び給ひて後輩は胸の思ひを述べんとすなり
先生の御心の中に戦友の生き給ひしこと感じらるとふ
吾れも又先人の思ひ内に秘め生きていきたしと語り給ひぬ
胸の思ひ言葉とならず後輩は目頭押へ下を向くなり
後輩の言葉とならぬその思ひ吾れも心に強く刻めり

心に残った味酒さんの発表

（作陽音楽大学　音　一年　久保田羊子）

私の心に最も残ったのは味酒さんの研究発表でした。こういう人がおられるのか、こういう人が育ったのかと合宿教室の根底を見た思いです。高校時代の恩師である白浜先生が「他の先生方とどこかちがうのは何故かしら」と友と話したことがあったが、先生の生き方も合宿教室につながっていたのだと感じた時に、本当に参加して良かった、良い先生に出会えて良かったと心から思いました。天皇について、世界と日本について、これから勉強しもっと深い見方ができるようになりたいと思います。

お互ひに心通はせしみ友らと別れてゆくはさびしかりけり

いいものはいいのだなあ

（鹿児島大学　教　三年　斉藤利恵）

いいものはいいのだなあと思います。いいものをいいと感じきれなくなっているのが現実の生活ではないかと思います。この四泊五日の合宿で、そのいいものをいいと感じうる心がもどって来たという気がします。この合宿でいいものにふれて心が洗われたのです。いいもの、いい人に沢山接していくことが、いいものをいいと感じる心を深めていくことだと思います。

全体意見発表の折

母君の病に倒れたまひしてふ知らせを受けし友のありけり
「帰れ」との母君の願ひありたれど「最後の日まで残りたし」といふ
もうすでに心は家にとびてをりとく母君に会ひたしといふ
母君とまみえしをりにいふことはお礼のことばのみと言はるる
我もまた家に帰りて父母に合宿参加のお礼言ひたし

素直な自分になれてうれしい

（九州女学院短期大学　英語　一年　上村奈保美）

本当に不安な気持で参加しただけに、この合宿での経験に強く感激しました。この感激は決してうわべだけの飾られたものではない。討論を重ねるうちに自分がちっぽけに思われ

て悩み反省し、そういう自分に気づいた感激です。その悩む中で変っていった自分をみることができて、素直な自分になれたのをうれしく思います。

己が心を省みたれば思はるる素直になることいとむづかしと

第三十四班—女子学生—

永遠に消えない生命を感じた

（福岡教育大学　教　二年　河永真由美）

祖先の人たちが愛する日本をどのように守ってきたかを偲ぶ時に申し訳けないということを感じます。夜久先生の御講義の中での茶谷武さんの遺書を読み、後の者達によって茶谷さんの生命が承け継がれていくなら死をなげかないという文章に触れて、本当の私の心の中に生きているように思われました。永遠に消えない生命というものを感じることができました。国を考える時やはり祖先の人たちが残された文章や歌に素直な気持で接していくことが大切だと思います。

茶谷武さんの遺書を読みし折

己が身の露と消ゆるをも惜しまれず屍となりし先達偲ぶ

永遠に後を継ぐるを信じられ屍となりし先達思ほゆ

神州の不滅を信ず先達の己が心に生くるを覚ゆ

永遠の生に生きむと死に行きし先達の思ひ受け継ぎゆかむ

第4日目の夕方。参加者が地区別・大学別に集って懇談会がもたれた。学園や職場に帰ってからの活動や連絡先などについて話し合ふ。

理屈ではわからない何かを教えられた

（長崎大学　教　一年　城戸佐和子）

いつも物事を理論的に批判的に考えることに一種の満足を覚えていた私は、とても理屈だけではわからない深い何かを掴むことの大切さを教えられた。昔の人々を見つめる瞳、本来の日本、歴史を学ぶということ、こうしたことがどんな事なのか少しずつわかり始めたようです。昔から感情の起伏の激しい私は、それを感受性が強いと錯覚してうぬぼれていたのではないか。本当に人の心を素直に感じきれていたのだろうかと。何か人間の本当に大切なものを自分の中にあたためてみたいという気がします。

空しさを感じつつ生きしをわが胸は喜びに満つまごころにふれて

体験として学んだこと

（山口大学　文理　四年　脇村典子）

六名の班員の中でさへ、自分とはまるっきり感じ方や考へ方の違ふ人のゐることを知って、私自身で殻をつくったのではないかと思ふ。いつも同じやうな考へ方の人達とばかりつきあって来た自分は温室の中にゐたのだといふことにも気づいた。「人を信じる」とは本当に努力の要ることだと思ふ。信じるとは安易に妥協して仲良くすることではない。相手と真剣に対決する中で、お互ひが自分といふものを腹蔵なく話し合って一歩一歩と歩み寄ることだと思ふ。私はこのことを合宿中に体験として学んだ。

茶谷武さんの遺書を読みて

国のため生命を捧げし教へ子の遺書を読みあぐ師の声ふるふ

父母や妹にこころをとどめつつ国に殉ぜし御魂尊し

貴重な一期一会

（福岡教育大学　教　一年　井上磨美）

「祖国とは何か」「日本とは何か」ということを、先生方が真剣に考え講義なさるお姿に感銘を覚えました。このように深く〝日本〟〝天皇〟について考えたことはなかった。ですから何もかもはじめて〝聞く〟〝見る〟私にとって御講義の一つ一つのお言葉に胸が激しくふるえた。ギッシリと詰ったスケジュールに最初は束縛されている様にも感じましたが御講義と班別討論という日程には意義があると思われます。御製を拝誦し、多くの御講義を聞き、各地から参加した友達と心から討論できたことは本当に貴重な「一期一会」だったと思います。

みも知らぬ友らと集ひ語り合ふこの幸せを永久に忘れじ

限りないやさしさ

（福岡女子大学　文　一年　林　里美）

友から参加をすすめられ楽しみにしていましたが、その後自治会に入って別の友から「右翼」的な合宿ではないかとい

うようなことをいわれて悩みました。それでどちらかを捨てなければならないという考えがいつもあり、班別討論の時もそういう目で見ようとしていました。しかもそれで心を開いて話し合っていると思い込んでいました。しかし最後になって、どうしてか先輩のやさしさを感じてから、それまで一生けんめい語りかけて下さったことが次々に思い出されて胸が一杯になりました。もう一度やり直したい気持です。こんな私に語りかけて下さった先生方や友達のやさしさがうれしくてたまりません。私が一人でかき乱していたようで悪かったと言うと、そんなことはないと心からおっしゃる先輩に限りないやさしさを感じました。

我を思ひ語り給へる友達の静かな声に耳を傾く
心より我を思ひし先輩のやさしき心をいつしか感じぬ
いづくよりわきし思ひかわからねどいつしか胸の熱くなりけり

真剣なつきあいをしたい

（鹿児島大学　教　三年　黒木美都子）

心に残った言葉のひとつに「徹夜までして話してくれる友がいるというが、その友と話した次の日から君の生き方が変ったことがあるか」というのがあります。日頃、友とのつきあいなどについて考えていたこともあって、ハッとさせられました。「つきあい」の深さのようなものを感じました。大学に帰ってからも真剣な「つきあい」をしたいと思います。和歌相互批評で班員のひとつひとつの和歌について、その作

第4日目の夜。参加者が、最もひやひやし、又わくわくさせられる「和歌全体批評」の時間である。日頃から和歌をお詠みになってゐる島根県・玉造温泉の旅館のご主人である青砥宏一先生は、温みのあるなかにも適確なご指摘をされた。

者の気持を偲ぶということをしていくうちにみんなの心が通い合ったような気がしました。これからも和歌にあらわれたその人の気持を大切にして、友としてつきあっていきたい。

友どもの作りし和歌を読みゆけばみなの心もなごみゆくなり

第三十五班—女子学生—

大きな勉強になった

（福岡教育大学　教　二年　平山とき子）

私は教師になりたいと思い、そのためにいつも情熱をもって子供と共に生きていきたいと思いました。ではどうすればよいのか、何かをやらねばならないと思っていただけに大きな勉強になりました。自らが真剣に語り一刻一刻を大切に過ごすこと自体が、本当に相手を思い情熱をもって子供に接することができるのだということを学びました。

語らんと思ふに我をみるみ友らの眼を見れば言葉出こず

和歌を詠むということがわかった

（熊本短期大学　教養　一年　恒松まち子）

「和歌を詠む」ということがわかったようです。青砥先生からご批評いただいた私の歌は心が入っていない歌でした。自分の歌が感動の中心のない言葉に甘えた歌であるというのが、他の人の歌をよむとよくわかりました。二回目の和歌創作では心をこめた歌を詠んだつもりです。今後は「心」を忘れずに詠んでゆきたいと思っています。

味酒景子さんの研究発表を聞きし時

涙など流すものかと耐へてをればとなりの席よりそのけはひする

横むけば子も大学に通ふほどのよはひの師の目に光るもの見ゆ

師はあふるる涙を我にみせまいと頭かきつつほほをかくせり

聞き終はりとなりの師の名をとひたしと思へど我は横さへむけず

心を開いて語り合うことの難しさ

（熊本大学　理　二年　村上佐代子）

昨年も参加しましたが、今年の方がとっても素直になれたような気がします。一日、二日と日を追うに従って、三日目ぐらいの班別討論からは皆の心が開いてすばらしい討論が出来たと思います。その中にも、まだわだかまりをもった友がいたことを知って、人を思いやること、人の話を聞くこと、それにもまして自らの心を開いて話をすることの難しさを痛感させられました。

頬つたふ涙ぬぐはず絶句せしみ友にかくる言の葉も出ず

非常に嬉しくてすがすがしい

（日本経済短期大学　経営　二年　小坂美恵子）

自分はここまでの人間なんだと心を閉じ殻に閉じ籠る。半年後の就職。私は一体どんな道に進めばいいのか。こんな不安が常に胸内に潜んでいた。このままでいいとは思っていな

かったが、それを打ち破るつてがみつからなかった。しかし今の私は心を開き殻を打ち破ることができたようだ。非常に嬉しくてすがすがしい。これからやることが沢山ありすぎて何から手をつけたらいいのかわからない幸せな悩みが生れた。あまり気負わずに少しずつ実行していきたい。

学ぶ地は遠く離るとも我が友よゆめ忘るなよ心の通ひを

ありのままの自分を話すことが大切だ

（長崎大学　教　一年　北村由美子）

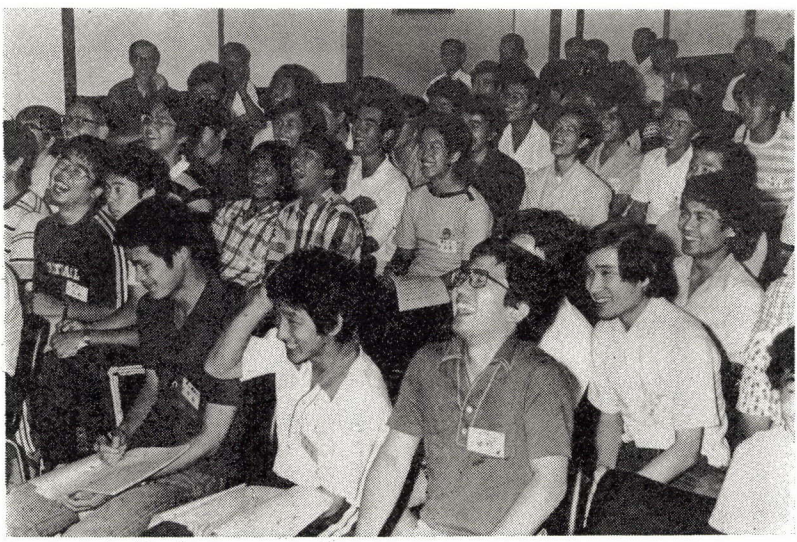
初め班別討論のとき、意見を言ったら、どのような意見が返ってくるだろうか、それにどう対応したらいいだろうかなどと考えて、自分から進んで意見をのべることができなかった。なるべく平穏なことを話そうと。でもそれは大まちがいでした。自分の考えをもちたい。自分をよく知りたいと思うのなら自分の思ったことをそのまま言わなければ、返ってくる友の意見も真実なものとはならない。自分のためにならない。こんな簡単なことに気づき素直になろうと思いました。人の話をよく聞けるようになったようだし、言葉の大切さも痛感しました。

班友の語りし言葉耳にしてかたくなりし心ひらけり

心の底からの語り合いができた

（長崎大学　教　二年　友田久美）

多くの人と接し語り合って、自分を見つめ直したいと思っ



ユーモアにあふれた青砥先生のご批評に講義室は何度か爆笑の渦につつまれた。

て参加しました。はじめは各々が「から」に閉じこもっているようで、自分も踏み出そうとしなかったため物足りなく感じていました。しかし日が経るに従って心の底からの語り合いができて、本当によかったと思います。特にその中で「やさしさ」ということを強く感じました。人にやさしくあれといつも考えてきたつもりですが、本当のやさしさだったのだろうかといま一度考え直しました。

さよならとほほゑむ友の顔を見て別れの悲しさ胸をうつなり

ひたすら考え、聞き、語り合った

（亜細亜大学　経　二年　依田正美）

正直いってとてもきついスケジュールでした。班員の張りつめた顔を見て励まされ、班別討論ではただひたすら考え、聞き、問いかけ、語りました。友の人間性に触れ、また友は私の中にふみ込んできてくれたのです。初めての体験でした。三日目に何人かが、四日目にはまた何人かが心を開いて語り合えるようになり、ついに最後の日には九人全員の心が開き素直に語り合えたのです。最後の夜はほとんど寝ずに語りあかしました。ねむくて頭はボーッとしていても、心は興奮し燃えていたのです。

五日目に素直な心で語れたと班の友らと涙流し合ふ

班別討論は非常に苦しかったが……

（長崎大学　教　三年　藤谷京子）

班別討論では、自分が心をこめて素直な気持で言ったはずの言葉が他人にわかってもらえず、他人にわかってもらうことのむずかしさを感じました。そして〝言葉〟というものを考えざるを得ませんでした。班別討論は非常に苦しかったとも言えます。しかし、いま考えてみると小田村先生の言われたように、日本の歴史、伝統、文化のありがたい恩恵の中に生きている自分自身に目を見開くきっかけのようなものを改めて強い形で与えられたような気がします。

班別討論の際に二人の友の語るをみて

ぽつぽつと声をつまらせ胸のうちを語る友らは肩ふるはせり
昨日まで言葉少なかる友どちの口より出づるあたたかき言葉
ふつふつとまごころこめて語りたる友どちの声胸にしみいる

ほんものに近づく底力としたい

（鹿児島大学　教　二年　深町美代）

合宿中は平常の生活の中での自分の勉強のあり方を探したいと思っていました。数々の講話や班別討論、慰霊祭など様様な経験に心が動かされました。この思いを合宿後の勉強に生かして、さらに一歩ほんものに近づける底力としたいと思います。息の長い勉強をしていきたい。これからやろうとする勉強が生きてゆく上で、しっかりと大地に根をおろしたも

のとなるように努めたいと思います。

散策の折殉教の碑を見て
指先にても触れえぬ程の熱き湯の中に投ぜられし人々偲ばる

第四十一班—社会人—

私は揺り動かされた

（熊本県八代市立第三中学校教諭　黒川嘉正　44歳）

「若さ」がはち切れそうであった。ただの青年のエネルギーの発散ではない。道を求めてやまない青年の純粋な、ひたむきな〝まごころ〟があった。それに私の年齢も揺り動かされた。私の今までの生活の一面が音を立ててくずれたような気がした。ほんとうに私は小さいと思った。私の信念とは一体、何であったのか。世の組織の中でただ錆びついた機械のように動くだけ。少しも世の中をよくしようという考えはなかった。これからは日本のゆく末を憂える心、祖国日本のことを心底から思う国民になってゆきたいと考えた。

戦ひに征くますらをの遺書を読む大人（うし）のことばに涙あふるる
戦ひに征くますらをの遺書を読み我が生き方の恥づかしく覚ゆ

学生時代に戻ったような気持

（熊本県八代市立第八中学校教諭　江崎正護　47歳）

これほど充実して自分自身が学習したことはなかったよう

最後の夜のつどひ。わづか一缶のビールだが、参加者の熱気が溢れ、会場は爆笑と拍手に沸きかへった。次々と奇抜な出しものがつづく。合宿での張りつめた緊張を思はず忘れる一刻である。

だ。学生時代に戻ったような素直な気持になった。班別討論で「戦争について」話し合ったが、防衛力の必要性は肯定できるが戦争は絶対にさけるよう全力を傾けて努力すべきであり、純真な若者を死に追いやるようなことをするべきでないと思う。数々の有意義な講義を受けて来たが、特に小田村先生のお話は強烈な印象を受けた。ことに学ぶ者にとって身がまえない態度が大切であるとのことについては年甲斐もなく反省させられた。味酒さんや若い学生の純真な素直な発言がたのもしくも刺激剤となった。

松陰の心語らるる師の言葉に聞き入る若者のまなこきびしき

激しく非常に激しく何かが変容しつつある

（福岡県久留米市立西国分小学校教諭　富松義喬　42歳）

強烈な印象を受け内容もあり、文章を書くことに比較的慣れているはずの私が、どうしたことか何も書けないのです。思考力を失っているのでしょうか、錯乱状態にあるのでしょうか。いやそうではない。導入講義から最後の小田村先生のお話に至るまで、その内容が私の胸の中に渦巻いていることを感じますし、それぞれが何か有機的に反応し合っている手応えはあるのです。私自身の内部で激しく非常に激しく何かが変容しつつあるように感じます。これを言葉にすることが恐しいような気分なのです。もっとゆっくりとかもしたい、新しい目による歴史の勉強をこやしとしながら。そんな気持なのです。

この胸にうづまくおもひいかにせんわがことのはのまづしさかなし

充実感で一杯だ

（熊本県八代市立龍峯小学校教諭　岩木浩俊　41歳）

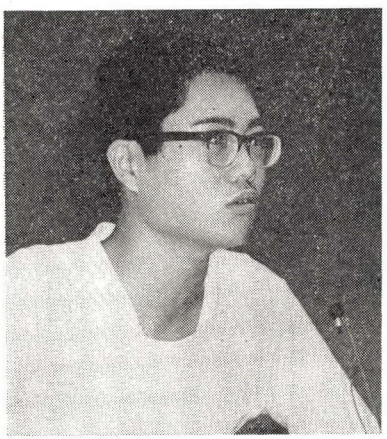
参加させていただき本当によかった。充実感で一杯です。現在の教育現場は自分を主張することばかり多くて、自分の義務感についての認識が薄らいでいるように感じられます。和歌の精神に学んだ〝真心〟〝感動〟〝客観性〟を大切にして教育にたずさわっていきたいと思います。〝真心〟を大切にするという実践は非常に困難なことでしょうが、一人ひとりの子どもの心を素直に受けとめることのできる教師、また子どもの心の中にとびこんでいける教師をめざしたいと思います。

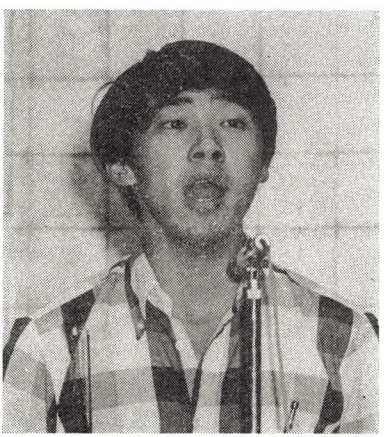
朝まだきもや立ちこむる中吾もまた集ひの広場に急ぎてゆきぬ
壮厳にのりとひびける慰霊祭のしじまの中に稲妻一閃

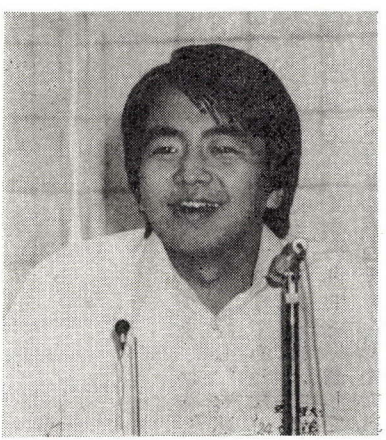
最も大事なことを問い直す機会となった

（熊本県八代市立第二中学校教諭　早川富貴　45歳）

合宿教室への参加は気が重かったが、全日程が終るいまさわやかなものに変っているのに気づく。それは次の様なことが理由だろう。まず諸先生方の熱情溢るる道を極められた講義に、新しい自分の世界が開けてきたこと、物事を多面的に







カメラ・レポート　43

「全体意見発表」。閉会も数時間後に迫った。友らは次々と登壇して、こみあげてくる自らの思ひをうちつけに語った。

見る目がもてたことである。また、生徒のためにも、自分のためにも、社会のためにも大いに勉強しなければならないという自覚を強く持つことができたこと、さらには祖国日本のことについて、日本民族として如何に考え如何にあらねばならないかに気づかせてもらったことなどである。真剣に日本国のことを考えておられる多くの人を知って、これまでの自分が恥ずかしくなった。そして若い男女大学生諸君の真剣に討論する姿を見て、驚くとともに何かしらたのもしさを感じた。人生について最も大事なことは何かを問い直すいい機会になった。

友の述ぶる意見を聞きて恥づかしく思ふ我が心根のせまきを思へば
合宿を終へて家路を急ぐいま雲仙の空晴れて風なし

立派な「合宿教室」だ

（熊本県八代市立第二中学校教諭　鶴山敏喜　46歳）

立派な「合宿教室」だと痛感している。もともと日本の国は素晴しいと思ってきたから、改めてという言葉は当らぬが、なお改めて見直す心がわいているのは、天皇の存在・私欲を捨てて国土を守ってきた壮士や勇者・聖人の思想などの紹介、はたまた和歌創作に秘められた己の心を開くことの体験等々の実に見事に計画された策謀に陥ったからだと今気づいている。うれしい。怠惰な生き方をしていた己にはどうしても開眼の機会が必要であった。これまでよりも、ものを正しく深く見る生き方が出来るに違いない。

秋されば つぶらひとみの生徒らに我らが先達の至誠語らむ

第四十二班—社会人—

私の心の大きな変化

（福岡県久留米市立城南中学校教諭　豊福定行　39歳）

私はいのちの躍動しない生活に陥ってしまい〝詩心〟を忘れた感動のない味気ない人生を送ってしまいそうであった。この合宿で〝詩心〟が蘇ってきたといえる。至誠を探求する学問も、この詩心が出発点であろう。天皇の御歌を拝誦して感動し、御心がわかってきたことは私の心の大きな変化である。和歌創作はむずかしかったが、日本人の自覚と日本人の心をみつめていく上に非常に大切なことであり、このことが研鑽できれば他人の感動を自己のものとしてとらえることができるであろうとの認識を持った。

あたらしき日本のいのち生まるるか若きらの姿たのもしと思ふ

あるこだわりは消えないが……

（福岡県立三池高等学校教諭　石井利男　26歳）

実にいい体験だった。初対面の人達と五日間にわたって寝起を共にし「ある心の姿勢」といったものを目的に学ぶということは他に求めてもなかなか機会のあるものではない。最後まであるこだわりは消えないが特に印象に残っていること

は次のことだ。天皇の御歌にふれる機会にめぐまれたことは日本人を理解する上で貴重な勉強となった。今までの自分に欠落していた重要な体験だった。また今林氏のお話の中で「吉田松陰」という日本史の暗記事項でしかなかった人物が生き生きとしたイメージで感じられたことである。

ひとめぐりめぐりし席にすわりをれば共に過ごし来し時の思はる

世界の中の日本について

（大豊工業株式会社　田中靖久　35歳）

今上天皇の御歌と茶谷さんの遺書から戦争の悲惨さをひしひしと思い知らされた。その悲劇を避ける手だてが万に一つでもなかったのだろうか。開戦の直接的原因としてABCD包囲作戦に会ってやむなく開戦したとのべられたが、私はそのような状態に外国をなさしめた原因が日本にあるのではないかと疑問である。つまり衞藤先生が日本は外国事情を考えないで一方的考えを貫ぬこうとしがちであるという意味のことを言われたが、これが二次大戦の間接的原因ではないかと思う。ロシヤに対して開戦せざるをえなかった日露戦争で日本が深く反省しておれば二次大戦を避けるヒントが得られたのではなかろうか。幕末、ペリーの開国要求に対して武力を殆んど持たない江戸幕府は武力解決をあきらめたが、この状態の中で吉田松陰らの当時の識者が真剣に方策を考えて日本が植民地化するのを救ったことは夜久先生の言われた通りで

「閉会式」。参加学生を代表して挨拶をする熊本大学工学部3年の原田保君。「合宿での勉強の成果を、さらに大学で深め多くの友に語りかけていかう！」と力強く述べた。

ある。私は武力によらずに外国からの圧迫を避ける方法のあることを明治維新が教えていると思う。不平等条約の締結のような日本が不利にならない程度に守備力は持つにしても、外国から怖れられずに友好的に世界に存在する方法を考えたいと思っている。

つきつめよ日本のもてる問題を永久の平和を守らんがために

第四十三班—社会人—

学ぶ心の姿勢を教えられた

（財団法人広島平和文化センター　鳥尾智寛　34歳）

非常に言葉を大事にし、相手の立場に立ってものを考えるという学ぶ心の姿勢をご教示いただき大変感謝しております。私の職業は平和教育の推進を目的としたものですが、私の職業的任務に対しては、班別討論や意見発表の際に見られたように、参加者の賛同を得るというような実施方法論を体験できたことが、今後のヒロシマを基点とした平和運動に大いに役立つものと確信する現在です。

日本の本当の姿を知りたい

（熊本市立城南中学校教諭　益田　勉　22歳）

合宿教室に参加して自分のカラにこだわっていたことがバカバカしくなった、そうしたら素直に人の話を聞くことが出来て、本当に学びたいという気持になった。自分に何が足りないかが自覚できた。何を勉強したらよいのか、まず歴史を知りたい。日本の本当の姿を知りたいと思う。また思想を知りたい。古人がどのような哲学をもって何を生きがいとしていたのか。自分は日本人であるということを、これほど強く感じたことはない。

年齢高き老師の姿見るにつれ祈るここちす御健勝あれと
三十にてみまかりたまひし古の先達に負けじと学びゆかなむ

どの御講義も真新しく胸にせまった

（福岡県立三池高等学校教諭　青柳正文　26歳）

四泊五日の合宿教室もアッという間に過ぎてしまいました。学校で日本史を教える者として、少しでも得るところがあればと思って参加させていただきましたが、非常に意義深いものでした。最初の山田輝彦先生から最後の小田村寅二郎先生まで、どの御講義も緊迫した雰囲気の中で真新しく胸にせまってまいりました。ただ、それらの感動を素直にうけ入れることに若干の抵抗を覚え、自分で自分にもどかしさを感じることもありました。自分にきびしくあることを思うとき学問の大切さを学びました。

みな我と同じおもひで雲仙をあとにするのかと写真みておもふ

なぜ学問が必要か

（株式会社ミズケイ　不破嘉照　30歳）

なぜ学問が必要なのか、その理由がはっきりした。至誠を貫く為、相手に理解してもらうように自分の思いを言葉に表現できる学問。本物を見極める為の学問。祖国日本を守る為には一人ひとり強く正しく気迫に満ちた生活を送ることが周囲の人に感銘を与え、感化することにつながります。そういう人を一人でも多くつくることが祖国日本を守る事に通じると信じます。

――雲仙を去りがたき思ひす我が友とまだ語ること多かりければ

明日からひとつひとつ実践していく

（大豊工業株式会社　沢田　伸　36歳）

最初の二日間はただ御講義を耳に入れるまでの事であった。班別討論に於ける仲間の幅広い解釈には大変勉強になりました。そうした日がすぎるにつれて自分の考え方や思っている事について意見が出るようになった。また日頃から社会人として感じていた悩みが、諸先生からのスルドイ感覚からのお話で、自分に対する甘えであったことを痛感した。協調性・行動力をもとに明日からひとつひとつ実践していくことを心に秘めた。

閉会式のあと参加者からの御礼の言葉に応へて、主催者側の大教協、国文研の会員が壇上に並び、代表して小田村先生が挨拶をされる。

また逢わんと思いて……

（福岡県立三池高等学校教諭　佐々木重利　28歳）

互いに生きているとも知らなかった人々が何の縁によりてか、雲仙に集い心を開きて〝祖国〟〝人生〟〝学問〟を語る。いつしか時も過ぎて、又それぞれの生きる場にもどっていく。左様な事が長い人生には時折おとずれるであろう。しかし別れを前提の無責任さがそこにあるなら、別れたのちの生き方に何の益があろうか。池に石をなげてもいずれ波紋もしずまる。人生はやすきに流れやすく人は夢想を好む。いつの日か又逢わんと思いて今日下りてゆく。

人々よいつまた逢へるさだめやらかの地この地でつとめはげめや

第四十四班―社会人―

ひとつの課題ができた

（福岡県久留米市立安武小学校教諭　藤好香代子　23歳）

感動や驚きだけで終ってはいけない、それを大切にして自分をみつめ直すということが少しわかったようです。「美を求める心は誰にもあるが養い育てようとしなければ衰弱する」という言葉が心にのこっていますが、感動する心を失ってはいけないとわかっていながら何もしなかった自分の傲慢さに気づき腹立しく思いました。夜久先生が「感動したことは自分の言葉にあらわすことだ、それが心を養い育てる事になる」とおっしゃいましたが、自分の今からやるべきことはまず感動を歌に詠むことだと、ひとつの課題ができました。また班別討論で心をこめて話す、心から聞くということのむずかしさと素晴しさをしみじみと感じました。

日の本に生まれたる事のよろこびを言の葉つまらせみ友は述ぶる

実体験を持つ人の強い説得力

（福岡県立三池高等学校図書館　池田満智子　25歳）

講義を大変に興味深く聞かせていただきました。実体験を持つ人の強い説得力、また科学的説明がいかに理解しやすいか等を感じました。以前、読んだことのある本の中から今一度読み返してみたいと思う二、三の本が心に思い浮かびました。さらに日常の生活とイデオロギーとの関係についても、もう一度考えてみたいと思います。

雲仙に家事を離れて学びたるわが手のにはかに美しくなる

三十一文字の威力に驚いた

（九州大学付属病院薬剤部　小田雅代　23歳）

私の目に涙がうかぶのを見たら友はきっと驚くでしょう。人が涙をながしていたら不思議そうに見ていた自分だったのだから合宿に参加して何かしらこみあげてくるものを感じたとき最も驚いたのは自分自身だったのかもしれません。私に

本来あった何かをよびさましてくれたのかと思うと、とてもうれしい。気にしていた和歌の創作は思っていた以上にすらすらとできました。言葉をえらぶことは容易ではないが、思った通りに詠むと友にも通じることがわかりました。和歌の相互批評で友の心をわかろうと必死になっている自分、私の気持をわかろうとしてくれる友を感じるとき、あの三十一文字の威力に驚きました。またことばが自分の心に姿やかたちを与えてくれるという実感がこみあげてくるのを覚えました。

思ひやる心足らずと自らを省みて友はなみだぐみけり
なみだぐみ心の底をうちあけし友の瞳の美しきかな

ご講義が心にくい込んで来た

（博文堂書店　辻田恵美子　29歳）

昨年の初めての合宿教室では感動するのみだったが、今回はご講義が心にくい込んで来るようでわかりかけてきたようだ。感動をいかにこれからの自分の実生活の中に溶けこませ持続させていったらいいかなど、小田村先生が〝学び方〟というご講義で具体的に申されたように学びの姿勢をくずすことなく努力してゆきたいと思う。そしてこの世に女性として生命を受けた以上、女性の本質である心優しさなどを先人の生き方を通して、学びつつ、もっと古典文学にいそしみたいと思う。

合宿の日程は滞りなく終了した。それぞれが大学に職場に戻っていく。
「お元気で！また来年も逢ひませう」。

慰霊祭にて
打ちつくる雷雨の中でおごそかにいにしへ人の御霊迎へぬ

見学参加者

真の学問追求があった

（亜細亜大学留学生センター　青島　勉　26歳）

マスプロに代表されるように現代の大学教育は受身の教育が中心で、教える方も教わる側もその不正常さを感じつつ、どう対処したら良いのか分らず、今も尚そのままにされている。学生は講義内容がどのように自分自身に反映してくるのかつかみきれないままで、ただ単位を取得せんが為にのみ通学しているようだ。そのような中にあって、この合宿教室は伝統により培われてきた古人の一言一句に誠意をもって学びそれを己の言葉に換えて、他人と意見を戦わす。最初はとまどいも見られようたが、同じ班員が助け合って相互に伸びてゆく。こんな中にこそ真の学問追求があるのだと感じた。

語らひて疲れたる眼に明け方の深き緑の何とさはやか

一番大切な勉強法がなされていた

（出光興産株式会社店主室　山下和英　29歳）

現代日本の精神的空白と低迷を打開し、日本人本来のあるべき姿を問うという一番大切な勉強がなされていた。それぞれの講師の方々による祖国、天皇、人生、学問についての導入講義をもとに、各人が自問し討論し自答していくことのすばらしさ。ここで感じたことは日本の良さ、歴代天皇の国民に対する思い、青年研究発表をされた方々の体験として味わったあの言葉である。私は出光興産に入社して日本のすばらしさと天皇の偉大さを初めて知ったのだが、この合宿を機会にさらに勉強して、ここで知り得た講師、友人の方々に教えていただいて我社の教育の中に取り入れていきたい。

青年の決意をききてふるひたつも我が身に流るるは日本人の血なれば

これが本来の日本の姿だ

（出光興産株式会社店主室　矢野　健　35歳）

一、この合宿教室の在り方、これが「本来の日本」の姿だ。心の平等を願い心をこめて先輩が後輩を導いてゆく。理屈理論で物事を判断せず心を通わせ合い感じ合う事を中心とする。厳しい人生態度。国文研の皆様の仲の良い姿。

二、「何が大切か」について私の誤りに気がついた。出光に入社して会社の事業を中心に「人間尊重」「家族主義」の経営理念を考えてきた様に思う。人間にとっては生き方が大切で、出光に入社したことは生き方を実行してゆく知恵ではないか。幸い日本人として当り前のことをしてゆくことを目標にしている我が社であるので、このことを今後の人生に活かしてゆきたい。

三、長く続いてきた合宿教室の重みを感じた。
良いことを長く続けることの大切さ。
四、国文研の合宿は国文研の先輩が講師であり指導者であるので迫力がある。

日の丸の旗あがりゆく朝空にわが心根の晴れゆく覚ゆ
帰りゆき母に向ひてありがたうといはむとふ人の顔輝けり

〃学び方〃を教えられた

（亜細亜大学広報室　加藤幸雄　26歳）

一昨年に続いて参加したが、いつも得るものが多く、その度に反省させられます。今回は写真班という仕事をしながら合宿の記録にも当ったが、合宿の〃感じ〃をうまくとらえることができたかどうか少々不安な気がする。ただ、反省しつつも精神をこめて撮影してきた満足感を感じている。

一昨年の初参加の時は、日本人としての自覚を教えられたが今回は〃学び方〃を教えていただいた。職場に戻っても、このことを肝に銘じて頑張りたいと思う。

慰霊祭にて
ますらをの御たまを迎へし祭場にとどろきわたる雷の音
ますらをの御たまに御製を奉るわが師を照らす稲妻の光

勇気百倍だ

（久留米市の教育を明るくする会常務理事　田中義人　58歳）

若い学生諸君が心の底から感動している姿に接して、本当の生きた教育はこれだというのを見た思いである。大変に心強く日本の将来は安泰であるとの感じで勇気百倍だ。和歌創作は始めてであり、本当に穴の中に入る思いであったが、これが合宿教室の中核となるものであり、大切なのであるということを知ることができた。今や日本人のあり方が世界各国から厳しく批判されている中で、合宿で指導をうけた吉田松陰、聖徳太子の精神に学びながら、新しい祖国日本の誕生に力を結集して行きたいと思う。

雲仙に道を求めて集ひたる友と語りて心磨かん

合宿中に創作された「和歌詠草」

——しきしまのみち——

和歌創作について

最近の若者は、何事に対しても、余り意欲を示さず、又、心から感動するといふこともないと言はれます。まして、〃求道心〃を持った若者などは、極めて稀であるといふのも、否めない事実と思はれます。「シラケル」といふ言葉が流行してゐるのも、その一つの現れでせう。しかしこの風潮の根を辿ってみれば、人間をも「科学的」に分析することが、「学問的」だとする誤った「学問観」に立ち、教育指針から、〃心を通はすこと〃や〃心を磨くこと〃を捨象してしまった戦後のいはゆる民主教育の所産であると言っても過言ではないでせう。

われわれが、合宿教室で和歌を創作するのは、現代の世相、とくに教育界を風靡してゐる「学問観」を正し、日本人が本来もってゐた素晴らしい情意を取りもどし、正しい人生観、世界観を身につけたいと念願するからにほかなりません。和歌といへば、今日では、何か自分とは縁遠い、極く一部の人々の趣味やたしなみと思はれてゐますが、決してさうではありません。日本人は、千数百年の昔から、（例へば『万葉集』に見られるやうに）年齢、性別、身分、貧富等あらゆる外的な差別をのり越えて、五七五七七の定型に折々の自己の思ひを率直にうたってきたのでした。自己の内心の赤裸々な表白は、同時に厳しい内省を伴ふものです。自己の思ひを表現する為の言葉をさがす過程で、自然に自己の心をみつめることになるからです。そこで私達の祖先は、和歌を創ることを〃自己の心を磨く為の一つの手だて〃と考へ、〃しきしまの道〃と呼んだのです。又、和歌は、人の心と心を結びつけ、通ひ合はせる手だてでもありました。人の真心を敏感に感じるといふ人間にとって最も大切な心を日本人は、和歌を互ひに〃歌ひ交はす〃ことによって育んできたのでした。

さて、和歌創作の導入講義は、合宿の第三日目に国民文化研究会会員（医師・九大大学院）の前田秀一郎氏によって行はれました。氏は『万葉集』や、正岡子規の和歌を紹介しながら、和歌創作の意義、創作上の留意点を述べました。次の和歌は、参加者に深い感銘を与へたと思はれるものの一部で、いづれも『万葉集』に収められてゐるものです。

わが背子は仮廬作らす草なくば小松が下の草を刈らさね
　　中皇命

わが欲りし野島は見せつ底深き阿胡根の浦の珠ぞ拾はぬ

二首目の歌を読むと本当に海の底深く珠を拾ひにゆきたくなるやうな気持に誘はれます。

大伯皇女（おほくのひめみこ）

わが背子を大和へ遣るとさ夜更けて暁露（あかとき）に吾が立ちぬれし

二人行けど行き過ぎがたき秋山をいかにか君がひとり越ゆらむ

大伯皇女は、天武天皇二年（六七四年）の十月以後十二年の間、斎宮（いつきのみや）として、伊勢の大神宮に仕へてをられました。皇女にとってただ一人の血を分けた弟大津皇子が、一度伊勢を訪ねられたことがありました。これは、その別れに臨んで詠まれた歌です。姉の弟に寄せる切々たる思ひが、ゆらぐやうな哀調となって、私達の心に迫ってきます。

その後、参加者全員は、朝から立ち込めてゐる深い霧の中を仁田峠、地獄めぐりへと出かけることになりました。それは、和歌創作を全員で体験する時間でもあります。参加者の大多数は、和歌を創るのは、生まれて初めてのことでありましたが、提出された和歌は千数百首にも、及びました。第四日目の夜、事務局の人々の努力によるプリント二十七枚に及ぶ歌稿をもとに、和歌全体批評が青砥宏一先生によって行はれました。先生は、歌稿中の十数首を例に上げられつつ、ユーモアあふれる中にも、作者の心のありのままを正確に言葉に表現するとは、具体的にどのやうなことであるかを示されたのでした。この全体批評に続いて、各班に分かれ相互批評が行はれました。和歌相互批評では、歌に詠まれた言葉の一語一語を正確にたどりながら、友達がどういふ気持を詠みたかったかをお互ひに憶念し合ふと同時に、気持が正確に表はされてゐない言葉遣ひや、誇張した表現などに対しては、疑問が投げかけられ厳しい批評がなされていったのです。「自分の思ひは自分にしか分らない」と思ってゐたのに、お互ひに直し合ってゐるうちに意外にも、友達に指摘されて気持が通ひ合ふといふ不思議な共感の世界を誰しもが味はったのでした。尚ここには、本合宿教室の事務局でアルバイトとして働いてくれた高校生の作品も集録しましたが、和歌創作導入講義を聞く時間すら無かったのに、自ら進んで、懸命に和歌創作に取り組んだ健気な姿勢をお汲み取り戴けば幸ひです。また、写真班で活躍した加藤幸雄さんの歌は、感銘深いものでした。

胸を打つ友の話に聞き入りてシャッター切るをしばし忘るる

ひたむきな友の姿をとらへんと我を忘れてシャッターを切る

（付記）ここに集録するにあたっては、或る程度の添削を加へ、仮名遣ひを正しました。

和歌詠草（しきしまのみち　合宿中第一回目の創作作品）

第一班

熊本商大商二　細　波　佳　祐

沈黙を破りし後の胸内は宴の後に勝るよろこび

東大文一　力　武　孝　治

心から語り合ふ場をあらためてこの合宿で我持ち得たり

九大工三　廣　木　　寧

三日目におのがおもひをきがねなく友のいひだすうれしかりけり

長崎大教四　内　田　　誠

三百の友らの中で決意をす第一等の人とならむと

福岡大商一　平　山　元　治

合宿に参加してみて言の葉の深き味はひひしと感じぬ

亜細亜大法一　佐　藤　光　一

朝早く霧のただよふ雲仙にすがすがしくも鳥のさへづる

高千穂商大商二　佐々木　澄　高

友どちの眼（まなこ）にするどき光見てわが心中にもゆるものあり

福岡教育大教二　伊　藤　　寛

友どもと熱のこもれる討論し時の過ぐるもいつしか忘れぬ

第二班

九州大経二　奈良崎　修　二

名を呼ばれふり返りたればなつかしき友の笑ひて肩をたたけり

はれやかな笑顔を見れば去りし日の楽しきことの思ひ出さるる

皇学館大文三　深　江　寛　治

仁田峠登りて上よりながむれば見渡すかぎり霧の海原

大阪大文三　絹　田　洋　一

味酒さんの発表をお聞きして

父母のめぐみすくなき幼な子のやさしき心を思へばかなしも

福岡大経一　大　山　輝　昭

先輩にどうかと聞かれ気が付きぬ未だ心を語らざりしを

鹿児島大農一　中　山　富士男

散りゆくも今をかぎりに咲きほこれ名もなき駅の名もなき花よ

東京電機大工二　西　原　弘　登

有明の遠き我家をながむれどみることできず口惜しきかな

高千穂商大商一　千保木　正　一

雨音の強き弱きを耳にしつつ友の言葉を思ひ浮かべる

熊本大法文四　胡麻ヶ野　克己

夜を徹し友と語らひ友と笑（あ）むすがすがしきは我が心かな

第三班

九州大農一　井　手　英　嗣

先輩の研究発表をききて

教へ子を本当に思ふ先生の真の喜び我が胸をうつ

岡山商大商三　中　田　武　夫

霧深き朝に集ひて日章旗色鮮やかに天に登りぬ

防衛大三　中　村　隆　之

とく見んと登りし山はかすみたり晴れわたりたれば島々見ゆるに

名古屋工大工一　藤　本　信　介

先輩のお話の内に大君の優しき御心真につか

めり

日本大法二　藤　本　健　二

各地より集ひし人の言葉からただ我感ずおのれの無知を

長崎大教一　出　口　昭

思ふことの半分もまだ語らねば思ひつのりて苦しかりけり

福岡大経二　杉　山　直　樹

おのが身をふりかへりつつ松陰の誠をつくす難しさ知る

熊本大医四　小　野　憲一郎

味酒さんの発表を聞きて

言の葉は静かなれども子を想ふ気持の深さに涙出で来ぬ

ごめんねの言葉一つを口ごもり言ひたる子どもの何とかはゆき

京都産業大経営三　鈴　木　利　幸

先輩の心をこめて読み給ふ陛下の御歌ひびきわたれる

第四班

熊本大教四　南　田　武　法

岩の間の流れも清き湯を見れば流れの中に手をさし入れぬ

鹿児島大教三　高　梨　幹　孝

司会者の「国旗掲揚」と言はれしを聞けばおのづと身のひきしまる

日本大文理二　川　瀬　賢　一

山狭(やまあか)にかすかに見ゆる青い海静かに浮かぶ白き雲あり

亜細亜大経営一　小　林　隆　秀

味酒さんの話を聞きて

子らの上に涙し給ふ天皇のその御姿に親しみ覚ゆ

九州大工二　清　水　康　博

車窓より外ながむれど霧深く名に聞く岳も見えざりけるかな

駒沢大経一　岩　尾　匡

山霧の白くたちこめ雲仙の雄々しき姿つつみかくせり

九州共立大経一　川　原　敏　昭

討論に溶け込むことの難しさ閉ぢし心の未だ開かず

熊本商大商二　辻　本　士　誠

合宿地にて

わが思ひ言葉にできず友どもに伝はらざることもどかしきかな

夜ふけまで我の心を開かんと心から説く友有難し

岡山大教三　小　田　武　宏

語りかけつじつまあはず口とどむ何と続けて友に語らん

第五班

亜細亜大経営一　田　部　洋　一

霧のため有明の海は見えねども見ゆる木立は墨絵の如し

鹿児島大法文三　福　永　敬　大

とつとつと微笑(ほほえ)みながら語りたる友の言葉の耳に残れり

熊本大法文四　窪　辰　郎

開会式の折に

この友等とこれよりの日を共々にすぐすと思へば身のしまりくる

大分工大工三　山　本　正　博

心こめ歌よみをればすひさしのたばこの火さへ消し忘れたる

中村学園短大家政一　花　田　健　一

離れ来し故郷の方見やれども霧深きため四方もわからず

九州大工二　亀　川　龍　彦

昨日(きのふ)までは遠慮をしける友に対し思ひたることつひに話しぬ

長崎大工二　沖　本　裕　志

合宿のいきつく間なき五日間ホッといきつく夕ぐれの時

第六班

鹿児島大法文三　中野　弘

味酒景子さんの話を聞きて

先輩の話を聞きて胸うたる涙こらへて天井を見る

長崎大教三　奥村市郎

青年研究発表を聞きて

天皇(すめらぎ)の御心語る先輩の言の葉聞きてまぶた熱くなる

早稲田大政経二　内海勝彦

鼻をつく硫黄の臭ひのするどさに体の中にしみ入るかと思ふ

福岡教育大教二　井上貴詞

我が語る拙き言葉を真剣に聞きにし友をうれしくぞ思ふ

九州共立大経一　町田豊彦

バスの中望む気持ちとうらはらにはれざる霧に心いらだつ

九州大理四　多久善郎

和歌創作の折に

辞書をひき言の葉選び書く友の真摯な態度吾も学ばん

熊本大理二　那須三元

霧深く妙見岳には登れぬと先輩(とも)の語りぬいとど口惜し

第七班

九州大文四　前原幸博

こみあぐる思ひのたけを言の葉に言ひ尽くすことの難しきかな

早稲田大政経一　三舛清美

バスの中に流るる島原の子守歌しばし心の安らぎおぼゆ

長崎大教二　藤井隆司

歌を詠むむつかしきこといまさらに我のこころを悩ましにけり

岡山大大学院一　稲森龍平

地獄巡り霧とまじりてたちこむる硫黄のにほひ胃に染むごとし

亜細亜大経二　武井将明

友どちに我の気持ちを知らせたく言の葉選ぶむづかしさかな

日本経済短期大経営一　後藤繁見

霧の中地獄めぐりに来て見れば硫黄の煙り立ちのぼるかな

熊本大工四　池松伸典

写真撮影の折

たちこむる霧はひととき晴れ渡りこの時ばかりとフラッシュ光りぬ

第八班

長崎大経三　北林幹雄

朝の集ひにて

朝霧のたちこむるなか日の丸の目に映え見えて美しかりけり

福岡大工二　疋田真

幼児(おさなご)は目ざとく甲虫を見出して「ぼくも欲しい」と歩み寄り行く

熊本大医二　東兼充

班長の言はれし言葉身にしみて帰りて後も忘れじと思ふ

亜細亜大経営二　今井洋一

仁田峠美しきぞと思へども霧たちこめて雨も降り来る

西南学院大文一　有江淳二

友どちのまごころこめし言の葉にふさぎをりたる心ひらかる

大阪大人間科学三　小南浩一

今林先輩の御講義をききて

友みなと声をいだしてよみゆけば知らず知らずにちからわきくる

鹿児島大教三　篠田哲秀

朝風にたなびく日の丸見あぐればすがしきこころし身の引きしまる

九州大医二　笠晋一郎

けふの日も素直な思ひ友どちと語りあはんと思ひ定めぬ

岡山大大学院一　佐藤信彦

輪読に臨みておもひ述べなむと思へど言葉出でず悔しも

第九班

亜細亜大経一　小俣新一

霧深し雲仙の地にバスハイク見渡す景観さびしく思ほゆ

長崎大教三　板垣雅勝

来ぬものと思ひし友が手をあげて近づきくるはうれしかりけり

熊本大工二　内海弘

入浴に友が行きたる一室で雨音聞きつつ和歌を詠みけり

熊本大医一　古井博明

たちこむる霧の薄れしところには地獄のお湯ぞわき出づるかな

西南学院大経二　小嶺和弘

熱のある意見とびかふ討論で我の未熟さ感じたりけり

東洋大文三　積是明

耳もとに鳴き声たつる蚊とともに眠れぬ夜を過しけるかも

九州大法二　加藤多夏詩

ホテルロビーにて友を迎へる

ぞくぞくと集まり来たる友の中に我の誘ひし友を見出しぬ

早稲田大社会科学二　阿川信次

君が代に合はせて上る日の丸をひたに見をればば心すがしも

第十班

西南学院大法三　布野良明

声かけし友の姿は見えねども遠く呼び合ふ雲仙地獄

熊本大理二　松井裕次

仁田峠見わたすかぎり霧の海天にのぼりし心地するかな

地獄にてけむりのなかに鳩を見てわれ目をみはり友につたへり

亜細亜大経営四　鹿島洋一郎

雲仙に着きし我等を受け入るる友等の姿生き生きと見ゆ

君が代を友等と共に歌ひたる我は身体のふるふを覚ゆ

大阪芸術大芸術三　小川俊彦

車より外に出づれば霧の濃く冷き風の吹きつけ寒し

熊本大工四　折田豊生

はりつめし心の中はその面にあらはれてけり見るにすがしも

福岡大法一　源嶋秀治

身の周り霧立ちこめてその様は昼とは思へず我驚きぬ

第十一班

亜細亜大法一　安田利雄

輪をつくり意見を述ぶる友の目に燃ゆる血潮を感じ得るなり

鹿児島大農四　吉浦大志博

友どちと硫黄吹き出す道中をくさぐさのこと語りつつゆく

早稲田大社会科学二　橋本雅哉

ひたすらに思ひを語る友の目に引き込まれゆく我の心は

福岡大法三　黒岩真一

合宿教室開会式が近づきて

時せまり未だに着かぬ友どちをロビーの前にて待ちわびにけり

やうやくに見え来るバスに今度こそ友乗れるかと胸騒ぎたる

中村学園短大家政一　脇田智行

鳴く蟬のはかなき命その命人の命と同じなりけり

九州産業大商二　塚本英昭

先輩の気迫みなぎるお言葉の一語一語が強く胸うつ

長崎大教二　柳井義孝

吉田松陰の書を読みて

古の人の語りし言霊は吾が魂を揺り動かしぬ夏の日の夕暮れに鳴くせみの声雨のまにまに聞えくるなり

熊本大教四　堀口八郎

君が代に合はせて上る日の丸に身をも心も洗はれにけり

第十二班

亜細亜大法四　須田清文

山田先生の御講義をお聞きして

戦後思想の根底するどく指摘さるる御言葉ひしと我に迫りぬ

熊本商科大商四　中村克博

友どちとバスに乗り込み目指し行く仁田の峠は霧のさなかに

富山大経四　吉田敏雄

友どちと歌創りたるその部屋につくつくぼふしの声なきわたる

鹿児島大教一　寺地光博

帰阪する同宿の友を送りて

分け合ひて持ちたる荷物の重さなど忘れてしまふ友との会話

わが友を見送りし後の帰る道で何ともいへぬさびしさわきつ

九州大法一　金子光彦

霧ふかき仁田の峠に降り立てば風強くしてわれ立ちすくむ

熊本大工三　森誠二

白霧の中より出でし杉木立ち直き姿のしるしなりけり

第十三班

鹿児島大農三　中村英之

今林先輩の御講義をお聞きして

御言葉のしらべのうちに松陰を慕はるるお心あらはれてをり

東京大法三　豊岡俊彦

待ちかねし登山の朝になりたれど山は隠れり深き霧にて

晴れの日は大阿蘇までも見ゆといふガイドの声に霧をただ見る

熊本大法文一　緒方啓一

霧深き雲仙の岳に風吹きてわが心まではるる思ひす

名古屋工大工二　黒崎稔

混沌の中に真実求めたくここに集へど一歩も進まず

中央大経二　岩崎博

硫黄噴く地獄のみちを新しき友と語りつつ歩みゆきけり

九州大工二　永江勝則

種々の思ひはあれど言の葉の見つからざりしがくやしかりけり

西南学院大商三　坂本則夫

なやみつつ歌つくりをればわが心みだすごとくにカラスと蟬鳴く

長崎大教一　山野光治

大君の民思はるる御言葉に喉につかへし我が言葉かな

第十四班

亜細亜大法二　大塩耕三

小雨降る峠に立ちて友どちと語らふ時の短く思はる

西南学院大商二　松永直之

真剣に吾と語りし友の瞳はくひ入るやうに迫りたりけり

福岡歯科大歯四　東山隆勇

名も知らず黄色く窓辺に咲く花の風に吹かれていと可憐なり

防衛大二　船越長弘

山深き舗装されたる坂道をゆるりゆるりとバス登りゆく

九州大工四　山根清

味酒先輩の発表を聞きて
天皇と智恵遅れたる幼子の心は一つ結ばれにけり　高崎経済大経四　中村春洋

合宿に来る船中にて
甲板に立ちて眺むる波の間にきらきらに朝日照り返すなり　慶応義塾大経一　藪下眞宏

心こめ語りたまへる師の君のお声を聞けば恥づかしくなる　熊本大工二　松嶋司郎

講演のあとに一服ふかしつつじつとことばをかみしめてみる　早稲田大二文一　小林俊朗

味酒さんの発表を聞きて
愛づる児の優しき心あらはれし話をきけば心打たれぬ

第十五班

東海大理一　徳永修
雲仙の木々の緑にわたる風このここちよさ誰に語らむ　熊本大教四　諸熊明彦

松陰の書き止め置きし言葉草その一つ一つの我をひきしむ　慶応義塾大法二　伊佐幸雄

言の葉のひとつひとつにこめられし熱き気迫の胸に迫りく　九州大文一　長野秀樹

討論の時間は既に終れども一生懸命話しは続きぬ　高千穂商大商二　鈴木収

雲仙の宿に憩ひて峰々のかすむを見つついにしへ思ふ　西南学院大法三　古賀直司

初めてに会ひたる友と書ひろげ読みすすみゆくはうれしかりけり

第十六班

福岡教育大教一　大石育郎
山頂で歌つくらんと悩みたる友の瞳はいとをかしけり　亜細亜大法一　望月俊男

ぼこぼこと音出しわきくるゆけむりがいにしへのごと不気味なりけり　長崎大水産一　利根鉄也

きのふ聞きし陛下の御歌思ふとき以前の吾をはづかしと思ふ　九州大工二　久米秀俊

雲仙ののどかなる山を背景にのぼり激しくはためけるかな　熊本大医二　有馬宏

思ふことなかなか友につたはらず気持あせりて心みだるる

みだれたる気持も友と話しつつ道を歩けばなごみゆきけり　中央大法二　筒井晃治

松陰の魂問ふ友の一途さに地獄に消えし殉教者思ふ　鹿児島大理二　福元宗徳

熱水を浴びても未だ志曲げず殉ぜし信徒の在りとふ

第十七班

九州大医二　長澤一成
夜久先生御講義レジメ中の茶谷武氏の遺書を読みて
水茎の跡も激しきますらをの残しし文に触るるぞうれし

ますらをの親しのばるる言の葉に思はず胸のつまるをおぼゆ

開会式にて
なす事をすべてなしをへ友どちの集ふを見れば心高なる　玉川大文四　組山克郎

大君の御歌は心に響かぬかと語る友の目涙あふるる　鹿児島大農二　網屋成人

ガウガウと湯煙り吹き出す地獄にて老婆声あげ卵売りけり

高千穂商大商一　野　口　　功

御講義の合間合間の休息に心の安らぎしばし感ずる

福岡教育大教一　森　本　久　雄

窓の外に流るる霧のうらめしやさぞ美しきながめならむを

亜細亜大経三　鎌　田　弘　行

地獄より宿に帰りて我友と楽しき時を過しみむかな

長崎大教一　松　尾　文　雄

先輩のがんばれよとの言の葉はつかれし体に良薬となりぬ

熊本大医四　貞　島　博　通

霧中をくぐり登りし仁田峠肌ほの寒き流れ雲かな

岡山大工三　桑　原　研　二

講義の後部屋に戻りてのむタバコこれほどうましとは思はざりけり

第十八班

長崎大薬二　三　根　　光

友どもと語らふことのすばらしさ激論の後のなごみひとしほ

九州大工一　弓　立　忠　弘

雲仙のながめを見むと登りしに霧にかくれて残念に思ふ

高千穂商大商一　水　野　裕　行

ふるさとの声がききたく赤電話話はづめど小銭切れけり

神奈川大短一　白　川　元　廣

風呂上り浴衣を着れば父母の着物買ひくれしこと思はるる

九州大理二　利　光　賢　一

美しき祖国の命思ひのぶる我が友どもに共感覚ゆ

西南学院大経一　木　下　益　美

先生の御話聞けるうれしさに講義へむかふ足は早まる

第十九班

九州大法一　大　田　明　登

強風に翻弄さるる木の如く乱れてやまぬわが心かな

宮崎大農三　山　口　尚　志

師の君の心こめたる言の葉は怒濤の如く胸に迫り来

亜細亜大経二　岩　間　　進

雲仙の霧たち込める山々よ早く晴れろと願ふ我なり

福岡教育大教一　高　嶋　富士夫

とつとつとつたなく語る言葉まで真剣に聞く友ありがたし

熊本大工二　佐　伯　謙　介

霧雨に道路整備をする人のぬれたる髪になんとこたへん

東京大法四　小　柳　志乃夫

味酒景子さんの発表を聞きて

叱りつけし子は先輩にはづかしげにあやまりぬといふ「さっき　ご・め・ん・ね」と一音一音くぎりつつ

「さっき　ごめんね」と一音一音くぎりつつ智恵たらぬ子はあやまりぬといふ

先輩の教へ子を思ひてよみたまふみうたを聞けば胸のこみあぐ

○

大君は上むきたまひこみあぐる涙をひたにこらへましぬと

大君の幼き子らにそそがるる御心おもへば涙あふるる

日本大大学院二　橋　本　康　二

真心で語らふ友のまなざしにいまだ知らざる世界を見たり

松本歯科大歯二　石　亀　裕　通

年老いし父母を思ふと我が心ただありがたく思ふのみなり

第二十班

西南学院大法二　酒　村　聰一郎

おのもおのも心打たれし言の葉に思ひ寄せつつともに読みゆく

もろともに気迫こもれる御文をば声を合せて読むはすがしき

友どもと声を合せて読むほどに「みな同胞(はらから)」の言葉浮び来

東京大教養一　平　嶋　彰　英

我胸に思ひたる事伝へむとただひたすらに言葉続けぬ

広島大政経三　竹　山　隆　善

霧深き林の中ゆ二つ三つひぐらしの声聞えくるなり

長崎大工一　白　石　幸　也

先人の御歌の中にしのばるる素直な気持我は知りたる

中央大法二　畑　中　良　二

朝早き集ひの時の体操に若き力の息吹き感ずる

九州大医二　古　田　　耕

外つ国に旅立つ兄に思ひをば残して来たりぬ雲仙の地に

熊本大薬二　小　山　喜　昭

精薄の子らを思ひてうたふ声聞くにしたがひ涙こみあぐ

第二十一班

中村学園短大家政一　石　崎　幸　伸

真剣な友のまなざし見し時に眠けもはれてふるひ立つなり

中央大商一　岡　本　恭　明

まごころを持ちてあたれば必ずや人はうちとけ理解するてふ

東京工大工三　皿　田　　宏

雲仙のふもとに生まれし川崎君雲仙の見えずもどかしといふ

九州産業大商一　久　我　隆　昌

旅だつ日友と語りし我が気持とめがたきほど不安ありけり

九州大法二　緒　方　嘉　祐

先輩は日ごろつまれし研鑽を熱き調子で語りかけらる

先輩の机につきし両の手の小さき震へに圧倒さるる

長崎大教一　川　崎　泰　孝

真心をこめて語らむ友どもとここにつどひて夜ふくるまで

亜細亜大法四　池　田　　茂

己が意を伝へんとする気はあれど誠意たらずやくやしかりけり

鹿児島大教三　橋　口　丈　志

いかならむ友の来るかと我が胸は次第次第に高まりてゆく

鹿児島の友の姿の見えし時思はず我は手を上げにけり

第二十二班

九州大理三　丸　山　正　雄

松陰の生き様語る友達は机の下にこぶしにぎりぬ

鹿児島大工二　城　戸　　昇

流れくる霧の冷たさ身にうけて地形の相異はだで感ずる

高崎経済大経四　大　場　昭　博

あさはかなおのれの思慮をはつきりと言はれしあとのすがすがしさよ

鹿児島大水産二　姫　野　政　直

真直ぐに霧の流れに幾本も立ちをるひのきに心うばはる

熊本大工三　原　田　　保

晴れし日には阿蘇も見ゆらし峠には黄色き花の咲きてありけり

足元に広ごるうまき景色をば見たく思へど霧のふかしも

張りつめし心もしばし放たれて友と語りつ歩む楽しさ

九州大理一　白水重憲

きり深くたちこめゐたるその中を歩む山路も又楽しかり

立ちこめるかすみの中を先に行く友の姿が頼もしくみゆ

独協大法一　百崎　眞

濃き霧に姿を見せぬ景勝は遙かなりとて伝へ聞くのみ

亜細亜大経二　日根野谷　雅人

歌作る友どちのさま見てをればなれぬことゆゑ苦労覚ゆか

第二十三班

福岡大商二　原田憲治

あと四日あとは三日と思ひつつ別離の悲しみ日々にせまれり

窓につき霧にとびちる白き蝶雲仙の中へ消えて失せけり

長崎大医一　金谷浩一郎

霧の中妙見岳を仰ぎみる友どちの顔すがすがしきかな

岡山理科大理三　栄野和光

車窓にも糸引くしづくしたたりてバスは霧深き雲仙を行く

九州大工二　岩坪哲四郎

雲仙は我も学びし山なりと兄は語りて我を送りき

雲仙へ走るバスにも合宿のバンフを持てる友のゐてうれし

熊本大工三　浜田善信

先輩のつくれつくれと言ふ顔をじつと見をれば歌生まれけり

西南学院大商三　宝辺成二郎

懐しき友の姿を見つけ出し顔ほころばせわれ近寄りぬ

佐世保にて再会を誓ひし友どちを幾度捜せど顔見当らず

高崎経済大経四　後藤邦夫

和歌詠まんと三十一文字をくりかへしくりかへし数ふわが身なりけり

第二十四班

京都大農三　種村修

友どちの言葉を通しかよひくる一ついのちがうれしかりけり

亜細亜大経営二　遠藤敏彦

君が代が朝の広場に満ち流れ今日もやるぞと決意固める

熊本大医二　福田誠

眠りゐし時の話を聞かるればいかに答へん答ふすべなし

福岡大経三　田中利久

友どちの声の残りて耳熱し霧雨深き仁田を歩めど

岡山商科大商三　森脇一人

今日よりの我を思へばまたかなし師の意わからずたちすくむのか

早稲田大社会科学一　尾崎浩

初の皇居参賀にて

大君にあひまつらんとたまじやりをふみしめゆけば胸のたかなる

まちわびしおでましの時せまりきて我いくたびも時計をみけり

万歳と声高らかに叫ぶ時日本に生まれし喜びを知る

九州大法一　沢村幸夫

和歌づくりこれほどつらきことならば『短歌のすすめ』読み来しものを

第三十一班

熊本女子大文家政一　松村尚子

霧深く何もみえない雲仙に友の言葉のみ聞こえけるかな

鹿児島大教三　別府清子

名も知らぬ黄色き花の後ろにはあたり一面霧の海かな

福岡教育大教三　杉野明美

友どちとバスに乗り込み散策にむかふ心はは

づみたりけり

国立名古屋病院看護学校二　大　同　早　苗

ふるさとをはなれて遠く来てみれば霧立ちこめて心淋しも

長崎大教一　三　原　三主子

先輩の心のこもるお話しにおもはず涙のあふれくるなり

九州女学院短大英二　尾　谷　青　子

窓の外のま白き霧を眺めつつ師のみ言葉を思ひかへしぬ

福岡大法一　安　田　美　弥

霧流るる山かげに生ふる杉木立墨絵のごとき姿あらはす

福岡女子大文三　光　山　香奈子

一ことも聞きもらさじと先輩の面輪みつめて聞き入りにけり

第三十二班

福岡女子大文三　中　村　恵　子

感じ得ぬこの我が心われながら悲しくもあり歯痒くもあり

鹿児島大法文三　續　久美子

新聞紙にすわるやうにとすすめける車中の人の心やさしき

鹿児島大教三　黒　木　美智子

砂漠にて働きませる日の本の青年の姿たくましと思ふ

長崎大教一　柴　田　浩　子

をりをりに伝はる友のまごころに我が胸内も開け行くかな

福岡教育大教二　伊　藤　智恵子

オルガンに寄りかかりつついづみちゃんは小さき声でごめんねと言ふ

先輩は思ひもよらぬ言の葉に我を忘れて聞き返しぬとふ

長崎大教二　佐々木　緑

をみなとて師の遺されし志心にきざみて我は生きたし

長崎大教一　一　瀬　節　子

すがすがしき朝の集ひに友を見つけ声かはしあふことのうれしき

熊本女子大文家政一　宮　原　佳　子

緑濃き遠き山脈眺むればげに仙人の住みつべきかな

玉川大文二　加　藤　詩麻音

目をとぢて御歌よまれし先輩の素直な御心つたはりて来ぬ

第三十三班

長崎大薬一　辻　弥　生

三日前初めて会ひし友なれど笑み交しあふ仲とはなりぬ

九州女学院短大英一　上　村　奈保美

台ひとつ隔てて語らる師の君のまなざしみつめじっと聴き入る

福岡教育大教三　谷　口　敏　子

先輩の壇上に立ちたる姿見れば我がことのごとく心落ちつかず

一言づつ話し始むる先輩を見入りてをれば胸のつまりぬ

長崎大教三　眞　崎　典　子

先輩のまごころこもれる言の葉は部屋の隅までに響きわたりぬ

長崎大教二　佐　野　善　子

立ちこめし霧に行く手の見えぬ如く我がつかめずとまどひにけり

作陽音大音一　久保田　羊　子

合宿で高校の恩師の姿を見て

やせられしごとくに見ゆる先生の疲れをみせぬ笑顔にうたるる

福岡教育大教一　中　島　恵　子

心こめ語る言葉に聞く我もいつしか涙のあふれくるなり

鹿児島大教三　斉　藤　利　恵

鹿児島の友らの着くをロビーにていまかいまかと待ちわぶるなり

第三十四班

山口大文理四　脇　村　典　子

国のため生命を捨てし先人の歩まれし道学びてゆかむ

福岡教育大教一　井　上　磨　美

登りゆく車窓よりみれば遠き海にかすかに浮かぶ天草の島

長崎大教一　城　戸　佐和子

立ちこめし霧に姿を隠しつつ樹々は静かに枝を張りたり

福岡女子大文一　林　里　美

玄関で我をみとめて出迎ふる先輩の笑顔うれしかりけり

福岡教育大教二　河　永　真由美

記念撮影にて

友どちとしばふの上にゐ並びて霧の晴れ間をいまかと待ちぬ

鹿児島大教三　黒　木　美都子

常日頃心にかかりしことなれば御言葉胸に深くひびきぬ

第三十五班

長崎大教二　友　田　久　美

青々と茂れる木々を見て思ふわれの行く道正しくあれと

長崎大教一　北　村　由美子

雲仙の思ひ出留めんと思ひけり鉛筆書きのその絵はがきに

長崎大教三　藤　谷　京　子

わきあがる白煙の中友どちと語りつつ行くことぞたのしき

鹿児島大教二　深　町　美　代

買ふ人に土産渡せるおばさんの天草ことばに思はずききいる

日本経済短大経営二　小　坂　美恵子

心閉ぢわからぬことに目をつむるこんな己れをただただ悔いる

熊本短期大教養一　恒　松　まち子

髪ぬらしうつむき抱き立てる人影のかすかに見ゆる深霧の中

熊本大理二　村　上　佐代子

「からゆきさん」の物語を聞きて

ロノ津ゆおのが身ひとつで旅立ちし黒髪の乙女思へばかなし

福岡教育大教二　平　山　とき子

霧の中歩みて行けば立ちこむる硫黄のけむりのあたたかきかな

亜細亜大経二　依　田　正　美

道すがら楽しく語るこの友と会ひて三日とはとても思へず

第四十一班

八代市立第二中教諭　鶴　山　敏　喜

音もなく朝霧流るる雲仙に若者集ひて日の丸を揚ぐ

八代市立龍峯小教諭　岩　木　浩　俊

君が代を声高らかに歌ふ友の気迫せまりて心根にひびく

八代市立第八中教諭　江　崎　正　護

雲仙の霧にかくれし松のかげ山水の画を見るが如くに

八代市立第二中教諭　早　川　富　貴

雲仙に道を求めて集ひたる友のまなこの光りかがやく

八代市立第三中教諭　黒　川　嘉　正

白痴の子いとしと語るうら若き女教師の声ひびき流る

久留米市立西国分小教諭　富　松　義　喬

宿にまつ師へのみやげとうつぎつむをとめのかみに霧の吹きつく

第四十二班

福岡県立三池高教諭　石　井　利　男

霧雲に見たき景色のとざされていつの日かまた来むと思ひぬ

久留米市立城南中教諭　豊　福　定　行

なき母に不幸の罪をわびをれば生ある日にと心せめらる

大豊工業(株)　田　中　靖　久

乳色の霧たちこむる野辺に咲くしもつけ花のくつきりあざやか

第四十三班

熊本市立城南中教諭　益　田　勉

壇上のか細き乙女の言の葉にただひしひしと胸をうたるる

(株)ミズケイ　不　破　嘉　照

味酒さんの話に心熱くなりおもはず目頭そつと押へる

福岡県立三池高教諭　青　柳　正　文

淡々と体験を語る我が友に心洗はれ新たなファイト湧く

福岡県立三池高教諭　佐々木　重　利

ひたすらに小石頼りて這ふ蟹の赤き小さき姿いぢらし

(財)広島平和文化センター　鳥　尾　智　寛

花咲きし頃は終れど名にし負ふミヤマキリシマつひに見にけり

大豊工業(株)　沢　田　伸

仁田峠の霧深けれど山の中にはひればめづらしき花の咲きたり

第四十四班

福岡県立三池高図書館　池　田　満智子

雲仙の景色は霧につつまれてバスのガイドもとまどふごとし

久留米市立安武小教諭　藤　好　香代子

雲仙に来る前の日

雲仙ゆはやく来よとぞ電話くれしみ友の声のうれしかりけり

九州大医学部附属病院薬剤部　小　田　雅　代

「美を求める心」の輪読をして

文章を読み返すごとに新しき言の葉にふれ線をひきゆく

博文堂書店　辻　田　恵美子

夏草の御製をよみてわがこころ教へられたる事多かりき

見学参加者

久留米市の教育を明るくする会・常務理事　田　中　義　人

憂ひつつ集ひ来りし研修の友と語れば心はれゆく

出光興産(株)店主室　矢　野　健

教へ子の真心語る若き師の誠にうたれ涙あふるる

出光興産(株)店主室　山　下　和　英

長崎の町にかがやく灯の光に願ふはひとつただ平和のみ

亜細亜大学留学生センター　青　島　勉

仁田峠霧に閉ざせどひぐらしは我世の春と鳴き競ふなり

亜細亜大学広報室　加　藤　幸　雄

胸を打つ友の話に聞き入りてシャッター切るをしばし忘るる

ひたむきな友の姿をとらへんと我を忘れてシャッターを切る

事務局

国民文化研究会職員　永　沢　弘　子

顔会へば笑みこぼれ来る一年に一度まみゆる人々なるに

いつの日も言葉を交はす時もなく別れ来にけりその人々と

幾年か通ひ続けし九州も今年限りとなりにけるかな

若き日のかたみとならむ南国の水の清さも空の青さも

国民文化研究会職員　関　口　牧　江

人の世のなかばを過ぎて生死(しやうし)思ふ我が眼に痛し乙女らの笑み

福岡県立嘉穂高校三年　下　瀬　由香理

小野吉宣先生のお話の放送を聞きて

いつになく高く聞こえる師のみ声心に映える
師の瞳の光

福岡県立嘉穂高校三年　人見泰子

朝昼晩小銭を両手に赤電話心にしみる優しき
母の声

福岡県立嘉穂高校三年　溝口由美

尊きはやさしき人の思ひやり聞く人の目に涙
たたふる

福岡県立三池高校二年　伊藤義郎

風の音に負けじと歌ふ蟬の声ミィーンミィー
ンと夏を知らせる

熊本市立高校一年　西川京子

霧雨にかすみてみゆる山なみに一足先に夏を
忘るる

熊本県立第一高校一年　松本明子

アルバイト初めてなのであせるだけ曜日の区
別もまるでわからず

熊本県立済々黌高校一年　園村康之

一日の仕事を終へてとこにつく何も思はずた
だねむるだけ

熊本・真和高校一年　迫田明彦

ドタドタと目ざましがはりの足音に目をさま
し行く朝の体操

（記録班）

元最高裁秘書課・速記業　西川伍朔

味酒さんの青年研究発表を聞きて

身障児にからだ打ちつけたちむかふ若き女教
師の声高ぶらず

泉ちゃんの「ご・め・ん・ね」といふその言
葉わがことのごと胸とどろきぬ

司会者の「起立」の声も消ゆるかに堰切るご
とく拍手鳴りやまず

言葉なく肩叩きゐし師の君の笑みし瞳はうる
みてありき

大学教官有志協議会

高崎経済大学教授　高木　尚一

霧深き仁田峠はしづかにてバス降り立てば風の冷たき
横なぐりに霧の水滴吹きつくる見はらし台に友ら並み立つ
まなこしかと霧海にこらせど底知れぬましろき霧雲深さ知られず
みやまきりしま花咲く頃はいかばかり美はしからむこれの景色は
バスに乗り見晴らし台をさかりゆく心重たく友ら言無し

亜細亜大学教授・教養部長　夜久　正雄

もの書くと宿に残れど友らゆく仁田峠の見はらしおもほゆ
霧雲のたえまたえまに天草の海さへ見えし大き見はらし
名にしおふ霧雲しばしうち晴れて大き見はらし友らにあらな
見はるかす窓べの谷は霧こめて近きしげみに小鳥のこゑす

順天堂大学教授　鈴木　満男

「君が代」聞こえ国旗はためきのぼりゆく峡に雲こめ霧ながるる今朝も

国民文化研究会

国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授　小田村　寅二郎

木内・衞藤両講師を見送りて

大人二人み心こめて日を継ぎて講義終へられぬ第三日目は
十八年欠かさず来ませし七十八高き齢の木内大人はも
オセアニアゆ帰り来ませるその朝け乗り継ぐがごと来ませる大人も
お二人の大人はみつとめ終へまして面あかるく宿発ちたまへり
昨夜より霧立ちこむる雲仙をあとにみ山を去りゆきましぬ
この霧のもなかに今日はみ友らの仁田峠ゆく日にてありけり
すばらしき峠の眺めこの霧に見るによしなからんさぶしからずや

熊本女子商業高教諭　瀬上　安正

静かなる朝もやかかると思ひしにはげしき風の吹きてやまずも
強くなりまた弱くなりみ空吹く風のまにまに旗ははためく

八代市助役　加藤　敏治

北国の大間のみ崎に君たちて我らが集ひ偲びませしか
君が影見えぬさびしさにぎはしく友らとともに語らひをれども
長伏の病いえゆく喜びを君につげむと思ひ来にしを
昨年の夏つどひのにはゆみ情のこもるみ便りたまひし君はも
今年はもつどひし友のみ名もそへ君なぐさむる便り送らむ
みちのくの友偲びつつ窓越しに眼路をおほひし霧をながむる

住宅金融公庫参与　島田　好衛

「新しき日本は近く生まるる」てふみ言葉聞けば力湧きくも
とのぐもる国の行手に朝日影射しくるごとき師の言葉はも

㈱宝辺商店社長　宝辺　正久

みたままつる折しも大きいかづちの轟きわたるかしこかりけり
とどろきて遠き峯に消ゆるいかづちをみたまのこゑかと聞きゐたりけり
なつかしき友ら偲びてこのにはにみまつり仕ふにぎにぎしくも
若き友らとゐならびて聞く祭文にうせにし友ら顕ちて偲ばゆ

国のためうせにし遠き祖達とともにや聞かむ
今上御歌を
霧深きみ山の夜は雨の音のしづかに聞こゆまつりのにはに

福岡教育大教授　山田輝彦

ひたすらに心傾け語りゆく君がことばに涙溢れく
精薄の施設近江学園に陛下迎へしその日のことども
仰むきて涙こらへてゐませしとふ幸うすき子のさだめ思ひて
おんまなこしばだたきつつ幸うすき子らの楽の音聞きたまひしか
言絶えししじまの中に流れけむその楽の音をしのびやまずも

法政大学企画調整室第二部長　香川亮二

今年はつひにゆけずなりぬと告ぐる友の声忘らへず時は過ぎゆけど
はるかなるみちのくの国に友は今雲仙の地を偲びてあらむか
み空ゆく雲よ伝へてよ雲仙の集ひのさまをみちのくまでも

玉造温泉・こんや別館館主　青砥宏一

大牟田市三池港にて

心しる友ら住みますまちなれば大牟田の地はしたはしきかな

今上天皇御製（昭和二十四年）

福岡県大牟田
海の底のつらきにたへて炭ほるといそしむ人ぞたふとかりける

大君はこの海底（うみそこ）に炭ほるといそしむ人らをたふとみたまふ
海底に働らく人らにみ心をそそぎたまふも有難きかな

横浜・舞岡八幡宮宮司　関正臣

なつかしさいはむかたなし一年をわかれすみたる友とあへれば
ひぐらしのなくを聞きたりあぶらぜみうるさく鳴ける声にまじりて
耳すまし聞くやひぐらし二つ三つ鳴き交すごとかすかに聞ゆ
鳴きやみて聞えず成りしその後は声聞くよりも淋しかりけり

青年研究発表

精薄のわらべのことばをさながらに聞けば思はず涙にじみぬ

福岡県立修猷館高教諭　小柳陽太郎

病癒えし加藤敏治大兄を合宿地に迎ふ

み病にたふれたまひしゆみ姿をつね偲びつつ今日迄は来ぬ
折々の電話の声にすこやかの君がみ姿偲びつつれど
君来ませる折しも君が書きませる文ありがたく読みつつありき
ただならぬおもひあふれたり亡き友を偲びたまへる君がみ文は
亡き友のみたまのふゆか合宿にかくすこやかに君のきませる
夜もふけし友のまどひにこやかの君がみ姿見るがうれしさ

福岡県立三池高教頭　小林国男

加藤大兄とお会ひして

病癒（やまひ）えて元気になりし先輩をこの合宿に見るがうれしき
病癒えてまだほどたたぬと思ひしにわが先輩は顔を見せけり
ひとときはみ病重くいかならむことになるかと案じたりしを
亡き友の生の証を書き留めんとの意志貫き給ふ病魔に克（か）ちて

高千穂商科大学助教授　名越二荒之助

まごころといふ言の葉はみじかけれどこもれる意味の深さ知らるる

吉野石膏㈱総務部長付　加部隆三

すめろぎを迎へまつらむと楽の音を奏でゆきしか滋賀の子らはも

指揮とりし子が天皇の御姿をうつつに拝し「デイ」といへるか
ゐやまひし再び楽を奏せりといふ子らのいのちよ愛しその言

㈱ファミリー常務取締役　松　吉　基　順

風すさび仁田峠は霧こめて四方の景色の見えわかぬかも
野岳なる天皇のみ歌しるせる碑拝しまつらむと思ひをりしに
高原は霧たちこめて間近なるうつぎの花の白きが眼にしむ
ここかしこみやまきりしま群れ生ふも花咲きをらぬはさびしかりけり
群れ生ふるみやまきりしま咲くころは雲仙高原美しかるらむ

熊本市立京陵中教諭　松　浦　良　雄

それぞれにまこと尽してはげみゆく若き会員たのもしく思ふ
一年の教へのあとを述ぶる君その言の葉に涙出できぬ

佐世保市交通局営業課企画係長　朝　永　清　之

たままつる斉庭つくりにみ友らといそしみをれば雨のふり来つ
友らみな汗してつくりし祭場に音すさまじく雨ふりそそぐ
雨よやめ雨よやめよといのりつつ見あぐる空はいよよ暗みぬ
雨足のはげしき中にみ友らはつくりし斉庭をくづしはじむる
とりくづしし品をはこびて新たなる祭の庭をつくりはじむる
み友らと心つくしてつくり上げし斉庭の祭り心またるる

熊本市立城西小教諭　満　崎　安

生命ある師の御言葉をかみしめて味はひをれば勇気湧きいづ

航空自衛隊第四術科学校防衛庁教官　村　山　寿　彦

動き出ししバスより前をふとみれば小田村先生の立ちてゐませり
先生は手をふりながらただひとりホテルの端に立ちてありけり
手をふりて見送りたまふ先生に心をこめて目礼をする

神奈川県立横浜翠嵐高教諭　国　武　忠　彦

朝おきて窓より見えし朝ぎりにめづらしきものみたる思ひす
軽やかに舞ひおりるがごとき朝ぎりに体つつまれうれしきここちす

九州労災病院神経内科副部長　田　村　潔

美しき師の御姿よ朗々と書よみませる師の御姿よ
師の御言葉力こもれりひしひしと我が胸内にひびき入るかも

土佐女子高教諭　井　上　佳　彦

夕闇の雲仙岳に霧かかりもみの林にひぐらしの鳴く

岡山市立芳田小教諭　波　多　洋　治

師となるてふ君のまなこはかがやけり教への道の思ひ語りて
君師となり誠つくして日の本の子らをはぐくめうまずたゆまず

新日本製鉄㈱工作事業部掛長　今　林　賢　郁

胸内の思ひのたけをそのままに語りゆくなり三人の友らは
ひたひたと心は満ちぬみ友らのすがしき言の葉聞きてしあれば

熊本市立藤園中教諭　北　島　照　明

合宿の事務の仕事に教へ子のいそしむ見ればうれしかりけり
病おしかけつけくれし教へ子はプリント刷りにいそしみてをる

日産自動車㈱法規部　古　川　修

慰霊祭の準備

霧深きホテルの庭に友どちと重き台座を運び

来るなり
庭裏の竹藪へ行きころあひの竹を見つけて切り倒すなり
ぽつぽつと大粒の雨降りはじめこよひの祭り案ぜられけり
降りしきる雨足強く神域の台座の白布濡れてゆくなり
友どちは雨にうたれて整へし祭りの道具運び入れけり
友どちと力合はせて行ひし祭りの準備楽しかりけり

熊本県立熊本西高教諭　片岡　健

今年またこれの集ひを友皆と力合はせて営みゆかむ
合宿にまた勧誘に励み来しこの一年のながくもあるか
大君のみ歌を友のよみゆけばおのづとわが身のしまるを覚ゆ

熊本県・五木村立第一中教諭　永井　幸男

濃き薄き緑連なる雲仙の雄々しき山のわれにせまりく

東急建設㈱技師　奥冨　修一

今林先輩の御講義を聞きて

壇上ゆ語りたまへる言の葉は力こもりて自信にあふるる
息をつくひまもなきがに次々と語りゆく先輩の言の葉せまりく
いとまなき勤務をもてる先輩なるにかくまで心をつくされたまふか

講談社広告局　磯貝保博

友どちの苦労も知らで降りしきる雨空みあげ心くぐもる
まごころをつみかさねつつ今日までの苦労を偲べば口惜しこの雨

建設省建築研究所研究員　大岡　弘

今林先輩の御講義をお聴きして

ききなれしみ声するどく説き給ふ兄の調べの高なりてゆく
生き死にはまづすゑおきて誠道身をもて歩むと記されし文

福岡県立嘉穂高教諭　小野吉宣

アーリントン墓地の陛下をしのび

礼砲のとどろく中を大君は花輪を持ちて進みたまへり
黙禱をささげたまへり大君はかつての敵の兵士のみたまに
くしきかなアメリカびとももろともにみたま鎮めに心こめけり
おとづれし静謐のうち日米は怨讐こえて黙禱しけり

福岡県立三池高教諭　志賀建一郎

暗闇に稲妻走り雷鳴も轟きわたりて嵐となりぬ

㈱千代田コンサルタント　松田信一郎

霧深くけしき見えねどみ友らと地獄めぐりてゆけばたのしも
ひさびさに会ひ得し友と語りつつ地獄路をゆけばせみの声する

大阪・清風学園高講師　東中野　修

ら行をば発音できずデイと言ひて号令かけし子供のゐしとふ
突然の号令ききて居あはせる人々はみな最敬礼すも
そのさまを見られし陛下は上を向きこみあぐるもの抑へたまひたり
聞くゆくに我が胸内もつまりきてあふるる涙ほほをつたひぬ

海上自衛隊〝たちかぜ〟航海長　太田文雄

薄れゐしわが志師の君の御言葉聞きてふるひたちたり
大御歌日々に拝してひたすらにまことの道を励みゆきなむ

岡山大学癌源研究施設　田中輝和

今林賢郁先輩の講義を聞きて

至誠にして動かざるものなしといふ松陰の言葉の厳しくひびきぬ
松陰の御文読みゆく先輩の言葉は自づと高ま

りてゆく
心こめ松陰の至誠に連ならむいたらぬ我が身
ふり返りつつ
己が身のいのちのたけをつくしてぞ生きゆく
ほかに道なしと思ふ

水崎法律事務所弁護士　中　島　繁　樹

祭壇を造りてをれば立ちこめし霧はにはかに
雨となりたり

九州大学医学部大学院　前　田　秀一郎

地熱もてゆでし卵の白き殻むきつつ友と語り
合ひたり
皮靴の底を通してあたたかき地熱の足に伝は
りてきぬ
風そよぎ狭霧のきらふ雲仙に友と食ひたる卵
うましも

戸田建設㈱設計課　青　山　直　幸

部屋内(ぬち)に設けられたる祭壇に灯ともりて心し
づみぬ
みたまらを迎へむとすれば稲妻の青き光のや
にはに射しきぬ
みたまらの声とも覚ゆ部屋内に響きわたれる
いかづちの音は
祭文を誦み上げらるる師の君のみ声心にしみ
いるごとし
三年前癌にて赴きし祖母の顔の浮かび来りて
涙こぼるる
皆共に心合はせて「海ゆかば」歌ひてゆけば
胸高まるも

大成建設㈱福岡支店　山　口　秀　範

と絶えてはまた鳴き継ぐる蟬が音は聞けば聞
くまま胸にしみ入る

熊本県立松島商業高教諭　中　園　俊　郎

大岡先輩の発表をリハーサルの時お聞きして

かねてより心引かれし先輩の発表なれば心高
なる
ひとすぢにすめらみことのみ心を偲びてゆき
し先輩(ひと)のたふとし
すめかみの大御心を伝へんと心を込めて語り
ゆかれし
語らるる姿を見ればおのづから思ひの深さ伝
はりてくる
力込め訴へらるる先輩の声をし聞けば涙込み
上ぐ

博多高常勤講師　占　部　賢　志

松陰の御文に触れて己が道開くるよろこび語
りたまへる
友どちの語る此の文学びたる八木山の思ひ出
甦り来ぬ

福岡県立豊津高教諭　堀　田　眞　澄

松陰の言葉にふれて今日迄を導かれ来しと語
りたまひぬ

三井三池製作所技術部　坂　本　精　児

この霧が晴れてくれよと友どちとみたま祭り
の祭壇つくるも

日立造船㈱有明工場　高　岡　正　人

玄端と松陰の手紙に歩むべき師弟の道を見つ
け給ひし
教ふべきことどもありて教ふてふ友の言葉は
きびしかりけり
たのもしき友の言の葉聞きをれば友との縁の
ふしぎに想ほゆ
七年前初めてこの友訪れて語り明かしし冬の
夜想ほゆ
二人して杯交しくさぐさのことども語りし古
き宿にて
それぞれの進み行く道違へども励みて行かん
と契り結びし
今日ここに思ひのたけをせつせつと語る言の
葉胸せまりくる

国鉄小倉工場生産技術課　仁　多　永　夫

二枚目の写絵とらんと息つめし折から起こる
時ならぬ霧

熊本県立多良木高教諭　白　浜　　裕

いとまなき仕事のさなかに教へ子の顔みかく
れば心なごみぬ

田之上　正明

大いなる歴史を背負ひ努めらるる師の御姿に心ひかるる

東京都中野区立北中野中教諭　石井孝一

飾らずに語る言葉に精薄の子らを愛しむ思ひこもれり

全霊を一途にこめて子供らの伸びゆく姿守りたまふか

福岡市立吉塚中教諭　西原正博

あなかしこやすきわが身と御位につかれしをりも心正さる

九州大学工学部研究生　末次直人

雲仙のうましき宿に新らしき友らと集ひ嬉しかりけり

岡山大学大学院生　砂川芳毅

合宿をさらにすばらしきものにせむおのが力の限りを尽して

亜細亜大学職員　平槇明人

初日より楽しみに待てる山登る時の来たりてうれしかりけり

日本ユニバック㈱　大町憲朗

一年ぶりに会ふみ友らとつぎつぎに挨拶かはしうれしかりけり

昨年の己が班にて共に学びし四人の友とも会ふことかなひぬ

大牟田市立大牟田養護学校教諭　小田正三

教へ子のやさしき言葉を心こめ語らるる姿に涙出できぬ

北九州市立療養所松寿園技術吏員　森田仁士

警蹕のこゑひびくなかたちまちに御霊なるらしいかづちの落つ

鹿児島県輝北町立市成小教諭　町園朋子

迷ひつつこの雲仙に来てみればなつかしき友の姿ありけり

久し振りあひたる友と話しをればわづらはしきこと消えゆくここちす

熊本県御所浦町立小教諭　吉永美子

明治天皇の御製を拝誦して

夏草は払ふ後より茂れると天皇は歌はれ給ふ

力強く詠まれし御歌誦みゆけば青く茂れる草の浮かび来

踏まれても直ぐ起き上る夏草は雄々しき力持ちてをるらむ

福岡県添田町立添田小教諭　平山尚美

ことのはのひとことごとにおのがおもひ込めつつ友は語りゆきけり

泉ちゃんのやさしき心をすなほなる心もて受けとる友にてありけり

子どもらの心をいとどしのびつつ愛しみゆく友にてありけり

九大歯学部附属病院　原田美恵子

壇上に登りし友は心こめ教へ子のこと語りはじむる

体いつぱいでおもひのたけを語りゆく友の姿は胸にせまりくる

教へ子のやさしき言葉をいく度もいく度も思ひ返したまふと

福岡県大刀洗町立本郷小学園分校教諭　味酒景子

知識なくみなのはなしのわからぬとみともは胸のおもひをいだしぬ

討論のをはりしときはほつとするてふここちいだきし我友なりけり

思ひきめつどひに来ませる我友はいかなるきもちですごしたまひけむ

ことばつぎことばかさねて言ひけれどふさはしきことばのなんぞいでこず

鹿児島県上屋久町立小瀬田中教諭　大久保民子

凛としてそびゆる杉をやはらかく真白きもやの包みてをれり

天上を目指してますぐに伸びてゆく杉の木立のすがすがしきかな

福岡県岡垣町立海老津小教諭　大同玲子

生徒らに「他」につながりてゆくよろこびを

ぜひつたへたしと言ひたまふなり

鹿児島県高尾野町立小教諭　内　山　なな子

まみゆるを心待ちにし居りたれど都合いできて参加せぬてふ

次々に到着し来る御友らの中に後輩等を見ぬはさびしき

暁の露にぬれぬとかくまでに皇子しのばるる大伯の皇女

あとがき

秋も日ごとに深まってまゐりましたが、皆さんその後いかがお過しでせうか。いっしょに過した雲仙での研鑽の日々が、もう随分遠いことのやうに思はれます。僅か二ヶ月ばかりしか経ってゐませんが、皆さんお一人お一人の生活には、きっとさまざまな新しい事が起きてをられることでありませう。合宿でのご体験を、生き生きと甦へらせることは難しいことですが、その折に、皆さん各自が記された文章をこの中から見出されて、その折のご自身を再発見していただければ幸ひです。「合宿教室」の最後に〝走り書き〟していただいた皆さんの感想文と和歌とを編集したのが、この『感想文集』なのです。

この編集の作業は、皆さんの感想文を読ませていただくことから始めましたが、四泊五日間の合宿の各自の印象が、それぞれの文章に凝縮されてをり、しばしば心うれたる思ひがいたしまして、作業がなかなか進まず、たいへんに苦労いたしました。しかし一方では、文章を読みながら、皆さんお一人お一人に再びお逢ひしてゐるやうな感じがしてきて、楽しい作業でもありました。

㈠「感想文」について

原文の長さはさまざまでしたが、ページ数の関係で、執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、慎重に加筆しました。原文の味が損はれないやう努力いたしましたが、万一にも取り違へてゐるやうな箇所がありますれば、どうぞご容赦くださいませ。

㈡「和歌」について

合宿では二回にわたって皆さんとともに和歌をつくりましたが、一回目のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく本冊子の巻末に集録した「和歌詠草」のところに収めました。また、この感想文の執筆の折に書いてくださった第二回目のものは、それぞれの文の末尾に入れました。多くの方が三首も四首も詠んでをられましたが、スペースの関係で収録の数を抑へざるを得なかったことを、おことわりいたします。なほ、文字および文法上の誤りは、訂正いたしました。

『感想文集』作成のための第一回編集会議を、在京学生の寮である東京港区・白金台の「正大寮」で、八月十七日(水)の夜に開いて以来、夕方から深夜にかけて、連日、各自の勤務終了後の時間を利用して編集を進め、それが幾晩も続きました。「正大寮」に泊り込んで、そこから「勤め」に出た日もありました。土曜日の夜から日曜日にかけての作業も数週間つづき、さながら合宿生活の連続でした。それだけに、この冊子が出来上ってまゐりましたときの喜びも格別で、この『感想文集』をお読みになって、合宿での思ひ出を新たにしてくだされば、さらにどんなにか嬉しいことなのです。どうか全巻をご精読くださるやう、切願してやみません。

最後に、編集作業にご協力をいただきました国武忠彦・溝江優・奥冨修一・青山直幸・藤井貢・石井孝一・大町憲朗の諸兄と、「正大寮」の寮生、小柳志乃夫・須田清文その他の諸君に心から御礼を申しあげます。(古川修記)

〔資料〕
第二十二回〝合宿教室（雲仙）〟感想文集　非売品
昭和五十二年十月二十五日発行
編集兼発行者
東京都中央区銀座七―一〇―一八　柳瀬ビル
電話（五七二）一五二六～七
社団法人　国民文化研究会
理事長　小田村寅二郎
編集委員　古川修　大岡弘　広瀬清治　山内健生